

五百六十二年舊教の先遣者たる貴族が、某村落の新教徒を虐殺したので、この貴族(ギース侯)に反對して自由と生命とを保護せん爲め、不得止新教徒は戦を起すに至つたのである。それで、其後暫時の間は或は戦争となり、或は平和となり、又戦争となるといふ状態で、凡そ三十年間は非常なる困難と、劇烈なる戦争とが續き、爲に新教徒は大苦痛を嘗めた許でなく、全國は大災害を蒙つたのである。戦争の起つた時代の國王はチャールス第九世で、彼は僅か十歳にして即位し、それに彼は病身であつた爲に、その母は攝政として政權を握つたのである。其母の名はカタリナといつて伊太利人で、彼女は實父より悪謀を學びたるも、又その夫ヘンリー二世の在世中、種々なる恥辱を嘗めたので、たゞ夫の妾に依頼するを以て、漸く宮中に止る事を得たのであるから、彼女は勿論其状態にある事を不満足に思ひ、是非一回は權力を握らんとする希望であつて、夫の死後遂に若年なるわが子の即位するや、直に攝政となりて權力を握つたが、彼女は更に愛國の情もなく、たゞ權力を握るの心のみで、而して宗教的熱心もなく、たゞ舊教新教の徒をして互に戦はしめ、彼等をして微弱ならしめ、愈々全權を掌握せんとする希望を以て、新教徒を初め、國民一般に大災難を蒙らしめたのである。然るに漸く千五百七十二年に平和を結び、新教徒の貴族と國王の妹との結婚を以て、一致を表明する事により、新教徒の先遣者をパリスに召集したが、チャールスはコリニーと交る事により、彼が愛國心と眞實と智力とに感服し、父として彼を尊敬賞讃したのである。然るにカタレナはコリニーの勢力を妬み、必ずチャールスはコリニーをして大臣たらしめ、その指導に従ふに至らん、さすれば自然自己の權力の消失す可き事を恐れ、次第に悪計を巡らすに至つたのである。それで確たる事は解らぬが、多分カタレナの命を受けた某者が、コリニーを暗殺せんと企てたが、幸ひたゞ負傷したのみである。然るにカタレナはチャールスが愈々コリニーに同情を寄するを見、増々悪謀をこらしめて、嘗てにコリニーのみでなく、凡ての新教徒を虐殺せんと決心したので、彼女は種々なる詐偽を以てチャールスを誘惑し、終に彼等を虐殺す可きの命を發せしめ、聖バルトロマイの祝日の前夕、即ち千五百七十二年八月二十四日、コリニーを初めパリスに於ける有名なる新教徒、又全國に於ける多數の新教徒を虐殺したので、その數は確とは解らぬが、少なくとも一萬人からあつたといふ事である。それで羅馬法王はこの事件を聞き大に喜び、爲に大會堂に於て讚美の禮拜を執行し、且つ虐殺の状態を油繪に描かしめて此を掲げたので、これを以て能く法王がこの事件を是認した事が現れたのである。然るにチャールス第九世は後にこの事を悔み、二年を経て非常なる苦悶の中に死去したといふ事である。斯くして多數の新教徒は虐殺されたと雖も、殘れる徒は敢て是等の爲に失望落膽する事なく、寧ろその殘酷なる所業に對し反抗の心を愈々抱き、再び戦争を起すに至つたのである。其後チャールスの弟ヘンリー第三世が即位したが、之も平和を來すの能力なく、愈々混亂を甚しからしめたのである。ヘンリー第三世の死後殆んど血統斷絶の状態であつたが、たゞ即位す可きもの

史 會 教

はヘンリー第四世、即ちフランス第一世の妹の孫に當るもののみであつたが、然るに彼は新教徒であつたので、舊教徒は彼を國王と爲す事を固く拒み、殊にパリ市民は舊教を熱心固守するものであつた故に、都府に入る事をも強固に拒んだのである。儲ヘンリーは其性質大膽であり、又活氣に富るものであり、且つ種々なる技倆を有するものであつたが、併し彼には宗教の熱心なく、王冠を得んが爲に新教を棄て、舊教に歸依したので、漸く千五百八十四年都府に入りて即位するに至つたのである。之に由り長歲月の間の戦争も終局を告げ、公平正直なる政治によりて國家も幸福を受け、而して千五百九十八年ナンテス(Nantes)に於ける詔勅を以て、出來得る丈新教徒に自由を與ふる事となつたのである。即ち新教徒は自由に自己の信仰を有つ事が出來、その上パリスを除くの外、大概何地にても禮拜を爲す事を許可されたので、斯くして新教徒は自己の道を自由に守る事となつたが、國民中に新教徒の數は餘り増加を見るに至らなかつたのである。

第六十四章 和蘭に於ける改革

和蘭に於ける改革は、和蘭人が政治上の獨立を得るの機會となつた故に、第十六世紀の和蘭の歴史は、政治的歴史と宗教的歴史との互に密接の關係を有するものであるが、勿論政治的歴史を全然干渉掲げる事は出來ぬ故に、たゞ簡単に大體を述べる考である。

(イ) 和蘭國

現今の和蘭と白耳義とは第十六世紀の西班牙の屬國であつて、一國ではなく十七箇國の同盟であつたのである。而して南部は佛國に接近して佛語を使用し、又北部即ち現今の和蘭は獨逸と同一の大入種であつて、その使用語は所謂和蘭語であつたが、同國は大概當時の歐洲中、最も繁榮を極め、種々なる製造や貿易を以て盛大であつたのである。一體北部の大部分は海面よりも土地低く、大海より侵入する波濤を防ぐ爲に、海より探る所の砂を以て不斷つとめて堤防を築造するので、従つて人民は快活なる精神に富み、忍耐の志を有し、且の共同生活の徒の働さによりて(第五十四章の(三)の項)、宗教を實行する熱心あるものが多數あつたのである。

(ロ) 和蘭に改革の行はれし事

和蘭は獨逸に接近し、且つ同一の入種であつた故に、ルーテルの説は幾分早くより行はれたが、チヤールス第五世が之に反對して嚴重なる詔勅を下し、千五百二十三年最初の改革的殉教者として和蘭にて二名の者を死刑に行ひ、その後毎年改革の信徒を死刑に處するを以て、詔勅を實行しつゝ、數千人を殺したといふ話であるが、然るに如此迫害をも恐れず、改革説は次第に和蘭の北部に行はるゝに至つたのである。最初ルーテルの説が行はれ、後にカルヴァインの神學と長老政治とが行はれたが、南部には餘り新教の説の行はるゝ事はなかつたのである。

(ハ) ビリビ第二世 (千五百五十五年—千五百九十八年在位)
 前述した如く(第六十章の(ホ)の項)、チャールズ第五世は獨逸にて失敗を招き、後位を退いたので、選挙を以て彼の弟は獨逸皇帝となり、又彼の子のビリビは父の後を嗣いで西班牙王となつたが、別に皇帝といふ尊稱はないとしても、眞に廣大なる領地と大勢力を有する國とを支配したのである。即ち前にもいつた如く、當時の西班牙は最強の軍國であつて、その上米國に最良の殖民地を有し、且つ南伊太利と和蘭とを統轄するの權を握つた大強國であつたのである。抑もチャールズは和蘭に於て改革に反對し、多數の人々を死刑に行つたが、彼は敢て人望を失ふ事はなかつたので、それで和蘭の一般の人民は決して西班牙に反對する考はなかつたが、一體ビリビは實際の西班牙人で、他國人でありながら、和蘭を壓制束縛したのみならず、彼が一生の大目的と爲した事は二つで、其一は專制主義を實行する事、其二は羅馬教に反對する所の宗教を撲滅するにあつたのである。故に彼は用意周到勤勉力行以て政治に盡力したが、併し彼は眞正の政治家たるの技倆がなく、たゞ專制主義を實行せんが爲め行ふのであつたから、實に西班牙を損害したのみである。それで彼はこの目的を達する爲に、國家の材料を浪費し、或は國民より諸の自由を剝奪して、國內の物産等に大妨害を加へた許でなく、英國に於ける改革をも撲滅せんが爲め、大艦隊を派遣したが、却て全然失敗を招き、大損害を蒙るに至り、其上和蘭を壓制束縛した爲に、謀叛を誘發し、終に屬國を失ふに至つたのである。

ある。如此 壓制束縛を以て、第十六世紀の初期大勢力を有したる西班牙は、非常なる衰頹を來したたのであるが、ビリビは更に國家の衰頹を顧みず、寧ろ改革説の行はるゝよりも國家の全滅を可とする考を有したのである。今一例を以て彼の人格を了解する事が出来る。即ち彼は一生涯中笑つた事はたゞ一回のみで、それは聖バルトロマイの虐殺事件に數萬人の新教徒が滅亡したといふ事を彼が聞いた時であつたといふ事である。如此 壓制家が改革説の次第に行はるゝ和蘭を支配するにより、非常なる災難の起つたといふ事は決して奇怪ではないのである。一體西班牙には大監督五十八人、監督六百八十四人、寺院の僧侶四萬六千人、又教會の牧師三十一人餘、外に教會の役員四十萬人餘もあつて、羅馬教に服従する國であつた故に、西班牙に於てビリビの如き國王が、殘餘の自由を悉く掠奪するといふは、左程困難ではなかつたが、和蘭人の如き快活なる人々の中にて、如此 專制主義を實行するといふは、實に困難であつたのである。然れども和蘭は微々たる小國であつて、西班牙に反抗するの力なく、其上若し宗教的熱心がなかつたならば、多分ビリビの爲に敗を取つたに相違ないが、然るに彼等は熱心宗教に服し、迫害に忍耐し、大困難を凌ぎ、長歲月の苦痛を経て、遂に漸く獨立を得たのである。

(ニ) オレンジ (Orange) のウヰリヤム (千五百三十三年—千五百八十四年)
 オレンジは和蘭とは全然異なり、佛國の東南にあつて、ローン河の邊、アヴィヨン (第五十三章の

(イ)の項)の近傍にある一小國であるが、近世迄は獨立國であつて、ウヰリヤムはその國の支配者であつたのである。彼の生涯とその事業とは別にオランダ國に關係する事もなく、たゞオランダを以て名稱を受けたのみである。抑も彼は和蘭國の位置の高き貴族であり、又皇帝の親しき屬臣であつた故に、皇帝が和蘭王の位を辭した時、病體の爲にウヰリヤムの肩に倚りて最後の演説をなしたといふ事である。それにウヰリヤムは智慮深き人で、彼は己が思想を隠蔽するにたくみで、「沈黙のウヰリヤム」てふ綽名を受けたのである。然るに彼は早くよりピリビの壓制主義を悟り、又ピリビが和蘭の自由を奪はんとする目的を知らず、之に反對して愛國心を惹起し、先きに口と筆とを以て出來得る才國民を保護したが、後不得止剣に訴え、彼は軍人としても生命財産を惜まず、國家の爲に盡力したので、「國父」として國民は今日までも尊敬してゐるのである。彼は最初餘り宗教的熱心はなかつたが、次第に改革説を容るゝに従ひ、熱心の信者となり、殊に感ず可きは、彼は宗教的自由を主張し、凡ての人々は各自の宗教を自由に信する事を許したのである。その時代にては恐くばウヰリヤムの如く宗教自由を主張したものは甚だ僅少であつたのである。

(ホ) 戦争

ピリビは壓制束縛を以て國家を支配し、又新教徒を嚴酷に罰し、聖書を讀むもの、即ち男子なれば、絞殺に處し、又女子なれば生きながら葬る可き事を命じ、而して血の裁判を立て、三ヶ月間に千八百人を死刑に行ひ、たゞ僅少の人を除くの外和蘭人は皆殺されたのである。其後恩恵を施す可しとの詔勅を下したが、之はたゞ訴えのなき人のみを許す可しとの事で、それに彼は金錢を貪り、金錢を剝奪せんと考より苛税を加へたので、かくして和蘭人は數年間忍耐したが、次第に忍耐する事出來ずして謀叛を起し、ウヰリヤムはこれが先導者となつたのである。一體和蘭人は陸では到底西班牙人に勝つの見込はないが、彼等は多く漁夫で、大波怒濤を恐れず、海上の運動に自由を得てゐるのである故に、海軍に於ては實に西班牙人に打ち勝ち、西班牙の貿易を大に妨害し、その上彼等は戦争中も猶ほ遠方即ち東洋の日本にまで貿易を開き、或は他國に殖民地を得たのである。抑もウヰリヤムは材料も少なく、兵數も少なく、爲に陸戦に於て勝を制する事は出來ぬが、併し彼は忍耐を以て戦ふにより、國民の熱心を劇勵し、眞に先導者たるの職分を全ふしたのである。今詳細にその戦史を掲ぐる事は出來ぬが、たゞ興味ある一事をのみを述べる事であらう。之はライデン(Leyden)の包圍といふのであるが(千五百七十四年)、西班牙人がこの邑を攻圍したので、ウヰリヤムは此を擊退するの力がなかつたけれども、人民は何時までも壓制家には敗を取らぬとの決心を以て、如何に兵糧盡きて次第に餓死するものを生ずるとも、猶ほ敵に降参する事なく、「片手を食して片手にて戦ふ可し」といへるが如き勢で、大膽と勇氣とを以て敵を防禦し之れと戦つたのである。前にいつた如く、土地は海面よりも低いので、若し堤防を切るならば直に海水侵入し、爲めにこの難を免る

百人を死刑に行ひ、たゞ僅少の人を除くの外和蘭人は皆殺されたのである。其後恩恵を施す可しとの詔勅を下したが、之はたゞ訴えのなき人のみを許す可しとの事で、それに彼は金錢を貪り、金錢を剝奪せんと考より苛税を加へたので、かくして和蘭人は數年間忍耐したが、次第に忍耐する事出來ずして謀叛を起し、ウヰリヤムはこれが先導者となつたのである。一體和蘭人は陸では到底西班牙人に勝つの見込はないが、彼等は多く漁夫で、大波怒濤を恐れず、海上の運動に自由を得てゐるのである故に、海軍に於ては實に西班牙人に打ち勝ち、西班牙の貿易を大に妨害し、その上彼等は戦争中も猶ほ遠方即ち東洋の日本にまで貿易を開き、或は他國に殖民地を得たのである。抑もウヰリヤムは材料も少なく、兵數も少なく、爲に陸戦に於て勝を制する事は出來ぬが、併し彼は忍耐を以て戦ふにより、國民の熱心を劇勵し、眞に先導者たるの職分を全ふしたのである。今詳細にその戦史を掲ぐる事は出來ぬが、たゞ興味ある一事をのみを述べる事であらう。之はライデン(Leyden)の包圍といふのであるが(千五百七十四年)、西班牙人がこの邑を攻圍したので、ウヰリヤムは此を擊退するの力がなかつたけれども、人民は何時までも壓制家には敗を取らぬとの決心を以て、如何に兵糧盡きて次第に餓死するものを生ずるとも、猶ほ敵に降参する事なく、「片手を食して片手にて戦ふ可し」といへるが如き勢で、大膽と勇氣とを以て敵を防禦し之れと戦つたのである。前にいつた如く、土地は海面よりも低いので、若し堤防を切るならば直に海水侵入し、爲めにこの難を免る

を得べしとの考をこの時起したが、勿論豊饒なる土地は鹽水の爲に大損害を蒙るに相違なきも、敢て之を顧るのいとまなく、堤防を破壊したのである。然るに風向の爲に海水自由に侵入せず、暫時の間は最早救済の道はなかつたが、次第に風向も變じ、海水も侵入し、愈々和蘭の軍艦の近寄る事を得た故に、敵は大に驚き退却したのである。さればこの市民の大膽と忍耐とを記念せんが爲め、戦争中にも不拘大學校を設立したが、この大學は日本の歴史に親しく關係のあるものである。如此愛國心と忍耐とを以て、凡そ四十年の間戦ひ、漸く千六百九年に休戦するに至つたので、それで千六百四十八年に西班牙は全然和蘭の獨立國たる事を承認したのである。惜ウオリヤムは千五百八十四年に暗殺されたが、その子が如何に青年であつてもその後を繼ぎ、武勇を以て能く和蘭を指導したのである。然るに南部(現今の白耳義)の人々の中には改革を主張する者少なく、又宗教的熱心もなく、その上長歲月の間大困難に忍耐するの經驗もなくして、たゞ西班牙に服従してをつたので、獨立したのはたゞ北部の七箇國、即ち現今の和蘭國のみであつたのである。故に第十六世紀の長歲月の困難苦痛の結果として、和蘭人は改革説を容るゝとともに、又政治的獨立をも得たのである。

第六十五章 英國に於ける改革

英國に於ける改革は他の多くの國々とは違ひ、その原因は宗教家の事業でなく、國王の爲した事業で、従つて最初から英國に於ける改革は親しく國家の政治に關係したのである。それに又英國に於ける改革は保守的であつて、一般の新教とは異なり、英國教會は監督政治を尊重し、又教會禮拜の風習も一般の新教にまさりて儀式を重んじたのである。

(イ) ヘンリー第八世(千五百九年—千五百四十九年在位)

ヘンリーは根本的の壓制家であつて、彼は獨り全權を掌握するの考を起し、且つ實に不品行であつたのである。獨逸に改革の起つた時、ヘンリーはルーラルに反對して著書を出版したが、諸方より『信仰の保護者』といふ綽名を受け、今日までも英國王たるものはこの名稱を有してゐるのである。それでルーラルは敢て國王を懼れざる事を表明せん爲め「神學を論ずる國王の如きは此上なき愚人なり」といふ不禮の語を彼は吐いたのである。然るに『信仰の保護者』たる綽名を受けたヘンリーは、二三年の後自ら法王に對して謀叛を起すに至つたが、併し彼は決して改革を起す目的でなく、たゞ全權を掌握し、專制主義を實行する始であつたので、殊に直接離婚に關する事であつたのである。抑もヘンリーの兄に當る人は西班牙國王の女を娶つたが(之はチャールズ第五世の叔母

であつたのである。間もなくその兄が死去したので、ヘンリーはその寡婦なる嫂を娶つたのである。一體嫂を娶るといふ事は教會の規則に違反する事であるけれども、法王は特別その結婚を許可したので、故障なく夫婦となり、而してその妻カタリナはよくヘンリーに對し凡そ二十年の間その本分を盡したが、ヘンリーは又他にアチといへる若き美人を戀慕し、之を妾となさんとして拒絶されたので、遂にカタリナを離別してアチを娶らんと考を起したのである(歴史家の説によれば、ヘンリーは先にアチの姉なるメリーを妾となし、又その後このアチをも妾にせんとしたが拒絶されたといふのである)。彼が離婚の理由は、嫂を娶つたといふは實に本心の責むる所で、殊にカタリナが生みたる二人の男子が死去したといふは、即ちこの不正なる結婚に對する天罰なりといふにあつたのである。併しヘンリーの如きが敢て本心の苛責を受くる等といふは勿論實際でなく、たゞ一時の遁辭に過ぎぬので、彼は凡そ二十年の間カタリナと夫婦でありながら、今更美人たるアチを戀ひ之を妾と爲す事の出来ざるの場合、突然本心の活動したといふは實に可笑事である。僧法王はヘンリーの願望を拒絶する事も出来ず、又さりとしてチャールズ第五世の叔母たる者の離縁を許可する事も出来ず、大に當惑以て愈々遷延日を重ねてつた爲め、ヘンリーは勿論壓制家である故に、勝手に振舞はんとの下心は兼てあるので、若し法王が許可を與へざるならば、法王に背反しても是非離婚を斷行せんと決心し、先づ密にアチを娶り、後大監督によりて離婚を實行し、以て法王に服従せざる體度を明かにしたのである。その上國會は國王の希望に従ひ、地上に於ける英國教會の首は即ち國王なりとの決議をなし、愈々法王政治を放棄したのである。之が所謂英國に於ける改革の起原であるが、勿論如此運動は宗教的改革といふ可きでなく、たゞ國王といふ壓制家が法王といへる壓制家より教會の上の權力を奪つたに過ぎぬのである。それに實際ヘンリーは死に至るまで改革を主張せず、而して彼は法王に服従する者も、又教理的改革を求むるものをもともに死刑に行つたのである。彼は千五百三十九年に六箇條の信仰箇條を公表したが、その第一條には化體説を主張し、又第二條には一般の信徒たる者は聖晩餐の葡萄酒を飲むべからざる事を以てし、第三條には牧師の結婚を禁じ、第四條には僧侶の獨身の契約を嚴守すべき事、又第五條には牧師は一人にて死者の靈魂の爲めに聖體を執行すべき事、第六條には牧師の前に懺悔す可き事であつたが、若しこの信仰箇條を受けざる者があらば死刑に處す可しと命じたのである。それでたゞヘンリーの所業に就て稱讚に價するものは、凡ての寺院僧侶の状態を檢査して、若し寺院内に不品行の行爲があるならば、直ちに之を廢止してその財産をも沒收したのである。これを以ても當時一般僧侶の品行の腐敗してつたといふ事は明白であるが、併し寺院は旅人を宿らしめ、貧者を養ふ事により幾分の慈善の職務を盡した故に、之を廢院する事により、一般の人民は大に憂ひ遂に謀叛を企るに至つたのである。

されば國王はその財産を沒收し、これを廉價に貴族に賣渡して大金を得、驕奢を極めて直に浪費し

盡したのである。

(ロ) クランマル (Cranmer) (千五百八十九年—千五百五十六年) シナンダル (Tyndale) (千四百八十四年—千五百三十六年)

ヘンリーは改革者でなく、寧ろ彼は教會を支配する所の權を握り、又教會の財産を奪ひ、而して教會の信仰簡條と禮拜の風習とを改良する事に反對したのであるが、併し英國にては或はルーテルの説を容れ、或は真正の改革を賛成するものもあつて、ヘンリーが死するまでにこの説は幾分英國に行はれたのである。その改革者の中のクランマルといへるは、ヘンリーの好誼を蒙りて千五百三十三年に大監督となり、而して出來得る丈真正の改革説の行はるゝ事に助力したが、併し彼は豪傑といふ可きでなく、實にたゞ國王の希望に壓せられてヘンリーとアチとの結婚式を舉行し、後又離縁をも承認したのである。然るに彼は實際改革説を信じたので、ヘンリーの死後教會政治や教會禮拜の改革に、その先導者として働き、又終に殉教者となつたのである。猶ほ詳細にいへば、彼の死する頃は最早老年であり、且つ身體も衰弱してをたつたので、久しく入牢してその苦痛に耐へられず、一時改革説を放棄する事を告白したが、併し終に眞實豪膽を回復し、恐れず憚らずして死の苦難に耐へ、その火刑に處せらるゝ時、いつはつて改革説を放棄するの告白文を書したといつて、先づ己が右手を火中に入れ之を焼いたといふ事である。次にチンダルは青年の頃より改革説を容れ、又聖書を

を英語に翻譯して一般の人々に之を讀ませんと志望を抱いたが、彼は某監督の非難に對し「神の恩惠により予の死去するまでには、鋤を取る農夫の子らも、汝にまさりて神の道を知るに至らん」といつたといふ事である。抑も彼は政府が此業を英國内にては許さぬ事を知り、獨逸に移りて密に新舊兩約聖書を幾分づゝ英語に翻譯し、ウォルムスに於て之を出版し、而して英國に輸入したのである。それでロンドンの監督は先づその第一版を出來得る丈悉く買入れ、此を焼き棄たが、チンダルはその代價を以て再び第一版を訂正して再版を出したのである。彼は斯くして數年間密に事業を繼續したが、遂に英國政府の手に執えられ、死刑に行はれたので、彼れの最後の語に「神よ願くは英國王の眼を啓き給はん事を」といつたといふ事である。前にもいつた如く(第五十五章の(甲)の項)、ウィックリフが聖書を英語に翻譯し、且つ之を出版する事に盡力したが、その譯文は古代の英語であつた故に、今は一般の人々の讀み難きもので、それにウィックリフは希臘語を知らぬ爲に、羅典語譯より重譯したので、それで原文より英語に翻譯したものは實にチンダルを以て嚆矢とす可きである。其後國王の許可を得て聖書の英語譯を出版する事となつた時にも、翻譯者はチンダルの譯文を基礎としたのであり、且つ幾回改正しても、現今の英語本の根本は、即ちチンダルの事業であつたのである。

(ハ) エドワード第六世 (千五百四十七年—千五百五十三年在位)

ヘンリーの死去した時、その遺子は三人あつて、即ちカタリナの女であるメリーと、又アチの女であるエリサベスと、又第三の妻の子であるエドワードであつたので、男子はたゞエドワード一人であつた故に、彼は父の後を継いだが、その時年齢僅かに十歳に足らなかつたのである。然るに彼は若年ながら不思議なる智力と宗教的熱心とがあつて、其上彼には眞正の改革を求むるの志があり、それに攝政となつて政權を握つた叔父も新教徒であつた爲に、彼の治世中は故障なく改革は進歩したのである。克蘭マルは監督として國王や攝政の助力により、改革に適當する信仰簡條を發表し、又教會禮拜の風習をも改良したので、即ち今日の英國教會の信仰簡條と又その禮拜の風習と餘り相違はないのである。その信仰簡條は極端ならざるカルヴァイン派の教理であつたが、その禮拜の風習は儀式的のものであつたのである。それに、獨逸や瑞西とは違ひ、英國に於ける教會の監督の多数は改革を受け容れた故に、羅馬法王の政治を棄るといふよりも寧ろ教會政治の變更を好まなかつたので、それで古代より傳はつた禮拜の風習を出來得る次第更せず、たゞ羅馬教の誤謬である風習のみを改良するを以て、保守的改革を行つたのである。改革者は國王の許可を受け、而して妨害もなく美麗なる改革を行つたが、一般の英國人は未だ改革説を受け容れず、それに攝政が充分權力を勝手に使用してを爲めに國民は怨恨を抱くに至り、改革運動に反抗するの心をもつものも多数あつたのである。如此場合に若し舊教の信徒たる者が即位したならば、直に改革運動を撲滅

する事は容易であつたので、不幸にもエドワードはたゞ六年間位に在つて死去したので、次は舊教信者が王權を握るに至つたのである。

(三) メリー女王 (千五百五十三年—千五百五十八年在位)

エドワードが死去するや、メリーは姉である故にその後を繼いで即位したが、彼女はカタリナの女で、母より舊教の説を學び、それに改革運動は母の苦痛の原因であつたとして、大に改革に反對するの心を起し、猶ほその上法王に熱心服従するものであつた故に、彼女の生涯の大目的は今までの改革運動を全廢し、英國に於ける教會を従前の如く爲すといふにあつたのである。彼女の母は西班牙人であつたから、メリーも西班牙人の如き性格を有し、而してピリビ第二世(第六十四章の(六)の項)の妻となつたのである。如此婦人が如此場合に即位したならば、劇甚なる困難の起るといふは當然の結果で、別に奇怪ではないが、たゞ不思議なのは、新國會議員の大多数がメリーの反抗的態度に反對する事もなく、改革運動を廢止する事に直ちに賛成を表した事で、併したゞヘンリーが沒收した寺院の財産を教會に返還する文を拒絶したのである。それで若しメリーが寛容なる心を以て漸次舊教を採用し、而して改革説に反對するを以て満足したならば、却て英國に於ける改革運動は大損害を招いたに相違ないが、一體メリーは宗教狂者であつたから、新教徒を死刑に行はざれば満足が出来ずして、遂に劇烈なる迫害を起し、平民を初め有名なる監督に至るまで、たゞ化體説

を信せざるの理由を以て、凡そ二百八十六人を火刑に處したのである。彼女は如此迫害を以て人々を驚かし、改革運動を撲滅するの考であつたが、事望に違ひ、却て此の迫害は一變して英國に於ける改革の大原因となつたのである。即ち最初英國一般の人々は改革説を受くるの熱心はなかつたが、改革派殉教者の忍耐に感服し、或はその残酷なる死刑に驚き「鮮血のメリー」といふ綽名を以て、メリーの如き歴制家を舊教の代表者と見做し、熱心羅馬教に反抗するの態度を起し、如此宗教には一切服従せざる所の決心をなすに至つたのである。この迫害の爲に數人の者は劇甚なる苦痛に遭遇したが、併し改革運動に取つては寧ろ利益となつたのである。前にもいつた如く、當時クラシマルは久しく入牢してをつた爲に身體つかれ、爲に一時は改革説を放棄するの告白をなしたに不拘、後直に勇氣を回復して從容死についたので、又他の殉教者も皆死を懼れず迫害の下に殉死したが、殊に有名なるその時の語は左の通である。當時二名の老監督がオックスフォードに於てともに火刑に處せられ、其一人は他の一人に對ひ「我が友よ喜べ、男子の如く爲せ、我等が今日燃す所の燈火は、神の恩恵によりて何時迄も消ゆる事あらじ」といつたといふ事である。抑もメリーの語は眞に悲劇といふべきで、彼女が青年の頃、その母が無理に離縁を受けた爲に、彼女は世間より妾腹なりとの恥辱を蒙つたが、尤もその後幸ひ王位に登り全權を握るに至つたけれども、彼女が企つる所の目的に失敗し、その上彼女が如何に夫ドリビを深く戀慕ふるも、ドリビはメリーを愛するの心更になく、

直に西班牙に歸つたのである。爲に彼女は子を擧げんどの希望を有しながら猶ほ之をも達する事能はず、英國と法王との間をして全然一致せしめんとする考も行はれず、其上父が教會より剝奪した財産の返還も出來ざるを以て、大に憂鬱苦悶してをる時、西班牙王と法王との衝突が起つた故に、メリーも法王の怨恨を招くに至つたのである。斯くして彼女が英國に於ける改革運動を撲滅せんと企てた事も、却てこの運動をして増々盛大を極めしむるものとなつたのである。

(ホ) エリサベス女王 (千五百五十八年—千六百三年在位)

エリサベスはヘンリーの第二の妻アチの女で、舊教の説よりすればアチはヘンリーの本妻でなく、従つてエリサベスはその後を繼ぐべき資格はなかつた爲に、舊教に服従する事が出来なかつたといふのであるが、さりとて彼女は敢て心底より改革説を主張する事もなく、國王の政權を尊重し、又成る可く政權の變動に制限を加へんと考へたのである。然れどもメリーの猛惡殘忍なる壓制に反對するの結果、新國會に選舉された議員は悉く新教徒であつた故に、不得止エドワードが制定した信仰簡條と祈禱文とを僅かに訂正して之を發表するに至つたのである。抑もエリサベスの人格は餘り賞讃すべきものでなく、又教會の事件に干渉して自己の權威を振はんとする爲め、甚だ不快の事のみ多くあつたのである。例之女王の寵臣が無道理にも某監督の庭園に別荘を建築した時、監督は之を女王に訴えたが、却て女王は「汝若し我意に全然服従せざる時は汝の職を剝奪す可し」といつ

たといふ事でも、それにエリサベスはピリビ第二世が大艦隊を派遣した時、彼女はよく之を防禦して眞正の政治家たる技倆を顯はし、爲に國民の望にかなひ、且つその時出來た改革は多分英國國民大多數の豫望に添ふたに相違ないのである。

(へ)ピュリタン派と獨立派

エリサベスの時代に、英國國民大多數は決心を以て改革を行ひ、而して羅馬法王に反對するの熱心を抱いたが、不幸にも新教徒中に劇烈なる議論が起つたのである。

第一、ピュリタン派の如きは根本的改革を望むるので、而して彼等の先輩者は迫害の當時デエチバの如き處にのがれて、或は長老政治を學び、或は完全なる改革を求むるの心を起したが、彼等は本國に歸るも、エリサベスの是認する改革を以ては未だ満足が出来ず、却て之を非難する事により、エリサベスの怨恨を招き、又國王が教會に干渉するの權なき事を主張する事により、愈々女王の憤怒を招くに至つたのである。尤もこの争論は最初信仰簡條にも、又教會政治にも關係する事なく、たゞ禮拜の風習に關係するものであつたので、今一二の實例を挙げれば、古代より傳つた風習によれば、教會の牧師が説教をなし、或は禮典を執行する時に必ず僧服を着するの風であり、又信者が聖晚餐を守る時に跪くの風があり、又洗禮を施す時に小兒の頭上に指にて十字架の形を爲す風等種々あつたのである。然るにピュリタン派の説では、如此風習は別に罪惡といふべきでないが、

羅馬教の誤謬に深き關係があるので、之を全廢せざる以上は、一般の人をして古代より傳はつた風習を猶は行はしむるにより、羅馬教の風習を守るの恐れがあるといふのであつた。又保守的の論によれば、如此風習は古代より傳はつたもので、別に惡事でない故に、此を全廢するは甚だ惜むべきで、一般の習慣となつた風習を無暗に廢するは、寧ろ改革主義を受くる妨害となるであらうといふのであつた。然るにピュリタン派は猶ほ進んで長老政治を主張し、監督政治を不可とし、國立教會と愈々異なる思想を抱いたのである。それでエリサベスはもとよりピュリタン派の説を極端として之を嫌忌し、その運動を禁止した故に、彼等は非常に反對して教會の自由を主張したのである。

第二、獨立派といふはピュリタン派とは違ひ、國立教會を改革せんとの希望でなく、たゞ各自の教會の自由を重んずるを以て、所謂組合教會の基礎を据へたのだが、當時は未だ如此説を主張するものは甚だ僅少であつて、迫害に遭遇したのもたゞ數人あつたのみである。この歴史は第十七世紀に涉る事であるから、第七十四章に於てのぶる考である。

第六十六章 蘇格蘭に於ける改革

蘇國は英國と同島の北部であつて、實に微々たる一小國であるけれども、一般の歴史に關係するの

である。抑も蘇國の北部は山地で、その人種と國語とは古代のブリトン人と同類で、彼等は後に改革を初て受けたのであるが、併し第十六世紀の改革歴史に關係ある蘇國はたゞ南部の平地で、之は英國と人種も國語も類してゐるのだが、往昔より國家の獨立を尊重するの熱心があり、爲に英國と幾回か戦を交へたのである(第十八世紀の初に英蘇の兩國初めて合併したのである)。然るに蘇國に於ける改革歴史は英國と密接に關係し、而して又蘇國では根本的改革が行はれたので、その結果は最も明白なものである。

(イ) 蘇國に於ける改革の起原

蘇國に於ける羅馬教會の僧侶は品行甚しく腐敗してをつたので、改革の必要は明瞭であつたが、その改革の行はれた事は數名の傳道者の事業であつたのである。その中最初の殉教者はハミルトン(Hamilton)で、彼は位置の高き家に生れ、而して當時の風習に循ひ、彼が十四歳の時、某寺院の院長たる資格を得、その所得を以てパリスの如き大學に入り教育を受けたが、又彼は同時に改革説をも受け容れ、而して千五百二十七年より改革説を唱え、數ヶ月の後執えられて死刑に處せられたのである。彼はその時僅に二十五歳であつたが、彼の熱心と忍耐とに感服するもの實に多數あつたのである。然るに反對論者は彼を批評して、「ハミルトンの火葬の煙は多くの人に不快を感せしむ」と惡口したけれども、如此殉教者の熱心と忍耐とに感動し、新教に加はるもの増々多數あつたのである。

である。今一人の改革者はウイシャルト(Wisard)で、彼は數年間獨逸と瑞西とに在り、其處にて新教の説を學び、而して本國に歸りて改革説を唱へ、爲に死刑に行はれたが、それで彼も改革説を宣傳する事により大感化を及ぼしたのである。されば如此傳道者の忍耐と熱心との宣傳により、改革説は次第に擴張され、平民の大多數は之を受け容れたが、併し當時政權を握つてをる攝政は、即ち佛國のギース侯(第六十三章の(ロ)の項)の女であつて、彼女は新教の正反對に立ち、且つ佛國の助力を得て改革説を撲滅せんとする希望であつたが、新教徒は之が爲に改革説を維持しながら、猶ほ佛國の屬國たるを免れんと努めたのである。されば攝政の死去するや直に(千五百六十年八月二十五日)國會は蘇國に於ける羅馬教を全廢し、新教とカルヴァンの信仰條等を以て此にかへる事に制定したのである。

(ロ) ノツクス (Knox) (千五百五年—千五百七十二年)

蘇國に於ける改革の卒先者は、ハミルトン、ウイシャルドの如き者であるが、併し大人物と稱す可きはノツクスであつて、彼の運動により改革は實に強固となつたのである。ノツクスは羅馬教會に於て按手禮を領したが、併し敢て牧師の職に就く事なく、たゞ貴族の家庭教師となり、斯くして次第に聖書を研究するに從ひ、新教の説を容れ、ウイシャルドがその地方に來つた時(千五百四十六年)、ノツクスは彼に隨從して巡回をなし、且つ劔を取りて護衛の職を取つた故に、彼は舊教

の怨恨を招き、某新教徒どもに某城中に入り、其處にて群集の人々の希望により、己が平穩の意思に背き説教者となつたのである。其翌年佛國の艦隊がその城を攻め取つたので、ノックスは爲に捕虜として凡そ二十ヶ月間劇烈なる苦痛に遭遇し、後赦免されて英國に來り、エドワードの治世中英國に於ける改革の爲めに盡力したが、某時監督の職に就くに好機會のあつたに不拘、彼は監督政治を好まぬ理由を以てこれを拒絶したのである。それでメリーの即位するや彼は不得止英國を去りデネズバに赴き、其處にて英國人の教會の牧師となり、愈々カルヴィンと交際し、その神學と教會政治とを學び、千五百五十九年（彼が五十四歳の時）に本國に歸り、十三年間の終の生涯を以て國家の爲に盡したのである。彼が本國に歸るや、其翌年攝政が死去したので、國會は直に新教を容るゝ事の決議をなしたのである。然るに未だ蘇國宗教は一定したものでない故に、ノックスは一方には舊教を防ぎ、他方には新教の教會を堅固せんとつとめ、之が爲に大事業をなしたのである。尤もノックスは別に權力はなかつたが、彼は牧師としてその説教を以て新教徒を劇勵し、或は舊教に反對し、而して蘇國教會の信仰箇條とその禮拜の風習とを固ふしたのである。舊蘇國に於て改革説が全勝利を得たといふ事は、たゞ一人のノックスの事業では勿論ないが、併し彼の事業は實に樞要であつたのである。ノックスは一體カルヴィン派運動の代表者といふ可きもので、彼は心底より神を尊敬し、又萬事を神に獻げ、而して何人も又何事も恐れず、根本的改革を主張するもので、實に

彼は偉大なる説教を以て、能く國民を導く力があつたのである。今その決心と熱心との實例を舉れば、彼が日々神に獻げた祈禱の大主意は「神よ我に蘇格蘭を與へ給へ」といふのであつた。彼は己が國民をして純粹なる基督教を受けしめ、之を實行せしむる事が、彼が唯一の願であつたのである。それで彼のこの願望は多分成就する事を得たが、併したゞ一點失望を來したものがあつた。即ち彼は寺院を全廢し、その財産を以て此を基本金となし、小學より大學に至るまで、所謂全國に於ける教育を盛大にせんと企たのであつたが、不幸にして新教に加はつた貴族は、多數貪慾飽く事を知ず、その財産の幾分を奪はんとした爲に、彼の希望を實行する事を得なかつたのである。併し最初より蘇國の改革者は一般の教育を尊重し、出來得る丈之を助力したるにより、蘇國民は教育を受け、爲に活潑なる智力を得たので、之を以て科學にも、哲學にも、又貿易にも大事業をなしたものは多數あつたのである。一體蘇國は北國であつて、其上微々たる國であり、且つ貧窮國であつたけれども、改革説を採用するにより、自由と教育とを受け、大に進歩を見るに至つた故に、西班牙と比較するならば、舊教國と新教國との差別は判然するのである。

(ハ) メリー女王

ノックスに反對して舊教を回復せんと盡力した者はメリー女王で、彼女が出生するや直に父は死去したので、女王の位に即いたのである。又たその母は佛國人で、メリーも幼年の頃は佛國に

あつて教育を受け、又フランス第二世の妻となつたが、第六十三章に於て述べた如く、フランスは即位の翌年死去した爲に、メリーは千五百六十一年に十九歳の寡婦として本國に歸り政權を取つたのである。メリーの父は純粹の蘇國人であるが、メリーは佛國人で、而して舊教の熱心家であつたが、彼女は實に美人で、且つ快活の婦人であつて、而して人に阿諛し、又悪策を以て人を惑すにたくみであつたのである。抑も彼女はパリスに於て不良の教育を受けた爲に、品行を矯正し、又は自己の一身を制するの力なく、爲に種々なる恥辱を蒙り、大災害を招き、終に大失敗を來したのである。今一例を擧げば、メリーが佛國より歸國する際、佛國の一詩人が随伴したが、この詩人はメリーを戀慕し、メリーに對し艶書と戀歌とを贈りたるに、敢てメリーが此を拒絶せざるを見、彼は恥をも忘れて女王の寢臺の下に隠れてをつたといふ事である。偕メリーは蘇國に於ける改革説を速に撲滅する事の出來ざる爲め、悪策をめぐらして羅馬教を擴張せんと企て、最初はたゞ宮殿内に密かに羅馬教の聖體禮を執行了が、ノックスは根本的の改革を主張し、羅馬教の正反對に立ち、羅馬教の聖體禮は恰も偶像教の禮拜に異ならずと唱へ、如何に女王の宮殿なりとも如此惡事を行ふべきにあらざる説教を以て論じたのである。其上ノックスは、メリーが西班牙國王ピロピ第二世の子の妻とならんとする事を聞き、此如結婚は蘇國をして西班牙の屬國たらしめ、且つ我等の宗教を撲滅し、我等は自由を失ふに至らんと説きて、その結婚に正反對の精神を吐露したのである。

それでメリーは幾回もノックスを招き、或は彼を脅迫し、或は彼に阿諛して、その運動を防止せんとしたが、併し勿論ノックスは女王を尊敬すると雖も、神の道に逆ふ所の政治に服従すべき道理なしとして、女王の怒をも懼れず、又女王の阿諛にも頓着せず、却て女王の反對手段を妨害したのである。一方は五十六歳の説教者で、他方は十九歳の女王である所の如此競争は實に興味あるものといふべきである。然るにいづれも確固たる決心があつて、互に譲る所はなかつたので、若しメリーにして自己の一身を制御するの力があつたならば、その結果如何は知る事は出來ぬが、兎に角メリーは大恥辱を受けた爲に權威を失ふに至り、たゞに自己の不品行の爲に勢力を失つた許でなく、英國に於ける舊教徒がエリサベスの代りにメリーを英國女王の位に即かしめんとした爲めに（メリーはヘンリー第八世の妹の孫であつたのである）、エリサベスは敢てノックスの如き極端なる改革説を毫も主張するの考はなくとも、或はメリーが佛國の助力を以て蘇國に於ける改革説を撲滅したる上、又たその勢力に由りて我が王位をも奪ふ事を恐れ、蘇國に於ける改革者を助けたのでメリーは失敗したのである。更にメリーの恥辱を簡單にいふならば、彼女はその従兄弟を戀慕してその妻となり、俄に夫の不品行を悟りて直に夫に對し怨恨を抱き、後又某貴族を戀慕したので、その貴族は遂にメリーの夫を暗殺するに至つたのである。一般の説に由れば、メリーは情夫が夫を暗殺せんと企てる事をも悟りながら、寧ろその企を補助したといふ事である。その後彼女は貴

族即ち自己の夫を殺した者の妻となつたので、多數の國民は之が爲に非常に憤怒し、遂に内亂を起したので、メリーは千五百六十七年(たゞ六年許政權を執りて後)位を退き、その翌年英國にのがれ、エリサベスの助力を求めたが、却て彼女は囚人として凡そ十八年間獄に繋かれ、終に死刑に行はれたのである。それで蘇國に於てはメリーが英國にのがれてより、別に舊教を保護する者がなかつた故に、改革は愈々強固となり、且つ蘇國教會はカルヴインの神學と長老政治とを熱心に實行する事となつたのである。

第六十七章 第十六世紀に於ける羅馬教會

第十六世紀の大事件といふべきは、勿論改革と舊新兩教會の分裂であつたが、改革を容れざる羅馬教會もその時代に於ては多少變化を來したのである。尤も教會の教理、教會の政治、禮典等は毫も變更はなかつたが、所謂首と肢體との改良行はれ、新精神と活動力を得た故に、現今即ち第二十二世紀の羅馬教會は改革前の羅馬教會とは大に異なつてをるのである。又敬神の念を以て教會の爲に盡したレオ第十三世やピウス第十世の如き法王も、インノセント第八世やレオ第十世(即ち改革起原頃の法王)とは全然その精神を異にするのである。

(イ) トレント (Trent) の會議(千五百四十五年—千五百六十二年)

ルーテルの如き改革者は、最初は大會議を以て教會を改革せんと志望であつたから、大會議の開かるゝ事を望んだのである。それでチャールス第五世が教會僧侶の不品行を改良する事と、又合併の希望とを以て、大會議の開會をすゝめたけれども、當時の法王は毫も改良を求むるの心なく、爲に大會議を開く必要なしとしたが、併し漸く千五百四十五年に會議を開く事となつたのである。されば皇帝は會議を獨逸にて開會するの考であつたので、法王はその希望に應じ、獨逸に屬する某邑に於て會議を開く事としたが、併し出來得るイタリアに近きトレントに開く事としたのである。即ちトレントは獨逸帝國に屬する邑であつて、イタリアに最も密接の關係があつたのである。愈々會議を開くに至りては、皇帝の希望と異なり、敢て改革者と合併を試むる事もなく、寧ろ最初より改革者の運動に反對し、教會の教を強固にするの目的を以て、議案を決議せしめたのである。尤もこの會議は種々なる事情のあつた爲に、時には散じたり、時には集つたりして、漸く千五百六十三年に結了したが、その決議の大意は第六十八章に掲ぐる事であらう。先づその大體をいへば、この會議に由り羅馬教徒は確定したる信仰箇條を得、且つ之を主張する事により、一致して新教の運動に反對するに至つたのであるが、然るに之に反して不幸にも新教徒は更らに一致する事なく、種々なる争論と分裂とを來したのである。

(ロ) ロヨラ (Loyola) (千四百九十一年—千五百五十六年) と耶蘇會社

改革に反對して舊教を保護せんと運動する者も幾人かあり、且つ當時出來た所の團體も幾箇かあつたが、新教の進歩に大妨害となつたものは、ロヨラの設立にかゝる耶蘇會社であつたのである。ロヨラは西班牙人で、又貴族の子であつたが、青年の時より軍人となり、戰場に於て名譽を得んと熱望したので、彼が三十歳の時佛國人に對して某城を守つたが、負傷の爲に片脚を失ひ、不得止軍籍を退いたのである。彼が負傷の爲に病床にあつた時、古代聖徒の傳記を読み、彼は好まぬながらも、聖マリアの武士となり、教會の爲に盡力して靈的戰爭を爲さんと決心し、傷の全癒をまつて直に他國傳道に赴くの考でエルサレムにゆいたが、其處で傳道の機會を得ぬ爲、一度本國に歸り、到底教育なくしてはその目的を達する事能はざるを悟り、三十歳餘なるに不拘、小兒どもにも羅典語を學び、後又パリスの大學に入りて勉學をなし、そこにて同級生中彼と同一精神の友人と語らひ、新團體を組織するの決心をなしたのである。最初は他國傳道を爲の考であつたが、漸次内國に於ける異端に反對するの目的をたて、國の内外に於て羅馬法王に服従するを運動の大基礎となし、千五百四十年に法王より新團體組織の認許を得たのである。この新團體の僧侶は古來より傳はつた寺院の僧侶の如く、凡そ二年間の經驗を以て、獨身と貧窮と從順との約束を結んだが、併し古代の寺院僧侶と違ひ、敢て己が救を求むる事を第一とせず、寧ろ教會の爲に盡す事を第一となし、又長き祈禱を以て時間を無暗に浪費する事なく、その團體に加はつたものは數年間の教育を受けた後、傳道に出るのであつた

が、始終從順を第一として、法王はもとより、社長をも法王の代理者として之に絶對的服従をなし、恰も枯骨となるまで自己の意思を殺す事につとめたのである。常に使用さるゝ所の譬喩に由は、杖は持主の手中にありて、その人の心の儘になるが如く、社員たるものも自己を全然放棄し、何地にゆくも又何事を爲すも、疑はず、躊躇せず、絶對的に首たるもの、命令に従ふ可きであるといふのであつた。即ちロヨラは最初武士であつて、彼は軍律の下にあつたものであるから、この會社を設立するにも軍隊組織の如くになし、又軍律の如き取締を以て支配したのである。その上會社に入社するものは、恰も兵士を訓練するが如く、詳細なる規則の下に靈的的教育を受け、敬神、從順を全然實行する事を學んだのである。如此教育は實に束縛的で、個人の自由運動や、勿論新教の主義に適合せぬのであるが、羅馬法王に全然服従し、どこまでも羅馬教會の爲に盡す所の武士を作り出すには眞に智慧ある方法であつたのである。如此教育を経て社員となる者は、親を忘れ、親戚を棄て、又國とする場所もなく、何物をも惜まず、何者をも恐れず、何地にても、何事にても教會の爲に盡力するものであつた。ロヨラは久しき間遠國に出てをり、後本國に歸つた時親戚より書信を受けたが、之を讀む事もせずして直ちに火中に投じ「予には親戚なし」といつたといふ事である。該會社は勿論保守主義を重んじ、科學の如きを輕んじたが、併し中世の哲學や、トマストマスの如き神學者の神學や、又論理學を學んで、羅馬教の說を宣傳するに力を盡したので、大に新教の進歩を妨害し、且つ

教育を以て、殊に上等社會の青年教育に盡し、又保守主義の教育を以て、新教の進歩を妨害したのである。其後第十七、八世紀に至り、或は國家政治に干渉し、或は貿易を爲し、或は目的よろしき時は方法の如何を問はずといふが如き説を以て、不品行、不義、不實を行ふとの批評を受けた故に、羅馬教の行はるゝ國々では、該會社を廢止し、終に羅馬法王すら、之に廢止の命を下したが（千七百七十三年）、併し數十年の後再び認可を與へたのである。

晉に歐羅巴に於て新教に反對する運動をなした許でなく、最初の目的に従ひ、遠國にまで傳道に出るものも早くよりあつたのである。外國傳道者の中で、最も早く又最も有名なるものはザビエール（Xavier）（千五百六年—千五百五十二年）で、彼はパリソ大學に於てロヨラの同級生であり、而して最初より耶穌會社の社員であつて、法王より認可を受くるや、直に（千五百四十一年）印度に赴き、後日本に渡りて二ヶ年間働き、又其後支那の海岸に於て死去したのである。彼は多數の人に洗禮を施したが、國語をも知らず、又道を教ゆるの歲月も少なく、それで彼の運動によりて出來た信徒は幾人であつたか解らぬが、兎に角外國傳道に就て大事業をなしたに相違ないのである（日本に於ける第十六世紀の傳道の事は第八十七章に於て簡單にのぶる考である。）

(ハ) 教事犯裁判

異端者と稱ふる者を死刑に處する事は、不幸にも第五世紀から行はれたのである（三百八十五年に

異端者として人を死刑に行ふ事が初つたのである。）又アルビゼンセス（第四十八章の（ハ）の項）を撰滅せんとて、インノセント第三世は之が爲に教事犯裁判を起し、又第十五、六世紀に西班牙にて國王は、猶太教や回教に反對して如此裁判を立て、猶太教或は回教より基督教に加入し、後墮落したものを嚴重に罰し、且つ死刑に處したのである。第十六世紀の半頃より教事犯裁判を以て、伊太利、西班牙、又和蘭にても新教徒を多數殺害し、かくして伊太利、西班牙に於て新教の進歩を防止したので、即ち異端を唱ふる疑わゆるものあらば、之を捕えて拷問にかけ、殘酷なる方法を以て苦痛にあはせ、而して公然死刑に行ふ風であつた。その上新教の説を稱ふる書籍や、又疑はしく思はるゝ所の書籍までを舊教の行はるゝ國に於て販布する事を嚴禁し、多數の書籍を燒棄したのである。例之「キリストの恩寵」といふ書籍には、キリストの贖罪により救はるゝといふ事の幸福が説いてあつて、之を數萬部出版したが、教事犯裁判所の使者が之を探索して悉皆燒棄したるので、一部も残つてないと思つてをたつたのが、近來二三部發見したといふ事である。

(ニ) 伊太利と西班牙に於ける改革

前にもいつた如く（第五十六章の（ニ）の項）、文學の復興運動に關係した伊太利人は、多く文學と美術とを慕ふの心を以て古代の文學を詳細に研究し、且つ寺院の僧侶の不品行を嫌忌したが、敢て宗教的熱心を起す事なく、又決して宗教改革を主張する心はなかつたのである。その上伊太利國民の

大多數は純粹の伊太利人で、法王政治を重んじ、羅馬の監督が世界の諸教會を支配するを喜び、又他國人が羅馬法王に反對するを好まず、而して改革説を主張するの考もなかつたが、併し伊太利に於ても、教會の腐敗と法王僧侶の不品行とを憂ひ、之が改良を求め、且つキリストを敬愛するといふ熱心の人も幾人かはあつたのである。然るに彼等は敢て分裂を起す程の運動を爲す心なく、或は法王に服従せざる運動を賛成する事もなく、たゞ教會内の改革のみを求めたのである。それで第十世紀の中頃から、教事犯的迫害を以て、羅馬教に充てん分服従せざる者を全然撲滅したのである。それに西班牙に於ても同じく、羅馬教に従ひながら猶ほ改革主義を幾分主張するものもあつたが、彼等も又教事犯的迫害を以て全然撲滅されたのである。前にもいつた如く、ピリビ二世が本國に於て専制主義を實行する事により、國民の自由を全然奪ひ、之を以て國家に大損害を加へたのである。今舊新兩教の區別を示せば、チャールズ第五世の臨終の時、大監督は皇帝の眼前にキリストの十字架上の像を示し、「諸の罪を赦し給ふキリストを見給へ」といひて慰安を與へたが、又帝室附屬の説教者は皇帝に對し、「皇帝は聖マタイの祝日に誕生し、又聖マテヤの祝日に死し給ふ故に、この兩聖徒の仲保によりて確に救を得給ふべし」といつて慰藉を與へたといふ事である。斯して大監督は教會の禮典と聖徒の仲保との代りに、キリストの贖罪を以て信徒の希望の基礎と爲すにより、嫌疑を招きて迫害に遇つたのである。

(ホ) 教會内の改良

前にもいつた如く、羅馬教會は改革主義を全然拒絶したけれども、多少改革運動によりて變動を來したのである。抑も改革の起原頃の法王(レオ第十世の如きもの)は、或は不品行を行ひ、或は品行は多少よいとしても、宗教に無頓着であつたが、併し第十六世紀の中頃より改革主義を拒みながら、猶ほ僧侶の不品行を憂ひ、而して教會内の改良を求むるものが次第に勢力をしむるに至り、その主張する所の改革を實行したのである。即ちその中で最も有名なる者はパッロ第四世であつて(千五百五十五年—千五百五十九年)、彼は改革者の神學を毫も賛成せないとしても、教會内の不品行を改良し、教會内の運動を起し、教會を振起して新精神を與へた故に、羅馬教の教訓や、教會政治等を賛成せざる新教徒も、又現今の羅馬法王も、又多數の監督も、彼が敬神の念とキリストの爲に盡す所の熱心とを賞讃せざるを得なかつたのである。之は實に改革運動の反響であつた故に、若し改革運動がなかつたならば、教會内の改良もなかつたであらうと思ふのである。

(ハ) 新教進歩の範圍

新教は數十ヶ年間盛大に行はれ、而して某國の如きは全國に行はれて後、又他國にまで波及したといふは多少不思議といはざるを得ないが、併し之は幾分地理的關係であるので、即ち丁抹、瑞典、諾威の如き北國は全然新教となり、又獨逸の北部は大概新教で、而して大概南部は舊教であつたの

である。それで北方の蘇格蘭は全然新教であり、又英國も保守的の新教となつたのである。當時和蘭の北部は新教であつたが、中央の佛國はたゞ少數のみ新教となり、而して南方伊太利と西班牙とは全然新教を棄てたのである。即ち北方の人々は大概靈的宗教を求むるの傾向があり、又南方の人々は多く儀式的宗教を以て満足するのである。尤も基督教の大本を主張する點に於ては別に差違はないが、基督教を應用する點に於て、時と處により大差を生ずるのである。猶ほこの點に就ては次の第六十八章に於てのふる考である。

第六十八章 舊教と新教との比較

千五百六十四年法王の發布したトレント會議の信條は、直接新教に反對する目的を以て公告したのだから、之を以て舊新の差別が大概了解される事であらうと思ふ。

第一、ニカヤ信條（第三十章の（ロ）の項）

ニカヤ信條は基督教の根本主義であつて、舊新の差別なく信するものである。即ち萬物の造主なる神を父とし、又獨子キリストを救主として尊敬し、又聖靈をも貴ぶのである。然れば左の箇條の如きは如何なる差別が幾多あつたとしても、同一にその根本主義を信するものであるといふ事を忘却してはならぬ。

第二、使徒、教會の建設、及び教會の諸規則

使徒、教會の建設、及び教會の諸規則は、之れを舊新兩教の根本的相違であると思ふのである。即ち舊教の說に由ば、羅馬教會は惟一なる真正の教會であつて、而して救の道を一任された團體であり、聖靈の導きによれるものであり、又教會内の發達と、往昔より教會内に行はれた傳説とは、實に神の道として受く可きであるといふのであるが、新教の說に由れば、信徒が團體を組織し、而して一の教會として聖靈の導きを蒙り、神の爲に盡すといふ事は、神の聖旨であるけれども、羅馬教會を以て唯一の教會とする事は出來ず、又基督教の主義は如何に神より與へられたものであつても、之を應用する時に（殊に開黒時代にて）、自然人の誤謬説をも神の教と混同した事があり、それに傳説といふは多分使徒等より傳はつたものでなく、後世に至つて起つたものである故に、幾多誤謬した説が包まれてあるかも知れぬ。されば聖書を標準として、傳説や教會の規則を調査し、その善惡を決定す可きであるといふのである。

第三、聖なる母たる教會の解釋に従ひて聖書を受け、又教會の師父の説明に従ひて聖書を説明する事

この第三の箇條は前の二ヶ條とその主意は異ならぬもので、即ち教會の權威に關する問題である。それで舊教の說に由ば、教會（羅馬教會）は聖書を一任され、又聖書を解釋するの全權あるもの

である故に、各自その決議を疑はずして受く可きであるといふので、又新教の説に由ば、教會は實に聖書を研究し、その道を宣傳す可き天職を一任されてあり、又教會内の有名なる信徒が聖書を説明した事に就いては威服す可き點もあるが、併し教會の先輩者も、又有名なる神學者も、たゞ普通の人間である故に、誤謬なくして聖書を解釋するの權威あるものでなく、各自力のあらん限り、聖書を研究するを以て、自ら神の言を受け容る可きである。それで教會の師父即ち第二、三、四世紀の有名なる神學者を尊敬すると雖も、決してその教を無謬として全然受け容る可きではなく、その上、第二、三、四世紀の神學者は基督教の大主義を同じく教へても、詳細の點に就ては種々なる異説を有した故に、教會の師父の解釋に従ひ、聖書を説明す可きであるといふ事は實に無道理であるといふのである。

前の第二、第三の箇條とは異ひ、教會よりも聖書の權威の方を尊重し、又聖書の自由研究を教ゆる事が實に改革運動の大原因であつたのである。

第四、七大禮典

七大禮典とは洗禮、堅信禮、感謝禮(聖晩餐禮)、痛悔禮、抹油禮、聖職禮(按手禮)、結婚禮で、而してこの禮典を執行する事を、實に教會の使用す可き儀式として承認したが、たゞ新教にて一般に禮典とするものは洗禮と晩餐禮のみである。それに按手禮或は堅信禮を執行する教會も多數あり、而して勿論結婚禮を執行する事も諸方の教會の風習であるが、痛悔禮と抹油禮とは新教では行はぬのである。堅信禮を執行する教會は之れを禮典と稱へぬが、併し實際は舊教と左程異ならぬのであり、又按手禮に就ても宗派によりその説を幾分異にし、且つ禮典とはいはぬけれども、舊教と同様な説を取るものもある。結婚を教會の禮典とする理由は何かといへば、羅馬教の充分行はるる國では、結婚や離婚に關する律法と裁判とは、國家の政治によらず、たゞ教會に關係した者であるからで、又痛悔禮を禮典とする教會は、道より迷ふた信徒が其罪を悉く牧師の前に懺悔し、牧師より赦免を受ざる以上は救はれぬといふ故を以て、牧師の助力を必要とするのである。

第五、トレント會議の稱義に關する決議
この稱義に關する決議は、随分長文で、今干茲簡単に掲載する事は困難であるが、一昧この説は新教と異ならぬ處もあつて、哀憐深き天父は、期滿ち時至れるに當り、獨子イエスキリストを此世に遣はし、彼を以てユダヤ人及び異邦人も贖ひ、萬民をして神の子たる事を得させ、又キリストに於て新に生るゝものは義とせらるゝ事を得るといふのである。然るに新教と異なる點もあつて、即ち(一)洗禮を受けざる時は義とせらるゝを得ずと説くを以て、洗禮の必要を教へ(但し洗禮志願者が、若し不得止事故の爲め洗禮を受けずして死するとも、その志願により救はるゝであらうといふのである)、(二)稱義といふはたゞ罪を赦するゝといふのみでなく、聖潔となる事をも含まれてある

のである。即ち新教の神學者は義とする事と、又聖とする事との差別を爲すと雖も、舊教の神學者は二つともに一言の稱義を以て現すのである。(三)信仰により義とせらるゝ事を教ゆるも、舊教の説によれば、神を信するの信仰を以て、正義を實行するものは、之を以て増々義とせらるゝ事を得るといふのである。然れば舊新の別なく、正義を以て働く所の信仰を必要とするも雖も、舊教では多分善行が救を求むるの方法となり、又新教では善行は救はれたもの、信仰と感謝の結果とするのである。

第六、聖體

聖體を以て生るものと死せるものとの爲め、神に犠牲を献ぐるもので、そのパンは變化してキリストの肉となり、又葡萄酒は變化してキリストの血となるといふ所謂化體説を信するのである。前にもいつた如く、不幸にして改革者中に聖晚餐の説明に就て劇烈なる議論があつたが、新教徒は悉くこの説を棄てたので、別に新教徒が一般に主張する聖晚餐の説明といふものはないが、聖晚餐を犠牲と爲す事と、化體説とを棄る事に皆一致してゐるのである。

第七、聖體のパンが葡萄酒かいつれか一にて足る事

パンが葡萄酒かいつれか一つを以て、キリストを全然受け、實際の禮典を守る事が出来ると信じたりので、即ち前にもいつた如く、舊教に於ては、普通の信徒たる者は葡萄酒を飲む事なく、たゞパンのみ受ければそれにて足ると教へたので、之に由りて僧侶と普通の信徒との差別を重んじたのである。然るに新教徒は神の前に於て僧侶信徒の差別なく、皆同じく聖晚餐のパンと葡萄酒とをともに飲食したのである。

第八、(甲)煉獄の事及び煉獄に在るものはこの世にある信徒の祈禱に由りて助けらるゝ事、(乙)聖徒を尊敬し、聖徒に祈禱を献ぐ可き事(即ち聖徒の仲保を求むる事)及び聖徒の遺物を尊重する事

(甲)煉獄に於て懲罰を受けつゝある死者は、現世にある信徒の祈禱に由り、助けらるゝといふの教を以て、教會は増々勢力を得たので、即ちその祈禱といふは所謂祈禱でなく、教會を通しての祈禱であつたのである。然れば教會の力は昔にこの世に限られず、來世にも及ぶものであつたのである。然るに新教徒は皆煉獄に關する教を以て、之は聖書にも記載されず、所謂人の作出したる空想に過ぎぬものとして放棄するのである。(乙)新教徒と雖も勿論聖徒即ち古代の有名なる信徒を尊敬はするが、併し彼等を仲保者とする事を大誤謬とするので、即ち慈愛深き天父に對し聖徒の如き仲保者の必要全然なき事を教ゆるのである。又古代の有名なる信徒の生涯に關係ある凡ての物は、歴史的興味ある者には相違ないが、併し死者の遺物の如きが靈的利益を興ふるといふ事は、實に大誤謬といはざるを得ないのである。

第九、(甲)キリスト、神の母なるマリア、及び聖徒の像を尊敬する事、(乙)教會が赦罪權をキリストより一任されし事

(甲)新教徒はマリアを神の母として極端に尊敬する事の不可なるを教へ、又禮拜の時キリストやマリアの像を安置する事は、恰も偶像教に類したるものとして不可とするのである。(乙)又教會は會員を取締るの權があり、又道より迷ふものを教會より除名し、而して罪を悔改するものを赦免して、教會の交際に復歸せしむるの權ありと教ゆれども、金錢を以て赦罪の道とする事を大惡事となし、而して教會の權威の決して來世に及ぶものにあらざる事を教ゆるのである。前にもいつた如く、この點に關するルーテルの論説は、實に改革の直接の原因であつたのである。

第十、羅馬教會は諸の教會の首にして、羅馬の監督はキリストの代人たる事、羅馬教會が諸教會の母であり、又首であり、而してペテロの後繼者であり、又キリストの代人でありとする羅馬の監督に服従す可き事に就て、新教徒は之を悉く放棄したのである。

第十七世紀

第十六世紀までの教會史は全般の教會歴史であつて、各國に關係するものは左程なかつたが、近世に至り次第に各國は別個の状態を有し、又國々によりて教會の運動も各自異なるが故に、從つて教會史も全般の歴史でなく、各國に於ける教會史となるのである。然るに第十六世紀の教會は、其國々の經歷及びその状態も異なつてをたが、たゞ改革運動といふ一事件のみは一個のもので、即ち第十六世紀の教會史は實に改革史として一個のものであつたのである。然るにその後の歴史は一個のものでなく、所謂國々により別箇に掲載す可きものである。

第六十九章 第十七世紀に於ける獨逸と佛蘭西

この教會

(甲)獨逸

第十七世紀に於ける獨逸の大事件は、三十年間の災害と、その後に於ける敬虔派の起原とである。

(イ)三十年間の戦争 (千六百十八年—千六百四十八年)

三十年間の戦争を以て獨逸は非常なる災害を蒙つたが、併し本史を以てその戦争史を詳細に掲ぐる事は出来ぬ故に、たゞ(一)その起原、(二)豪傑、(三)その結果をのふる考である。

(二) 千五百五十五年の條約を以て (第六十章の(ホ)の項)、獨逸は平和を得たが、この條約は満足すべきものでなく、寧ろ之は後日の戦争の原因となつたのである。即ち第一、ルーテル派の教會のみがこの條約に由り幾分の自由を受けたが、所謂改革派 (即ちツヰンギーとカルヴァインとの説を

主張するものは別にこの條約文中に關係なく、實に自由を得る事は出来なかつたのである。又第二、監督或は寺院長の支配する領地も、この條約文中に無關係であつて、監督或は寺院長の下にある者は一切改革を受くるの自由はなかつたのである。抑も監督及び寺院長の下にある領地は多數あつたので、その領地の人々の改革を受くる事の出来ざるは、實に無道理といふ可きである。併し凡そ五十年の間次第に改革が行はるゝに従ひ、監督の支配下にあるものも、愈々改革を求むるの心を抱き、條約に違背しても、この領地に改革が行はるゝに至つたのである。然れば北方や西方のみでなく、獨逸の東南の地方にも改革が盛大に行はるゝ事となつたが、不幸にして耶蘇會社の學校に於て教育を受け、又新教を異端として熱心反對する所の者が帝位に登つた爲に、改革運動の妨害を來したのである。ポヘミヤの人々は多數新教に加入した故に、新教を容れざる者を國王となすの心なく、爲に謀叛を起したが、所謂之が戦争の起原となつたのである(千六百十八年)。然るに不幸にして新教徒は互に一致協同する事なく、又適當なる教導者がなかつたので、同盟糾合したる舊教徒の爲めに敗を蒙り、遂に國外に放逐され、又非常なる災害に遭遇し、四、五年間にポヘミヤの人口は四百萬人より八十萬人に減少したといふ事である。皇帝は是等の勝利を以て未だ満足せず、次第に進んで千五百五十五年の條約を破り、新教に加入した土地に對し、速かに改革を放棄す可き勅命を發したが、實際この勅命を行はんとすれば、自然獨逸に於ける改革は大損害を蒙り、大苦難を受くるに至る

史 會 教

であらう。然るに舊教徒は猶ほ之を以て満足せず、次第に進んで多分獨逸に於ける改革を悉く撲滅するの運動に出づる考であつたのである。如此場合に際し、獨逸内に改革を保護する力を有する者は一人もなかつたけれども、併し他國よりその救護者は來つたのである。即ち帝國內の新教に加入した所謂領主の如きは、彼のルーテル時代のフレドリック侯の如き宗教的熱心なく、たゞ各自の權力を貪らんとするのみで、到底彼等は一致して改革を保護する事出來ず、實に帝國內の新教徒の指導者たるに適した人物は一人もなかつたのである。

(二) 如此場合に獨り瑞典國王ゴスタヴアスアドルフアス(Gustavus Adolphus)(千六百三十二年死去)のみは、獨逸に於ける改革を保護するの豪傑であつて。彼は十七歳の時、即ち大困難の時代に於て、本國の王位に登り、本國の政治を改革し、又國民を一致せしめ、その上露西亞に打ち勝ち、而して領地を擴め、貿易を開き、遂に千六百三十年に獨逸に渡り、二年間そこに盡瘁したのである。一體當時の軍隊なる者は多くなつた。雇兵のみで、分捕品を以て彼等の生活を立てるのであつた故に、敵身方の差別なく、軍隊の通過する所はもとより、その宿泊する所の土地の人々は、非常なる損害を招いたのであるが、然るにゴスタヴアスは如此事を己が軍隊に許さず、又分捕を爲す事を禁止し、出來得る丈個人に對して損害を及ぼさず、たゞ正しき平和を來さんが爲と、壓制束縛を解除せんが爲に戦つたので、人々は皆彼の行動に大に感服したのである。猶ほ彼は次第に進んで

史 會 教

舊教の最も有名なる將軍と戦つて勝利を得たが、不幸にして彼はその後負傷の爲に死去したのである。

(三) その結果は如何にといふに、その後の戦争史は別に興味のないもので、而して佛國もこの戦争に加はる事となり、遂に佛國と瑞典とは獨逸の領地を掠奪したが、たゞ獨逸人のみは大損害を蒙り、人口も大に減少したのである。然るに漸く千六百四十八年に平和を結ぶ事となり、皇帝の詔勅を取消し、改革の行はるゝ土地に對して、之を長く行ふ事を許し、又ルーテル派も改革派もともに自由を受くるに至り、それによりて獨逸内の舊教と新教との行はるゝ區域は判然するに至つたのである。

(四) 敬虔派

第十七世紀の下半獨逸に於ける大事件は別にないが、最も興味あるものは敬虔派の起原である。之は主としてスピナー(Spinner)といへる人の事業であつた(千六百三十五年—千七百五年)。彼は都會の教會牧師となり、組織神學と正しさ教義とを重んずる當時の傾向と違ひ、たゞ應用的基督教を尊重し、説教と文筆とを以てこの説を教へたのみでなく、相互の敬神の念を奨励せんが爲め、教會内の組合を設けたのである。是等の者は毎日曜の午後集會を開き、恰も祈禱會の如き方法を以て相互の信仰を奨励したので、決してルーテル教會の神學に反對する事はなかつたが、併し敬虔派といふ

神名を以て大なる誹謗を受けたのである。不幸にもウヰッテンボルグの大學はルーテル時代と大に異なりたる精神を以て、活信仰の運動に反對し、ルーテルの説を異端として擯斥したのである。併しスピナーの指導の下に神を敬愛し、道を實行するの志を起したものは幾分かあつて、又スピナーの弟子の中にフランケ(Brancke)といへる者(千六百六十二年—千七百二十七年)は、ハリー(Halle)に於て組織神學の教授をなし、彼は孤兒院や小學校等を設立するを以て、敬虔的の實行力を表現し、大に事業を起したので、その孤兒院や小學校は現今に至るまで存在してあり、而して生徒の数は三千人餘もあるといふ事である。

(乙) 佛蘭西

(イ) ルイ第十四世(千六百四十二年—千七百十五年在位) ルイ第十四世は七十二年の間位にあり、大光榮を以て國家を支配し、大王といふ名譽を得たが、彼は專制主義を實行し、國家の自由を奪ひ、所謂「國家即ち我れなり」といへるが如き獨裁政治を行ひ、又その名譽心の爲に戦争を起す事により、國家の財産を浪費し、之れが爲に國家は大損害を招いたのである。教會の政治に關する事はたゞヒューゲノットといへる新教徒を迫害したので、即ち彼は自己の不品行を悔改するの道として、異端者を撲滅する事により、天の恩寵を受くるの望を抱き、種々なる方法、特に騎兵を新教徒の家に宿らしめて新教徒を災するを許し、嚴重に迫害を

加ふるを以て、漸次新教徒を皆舊教に歸せしめ、千五百九十八年の詔勅(第六十三章の(二)の項)を無要として、新教徒に自由を與ふる事を廢し(千六百八十五年)、殘存れる新教徒を嚴しく迫害したのである。之が爲に數十萬人の新教徒は國外に脱れ、佛國は非常なる損害を招き、又新教徒は苦難に遭遇したのである。

(ロ) ジアンセン派(Jansen)とパスカル(Pascal) (千六百二十三年—千六百六十二年)

當時佛國人の大多數は舊教徒であつて、新教徒は迫害の爲に滅びたが、舊教徒の中にも烈しき爭論があつたのである。ジアンセンは組織神學の教授であり、又監督であつたが、彼は千六百三十八年に死去したのである。彼はオーゴスチンの神學を嚴重に受け容れ、又之を極端に説くを以て、耶蘇會社の憤怒を招いたので、それでオーゴスチンの神學を主張するジアンセンと、半ペラギアス(第三十四章の(二)の項)の如き説を主張する耶蘇會社との間に劇烈なる議論を起したが、併しいづれも羅馬教に服従するもので、決して新教に加入するの心なく、たゞ神學を以てジアンセン派の徒は新教と同様なる心を有してをつたのである。又その派中で最も有名なるものはパスカルであつたが、彼は幼年の頃より大智力を發揮したので、即ち十二歳の時獨り機械學を學び、又十六歳の時困難なる數學に就て論じたる書籍を著し、後ジアンセン派に加つて、宗教的大熱心を起し、物理學の深奥なる學理を研究しながら、耶蘇會社に反對する所の小冊子を出版し、彼は大なる文學的

能力を以て、當時の耶蘇會社の不品行や不徳を嚴しく譴責したのである。併て法王は耶蘇會社の勸めに従ひ、ジアンセン派の説を異端として禁じた爲に、その徒は和蘭に移りて今も猶ほ凡そ六千人も存してをるので、彼等は所謂羅馬教の教を受けながら猶ほ法王に服従せざるものである。

(ハ) 第十七世紀中の佛國に於ける有名なる宗教家

(甲) ボスエー(Bossuet) (千六百二十七年—千七百四年)

ボスエーは監督であり、又説教者であつて、新教に反對する論と、説教とを以て大光榮を得たのである。それに彼は佛語の能辯を以て大名譽を博したが、併し彼は幾分ルイ第十四世に對し阿諛するの缺點があつたのである。而して彼は如何に新教に反對するの熱心があつても、敢て羅馬法王の獨裁政治を主張する事なく、佛國教會の自由を熱心主張したのである。彼の論に由れば、羅馬法王は勿論使徒ペテロの後繼者であつて、又諸教會の支配者として尊敬すべきに相違ないが、併しその政治は獨裁政治でなく、實に立憲政治であつて、(一)大會議は所謂羅馬法王よりも權力があり、即ち千四百十五年のコンスタンスの大會議の如きは、惡法王の位を剝奪するの權があつたので、實に大會議のみが教會の信仰箇條を確立するの權があるといふので、(二)各國の教會(即ち佛國に於ける教會の如き)は如何に羅馬法王の下にあるものとしても、國內に於ける事件に關しては、之を行ふに幾

分獨立があるといふのであつた。それでルイ第十四世はこの論を主張したのみならず、法王の認許なくして國內の監督を任命する事により、この論を履行したのである。

(乙) フエチロン (Fenelon) (千六百五十一年—千七百十五年)

フエチロンも大監督として教會に於て勢力を得たが、その上彼は國王ルイ第十四世の二人の孫を教育する事を托され、教員として宮殿に於てよき働きをなしたのである。國王は彼の智力と敬神の志を愛し、新教徒に反對する巡回傳道者として使用したのである。併しフエチロンは新教徒を迫害する事を是認せなかつたけれども、舊教に服従するの熱心を以て、異端者と思ふ者に對し、舊教の道を教ゆる事に力を盡したのである。然るに彼も後自ら謬説を稱ふる者との嫌疑を受け、爲にボスエーの反對に接し、遂に法王より譴責を受けたが、彼は法王に服従するの心を以て、その譴責に服して説を取り消したのである。

(丙) ギオン夫人 (Géon) (千六百四十八年—千七百十七年)

ギオンは貴族の女で、幼年の頃より宗教的熱心を起し、寺院に入らんと欲したが、両親の命令に従ひ、十六歳にして五十六歳の人に嫁したのである。その後五人の子供をあげたけれども、夫の死去後は宗教家として後生涯(四十年間)を過し、神祕説をとり、幻象を見、默示を受けたといつたのである。それで如此神祕説を稱ふる者は、決して羅馬教に反對する者でもなく、又敢て新教に加ふる事もないが、直接神と交通するといふを以て、己が一身を全然神に献げ、萬事を神意にまかせ、而して神と一體となる事を教ゆるにより、意外にも教會の禮典や教會の政治を輕蔑するに至るのである。又如此教を極端に守る爲め、某者は無法説を稱へたといふので、ボスエーはその教を禁じ、又ギオンを暫時獄に投じたのである。然るにフエチロンはギオンの敬神を愛し、それと同様なる説を主張した爲に、前にいつた如く彼も譴責を蒙るに至つたのである。

第七十章 第十七世紀に於ける和蘭の教會

第十六世紀に於て、和蘭は羅馬教を棄ると同時に、西班牙の束縛より脱れ、獨立國となつたが、戰爭の全然終結せざる中、この新教徒中に劇烈なる爭論が起つたのである。之はアルミニウス派とカルヴィン派との論であつたのである。

(イ) アルミニウス (Arminius) (千五百六十年—千六百九年)

アルミニウスは幼年の頃より教育を求むるの熱心家で、父の死去後朋友の周旋により、六年間ライデン大學にて勉學し、後彼れは智慧を以て名譽を得、又アムステルダムといふ都府に於ける商業組合の周旋により、他國に遊學するの機會を得、チエネパに於て三年間神學を修め、又イタリヤに於て哲學を専攻し、後本國に歸りてアムステルダム教會の牧師となつたが、彼は智力があ

り、博學であり、能辯であつて、説教者として大なる人望を收めたのである。然るに當時預定に關する議論が起り、アルミニウスはカルヴィン神學を保護し、又反對論者に答ふるの目的を以て、問題を詳細に研究したが、彼は研究するに従ひ、その問題に關する説を變更し、遂に所謂アルミニウス説を稱ふるに至つたので（千六百四年）、之に對し大議論が起つたのである。その論の大意は即ち左の通である。

(一) 預定といふは、神が前以てキリストを信仰せんとする者を知り、その人を救ひ給ふ事の確定である。

然れば預定といふは無條件でなく、預知即ち前以て信徒を一々知り給ふといふ事に基くもので、神は完全なる救を與へ給ふといふ定めである。

(二) キリストは萬民の爲に死し給ふた故に、その贖罪の恩恵は萬民に及ぶもので、志のあるものは何人にもこの恩恵を蒙るゝの機會があるのである。

(三) 墮落した人間は聖靈によりて新に生れざれば、正義を實行するの力なく、又神の恩恵のなき時には何人も救はれぬが、併し人には神の恩恵を受け容るゝも、又之を棄るも自由である。

(四) 眞面目に神に信頼するものは、必ず終迄忍耐して完全なる救を蒙るゝに相違ないが、併し一回恩恵を味ひながら、後再び恩恵を棄て墮落するものがあるも知れぬのである。

以上はアルミニウスが神の恩恵と聖靈の助力との必要なる事を強く教へたので、従つて人間の責任をもともに説いたのである。即ち神は萬民を愛し、萬民を救ひ給ふの心があり給ふと雖も、人にはその恩恵を受け容るゝも、又之を棄るも自由であつて、而して滅亡するもの、滅亡は神の預定でなく、又神の恩恵の不足なるが爲でもなく、又神の恩恵を蒙るゝの機會のなき爲でなくして、自己の頑固なる心を以て神に背き、恩恵を拒むが爲であるといふのである。

(ロ) ドルト(Dort)の會議(千六百十八、九年)

アルミニウスの説に就て烈しき議論が起り、アルミニウスの死後九年に、ドルトに於てこれが爲に會議を開いたが、之れは雷に和蘭のみでなく、英吉利、瑞西、獨逸よりも數名の議員が來會し、その議員は最初からアルミニウスの説に反對する考であつて、たゞアルミニウスの説を主張する者は僅に三人のみであつたが、之れ等をも議場より退場せしめ、又アルミニウスの徒の先導者が議會の前に自説を吐く事の機會を求めた時、議長は厳しくその要求を拒み、その先導者をして速に退場せよと命じたのである。それより議員はカルヴィン神學によれる信仰箇條を制定したが、即ち(一)無條件の預定、神は前以て信仰を知り給ふのでなく、たゞ己の心の儘に某者を選び、その者の救を確定し給ふ事、(二)キリストの贖罪の恩恵はたゞ選ばれし者にのみ及ぶ事、(三)神は選ばれし者に聖靈を與へ、彼等をして信仰を起さしめ、又正義を行はしめ給ふ事、(四)神に選ばれし者は

神より蒙る所の恩恵により、終迄忍耐すべき事である。この會議を散したる後四日を経て、政府はアルミニウス派の説を主張する有名なる政治家を國賊として死刑に處したが、その後數年間はアルミニウス派の信徒は種々なる迫害に遭遇し、漸くにして又自由を受けたのである。

(ハ) グローシアス (Groling) (千五百八十二年—千六百四十五年)

グローシアスは有名なる政治家で、初て萬國公法を研究した人である。彼も政府の嫌疑を受けて終身刑に處せられたが、二年後彼は妻の智慧によりて獄を脱する事を得たのである。彼はアルミニウス派の説を主張した許でなく、基督教證據論を著すにより事業をなしたが、彼の宗教に關する最も有名なる事業は、贖罪に就ての新解説を與へた事で、之は所謂政治的解釋、即ち神は恩恵深きもので、萬民を愛し、萬民を救ひ給ふの心を有し給ふものである。然るに贖罪なくしてその儘人の罪を赦し給ふならば、その政治は實に空しく、所謂神の罪惡に對し給ふ聖潔が明白とならず、而して神が罪惡に對し無頓着であるといふの思想の起らざる爲め、神は一方に罪人を赦し、他方に自己の正義を重んずる心を明かにせんと、キリストの贖罪の道を啓き給ふたのである。即ち神の子の受難により罪を赦さるゝ事が出来るならば、之を以て罪の甚しき事が明白となり、又神が正義を重んじ給ふの心が判然するといふのである。

(ニ) アルミニウス派

和蘭に於けるアルミニウス派の徒は、第一、聖書研究を重要とし、聖書の實際的意義を研むるに熱心で、聖書の注解に就て好事業をなしたのである。第二、教會の信仰箇條の束縛に反對し、個人的責任と自由とを重んじたのである。第三、大小の區別を設け、大主義をもとに主張するものは、小事に就て如何に説を異にするとも、互に一致協同すべき事を教へたのである。然れども不幸にして和蘭に於けるアルミニウス派の徒は冷淡であつて、多分活ける信仰を幾分失つてをつたであらう。併し爾後英國に於て幾分かアルミニウス派の説が行はれ、殊に第十八世紀にはウエスレーの徒が活ける信仰と宗教的熱心とを保持しながら、アルミニウスの神學を受け容れたのである。

第七十一章 第十七世紀に於ける英國

第十七世紀に於ける英國教會の歴史は、爭論と戰爭との歴史であつて、即ちピューリタン派と監督派と互に争ひ、又これと親密に關係する所の政治的の戰爭を起したが、併し本史に充分掲ぐる事は出来ぬ故に、たゞ簡單にのふる考である。

(イ) ジェームス第一世 (James) (千六百二年—千六百二十五年在位)

エリサベス女王の死後、ヘンリー第八世の子孫が斷絶し、位に登る可き者はヘンリー第七世の子孫で、蘇格蘭の女王メリーの子のみであつたのである。さればジェームスが即位するに當り、英蘇

兩國は初めて同一の國王を戴くに至つたのである。然れども之は敢て兩國をして合併せしむる事ではなく、實に第十八世紀の初期までは、議會も、内閣も、律法も全然別箇であつたのである。倍ジェームスは幼年の頃より母の手を離れ、新教徒として教育を受け、蘇國に於て長老教會に屬したが、彼は英國に來るや歡喜して監督教會に加入し、而して彼は蘇國教會の先輩者が民權を主張する勇氣と、英國の監督が國王の權力を尊重する事とを比較して、愈々監督政治を是認し「監督なければ國王なからん」といへる程、監督に對し好誼を示したが、従つてピューリタン派に對し反抗するの心を抱いたのである。即ちピューリタン派は前にもいつた如く(第六十五章の(一)の項)、最初は教會政治と神學とに於て、別に監督派と異なる事なく、たゞ改革を全然行はんとする熱心のみが違つてをたつたのである。然るにピューリタン派は次第に歩を進めて、多くはカルヴィンに習ひ、長老政治を承認したが、監督派は之に反して監督政治を必要としたのである。それにピューリタン派はカルヴィン神學を強國に保持し、監督派はアルミニアスの神學を採用するを以て、愈々區別が判然したのである。然ればジェームスが英國に來らんとする途中、ピューリタン派の牧師凡そ八百人が願書を献げ、教會の種々なる風習を改革す可き事の請願をなしたので、例之(一)教會の牧師が常に外出して、たゞ代理を立て、牧師職を行はしむる事、(二)牧師一人にして三個以上の教會の牧師となり、その俸給を受けながら、猶ほ代理を以て職をなさしむる事、(三)小兒洗禮を執行するに十字架の標

章を爲す事等であつたのである。其故に國王の命により、ピューリタン派の牧師四名と監督派の監督九名とが三日間國王の前に各々その願意をのべたが、國王は自ら神學を論ずる能力ありと誇り、ピューリタン派の請願を拒絶して「神と惡魔とが相反對する如く、君主政治と長老政治とは相逆ふ」といつたといふ事で、又それのみでなく、全國中に教理と取締と禮拜とを一定す可しと斷言し、更にピューリタン派の牧師に對して「汝等にして我が命に従はざる時は國外に追放し、且つこれよりも一層嚴酷の刑に處す可し」といつたのである。されば監督は之によりて大に歡喜し、「キリスト以來如此國王なし」といひ、又「國王は特別に聖靈の助力を蒙りて決心せり」と批評したのである。ジェームスは自己の智力に誇つたが、併し彼には如何に學識があつたとしても、眞正の智識に於ては實際智力のなきものであつた故に、所謂「智慧ある愚者」との綽名を受けた位である。然るに彼は敢て監督派の請願を充分に容れなかつたに不拘、ピューリタン派の怒を招き、愈々國內の分裂を起したのである。たゞ彼を賞讃す可きは一つのみで、即ちピューリタン派の一つの請願をいれ、聖書の翻譯を改正した事である。故に千六百十一年に改正譯が出版になつて、今日までも英語を使用する人々の間に盛大に行はれつゝあるのである。

(ロ) チャールズ第一世 (Charles) (千六百二十五年—千六百四十九年在位)

チャールズは品行方正の人であつたが、彼は專制主義を熱心に實行するを以て、國民は次第に不平

不滿を起し、遂に内亂を起すに至り、國王を斬首したのである。即ちチャールズは第一、獨裁君主政
 治を實行せん爲め、國王の命に從はしめんとして、ピューリタン派の徒を嚴重に譴責したので、それで
 國王によりて大監督に立てられたロード (Lord) は、羅馬法王に服従するの心は更になかつたが、た
 い出來得る丈熱心に教會の禮拜を羅馬教の如くなさんと、ピューリタン派が悪しとする所の禮拜を
 極端に行つたのである。例之聖晚餐を羅馬教の聖體禮の如きものとなしたのみならず、教會の禮典
 を尊重して之を極端に重んじ、且つ安息日に就てもピューリタン派と異なり、午前中に禮拜を執
 行し、午後には娛樂をなすをよしとしたが、然るにピューリタン派は「安息日を嚴重に守る可
 し」といへる教を遵守した故に、この點に就て大衝突があつたのである。それで大監督は實に
 安息日の午後を以て娛樂をなすをよしとすと自ら教へた許でなく、諸方の牧師にも同一の事を
 教へよと命じ、猶ほ安息日の命令に從はざるの故を以て嚴罰に處するにより、ピューリタン派
 の熱心なる數千人は米國へ移住するに至つたのである。第二、國王は同一の心を以て獨り政治を
 握り、十一年の間更に議會を開く事もなく、獨裁政治を實行し、法律に背反して税をとり立てたの
 で、次第に壓制に反對するの心起り、政治的自由を求むるものが、ピューリタン派の徒と協同す
 るに由り、遂に國王に打ち勝つたが、又國王が蘇國を壓制するにより、蘇國人も謀叛を起すに至つ
 たのである(第七十二章の(イ)の項)。それで漸く國王は徵稅の爲に不得止議會を開催したが、議員

の大多數は熱心に民權を主張するの心を有したので、國王は議員の請願に從ひ、國民の自由を必然的
 に保守する事を約束したけれども、彼は數回約束を破つた爲に、民權黨は終に戰爭を起し、國王を
 捕虜として死刑に處したのである。

議會は蘇國人の助力を受けん爲め、これと同盟を結び、且つ蘇國人の請願に應じてロードを死刑に
 處し、而して教會をして充分改革せん爲め、教會の會議を開かしたためである。此はウエストミンスター
 (Westminster) 會議といふのであるが、英國のウエストミンスターといふ所に集會したのである。
 その議員は總計百二十一名で、その中獨立派は數名あつたが、大多數は長老派であつたのである。
 千六百四十三年より千六百四十九年まで會議を繼續して、信仰箇條を制定し、カルヴァイン神學を表
 明し、教會政治即ち長老派の政治の規則を決定したのである。今その敬神の實例を掲げれば、蘇國
 人と同盟を結んだ時、三名の者が一時間宛祈禱をつけたといふ事があり、又民權黨の軍隊が戰爭
 に出陣する時、勝利の爲に午前九時より午後五時まで引續いて祈禱會を開き、而して二名の者が二
 時間宛祈つたといふ事である。この信仰箇條は蘇國や又幾分米國にて使用さるゝが、本國の英國で
 は却てこれを使用せないのである。何故といふに教會の時に獨立派が政治的權力を握る事となり、而
 して同一の神學を承認したけれども、併し教會政治を是認する事なく、英國に於て行ふ事を許可せな
 かつたのである。それで一體この會議は英國議會の命令により、英國の都會に於て開會し、而して

議員は多數英國人であつたけれども、實際その事業の結果は蘇國と米國とに於て現はれ、實に本國に於ては空しくなつたのである。

(ハ) 共和政治 (千六百四十九年—千六百五十八年)

戰爭中獨立派は次第に勢力を加へたが、殊に有名なる將軍クロムエル (Cromwell) は獨立派の熱心なる信者で、而して民權黨が勝利を得たといふは直接クロムエルの軍隊の働きであつた故に、國王を死刑に處してから、クロムエルは所謂「國家の保護者」たる名稱の下に政權を握り、死に至るまで九年の間國家を統御するの任に當り、又幾分獨立派の心に適する方法により教會をも支配したのである。彼は國家を充分支配する技術を有し、且つ其政治は公明正大であつた故に、國家は増々盛大となり、從て他國にまでその勢力を及ぼすに至つたが、併しその政治は敢て憲法に基いたものでなく、たゞ武力によつたので、從つて國民大多數の希望に背き、寧ろ壓制に見へたのである。これにクロムエルの法律は餘程嚴重であるとして、多數の國民より大に嫌忌を受くるに至つたのである。

(ニ) チャールス二世 (千六百六十年—千六百八十五年在位)

クロムエルの權威はたゞ一個人の力に基いたのである故に、クロムエルが死去するや、全然その後を繼いで共和政治を保持する力あるものなく、故にチャールス二世の子が本國に歸り、直ちに王位に即くとも別に困難なかつた許でなく、却て大多數の國民がピューリタン派とクロムエルの嚴重なる政治に倦み、且つ反對の意思をも抱いてゐる際であつたから、チャールスを國王として歓迎したのである。而して舊に監督派のみでなく、長老派もチャールスの契約を信じ、彼の歸國を歓迎したが、後に至り彼等も又獨立派も、チャールスの治世中大困難に遭遇したのである。即ちチャールスは甚だ素行の脩まらざる者であり、且つ宗教には冷淡であり、而してたゞ野卑なる逸樂にのみ耽るものであつたが、さりとて敢て人を迫害するの考はなかつたのである。然るに議會の大多數が熱心ビユーリタン派と獨立派とに反對するにより、舊に監督政治を再度起したのみならず、監督政治に服従せざる牧師を罷責し、「監督政治を全然承諾し、何處までも國王に服従すべし」との法律を制定したので、この法律に循はざる牧師凡そ二千人を、千六百六十二年に教會より破門したのである。この時まで少數を除く外英國に於ける新教徒は、皆一箇の教會に屬してをたつたが、今回の分裂により、全然新教徒は國立教會と獨立教會との二派になつたのである。それで獨立派の牧師は舊に教會より破門されたのみでなく、全然その俸給を奪はれ、又種々なる迫害に遭遇したが、迫害の其一は教會政治に服従せざる五名以上の者集會し、禮拜を行ふ事を禁ずる事、その二は獨立派の牧師にして學校教師たると、又市街に入る事を禁じた事である。如此迫害に遭遇した有名なる人々の中二人を擧げば、一人はバックスター (Baxter) (千六百十五年—千六百九十一年) で、彼は二十五歳の時、市

街の教會牧師となり、其處にて二十年の間理想的牧師としてその職をこつたのみならず、『聖徒の永遠の安息』てふ表題を以て有名なる書を著し、多數の信徒に望を與へ、當時の一般の信徒と異なり、争論や争闘を好まず、たゞ自己の説を主張するの熱心はあつても、一般の信徒に自由を與ふるの志を抱き、たゞ來世の安息を説いたその上に、地上の平安をも教へ、且つ其主義を實行したのである。斯く彼は愛心に富んだ人であつたに不拘、教會より破門せられ、或は俸給を奪はれ、或は教會外にて説教を爲すの故を以て、幾回となく迫害に遭遇し、遂に凡そ二年間獄中に投せられたのである。然るに近世に至りては監督派も又獨立派もともに彼を尊敬するの念を起し、彼が往年牧師として働きたるの地に記念碑を建立するに至つたのである。次ぎの一人はバンヤン(Bunyan) (千六百二十八年—千六百八十八年)で、彼は普通の補綴師であつたが、青年の頃格別放蕩に流れたといふ事はないとしても、或は神の名を消すが如き語や、或は悪口雑言等を吐たる等、當時一般に行はれた事柄に就き、彼は後大に反省して自ら之を大罪として悔改め、二十五歳の時神の恩寵を味ひ、安慰を受けたが、一體彼は教育のなきものであつたけれども、聖書を詳細に研究する所より、平民的の説教を以て、大なる技能を現はしたのである。彼は浸禮教會に屬したが、監督政治に服従せざるの故で、十二年間獄に繋かれ、其間一回放免されたが、併し彼は再度説教をなした爲に嚴しく入牢せしめられたのである。それで彼は説教を禁じられた爲に、獄中にて『天路歷程』なる書を

を著作したが、聖書以外英國の信徒の間に最も多く行はるゝものは、實にトマスアケンピスの『模範的基督』(第五十四章の(二)の項)と、このバンヤンの『天路歷程』であるのである。諸國王は常に天主教に歸依するの心があり、天主教の信徒に認許を與へんと考へ、千六百七十二年の詔勅を以て、幾分認許を與へた爲に、バンヤンも獄より出づるの機會を得、死に至るまで説教をなしたのである。一體バンヤンは最初格別なる悪人であつて、後神恩を蒙り救はれたのであるといふ説もあつたが、併しこれは多分誤解で、補綴師たるバンヤンが萬國の信徒を裨益する程の有名なる書籍を著したといふだけは、實に蔽ふ可からざる特別の恩寵を受けたものといふ可きで、彼はこの著書の外に猶ほ數冊の書を著したのである。

(ホ) ジエームス第二世(千六百八十五年—千六百八十八年在位)

チャールスは常に天主教を信じ、而して死する前に天主教の僧侶より天主教の禮典を受けたといふ事で、彼の弟即ちジエームス第二世は、父や兄と同様に専制主義を行はんとした許でなく、天主教の熱心なる信徒であつた故に、國王は必ず國家の自由を奪ひ、英國に於ける新教を撲滅し、再び天主教を國教となすならんとの嫌疑が諸方に行はれたが、新教徒は悉く彼の反對に立ち、協同一致してジエームスの娘及び女婿たるオランダのウヰリヤムを和蘭より招いたので、ジエームスは憶病にも國を脱した爲に、爲にウヰリヤムメリーの夫婦は王位に登つたのである。このウヰリヤムは有名

なるウヰリヤム(第六十四章の(ニ)の項)の子孫で、彼は和蘭の大統領であつたが、ジェームスの娘を妻として娶つたのである。彼は宗教自由を主張するものであつた故に、彼が即位するや、直に新教各派に對し、その禮拜を自由に行ふ事を許可したが、併し英國に於て純全たる宗教自由の行はれた事は、實に第十九世紀に至り初めて實行されたのである。

猶ほ以上の事を換言すれば、新教は第十六世紀に盛大に英國に行はれ、而して英國教會の基礎に確立するに至つたが、又第十七世紀に所謂國立教會より破門された者が多數あつて、従つて國立教會以外の宗派が出来たのである。即ちその宗派といふは、第一、ピューリタン派と獨立派とが合併したのと、第二、浸禮派、第三、その當時に出来た諸小派、第四、次ぎの第十八世紀に於て出来たメソヂスト派である。ピューリタン派と獨立派とは最初別々であつたが、國立教會より破門されたピューリタン派は、不得止獨立派と同一の主義を取つたので、協同するに困難はなかつたのである。獨立派の起原に就いては第七十四章を以てのふる考である。

第七十二章 第十七世紀に於ける蘇國教會

前にもいつた如く、ジェームス第一世は最初蘇國王であつて、千六百三年英國王の位に登る事となり、初て兩國は同一の王をいたゞくに至つたのである。それで第十七世紀中は未だ別に政治的合併

は出来なかつたけれども、兩國は同一の國王の下にありて、同様なる經驗を得、而してたゞ異なる點は、英國教會は一體監督派であるから、ピューリタン派の希望する所はその教會を改革せんとするのであり、それに蘇國教會は最初長老派であつて、その教會の先輩者の事業は教會を保護するにあつたのである。それで英國のピューリタン派も、又蘇國の長老派もともに同一の神學をとり、又同一の主義を主張したので、その大目的は別に異なる所もなく、而してその迫害に遭遇する事により同一の經驗をなしたのである。

(イ) ジェームス第一世とチャールス第一世

ジェームスは最初蘇國の長老教會に屬するもので、英國教會に對しては非難輕蔑を加ふるの心を抱いたが、その後英國王の位に登るや、監督が國王に對し熱心服従する事を見て大に喜び、自ら監督教會に加入した許でなく、長老教會は抑も君主政治に甚だ不適合であるとして、出来得る限り蘇國にも監督政治を布かんと企て、遂に三名の監督を立て、或は新規則を設けたのである。即ち其規則は第一、聖晚餐を執行する時には、跪く可き事、第二、聖晚餐と洗禮とを秘密式として執行す可き事、第三、小兒に堅信禮を行ふ可き事、第四、イエスの復活及びクリスマスを祝日とすべき事等であつたが、この律法を實行する事はなかつたのである。倍チャールスは増々英國の如く又蘇國にも獨裁政治を行ふの考で、ロード監督が作つた所の祈禱書を蘇國の諸の教會に使用す可き事を

命じたが（千六百三十七年）、一體蘇國人は敢て祈禱書を使用する事を拒むの心なく、寧ろ改革を主張する牧師の少數の時分には、ノックスの作った祈禱書をも諸方に使用する風であつたけれども、今回ロードの作った祈禱書に對しては、之が使用に反對するの熱心を起したのである。その理由は第一、これは教會の大會議の決議によるものでなく、又牧師の希望でもなく、又一般の信徒の請願より出でたものでなくして、たゞ國王の命令により之を使用する事は、彼等の大に好まざる所であつたからである。即ち彼等は國王たる者は決して教會の禮拜に干渉する權なしとしたのである。第二、この祈禱書は羅馬教會の祈禱に模倣したもので、新教主義には甚だ不適當であるとしたからである。それで之に就いて不平不満を稱ふるものも多數あつたが、併し彼等が謀叛を起した手段は甚だ可笑事であつて、即ち蘇國の都府エデンボルの會堂にて、牧師が新祈禱書を初て使用せんとする時、常に路傍にて林檎を商ふ一人の老婆が、「我前に聖體禮を執行すべからず」と叫びつゝ、牧師に向ひ己が腰掛け居たる椅子をとりあげ之を投げつけたのが初りで、この老婆の憤怒こそ實に全國民の憤怒の導火線であつたのである。されば上下の區別なく、大多數の國民が國王の教會に干渉する事を以て、之を壓制として熱心反對し、その翌年の三月一日、貴族も平民も又牧師も多數の者等が蘇國教會を保護せんとする堅固なる契約を締結し、同年直に教會の大會議を開き、蘇國に於ける監督と、又國王が作った所の教會に關する規則とを全廢したのである。その上彼等は獨立を維持せんが爲、

軍隊を召集して國王の軍と戦つて之に勝ち、遂に英國の北境にまで進軍するに至つた故に、不得止國王は蘇國人に敗を取つたのである（千六百四十一年）。

(ロ) 英國と共和政治との關係

前にもいつた如く、英國の民権黨とピューリタン派とは、同じくチャールズ第一世の壓制政治に反抗して戦争を起したが、彼等は蘇國人の助力を受けん爲め、彼等と同盟を結び、その契約を承認した許でなく、ウエストミンスター會議には蘇國より派遣された使者も出席し、その時制定した所の信仰箇條に大に感化を與へたのである。然るに前にもいつた如く、英國に於ける獨立派は次第に勢力を得、遂に（千六百四十九年）國王を死刑に行ひ、クロムエルは國家の保護者として政權を握つた故に、蘇國人は如何に獨立派と同一の神學を採にしても、教會政治に就いては異主義を採り、又國王を死刑に處する事を不可としたので、決してクロムエルに服従するの心は更になかつたのである。然るにクロムエルは彼等に勝を得、而して彼は死に至るまで蘇國の上にも政治を施したが、併し彼はその教會に干渉する事はなかつたのである。されば如何に蘇國人がクロムエルの支配を受ける事を好まぬといつても、之を以て決して苦痛を感じる事はなかつたのである。

(ハ) チャールズ第二世

クロムエルの死後、蘇國人も英國人とともに、チャールズ第二世を國王として歓迎したが、この國王

の血統は蘇國であつて、而してチャールス二世は即位する前に、教會を保護する約束を承認して、其の後蘇國人はチャールス二世に對して大に失望を來し、且つその壓制の爲めに苦難に遭遇したのである。即ち彼は直に監督政治を立て、若しこの政治に服従せざる者がある時は直に嚴罰に處したのである。例之監督政治を受けざる牧師を教會より破門し、その代りとしてこの政治に服従する所の新牧師を立てたが如きで、この新牧師の多數は牧師たるに不適任のもので、教會員は如此者を牧師とする事を好まず、爲にその説教に欠席する者があれば、政府は嚴しくその欠席者を罰したのである。又破門された牧師が山中に隠れ、潜に説教を爲す事を聞かざらば、成る可く政府はこの説教を禁じ、且つ其處に集會した者の判明する時は、直に嚴罰に處したのである。それで漸く教會の獨立を保護せんとする有志が謀叛を起すに至つたけれども、國王の軍に打ち破られ、爲に謀叛に關係したものは恐る可き刑罰に處せられたのである。然るに却て彼等は更に憤怒を起し、大監督を殺害したので、爲に政府は愈々刑罰を加へ、再び戦争となつたのである。又今回の戦争も民權黨は政府軍に負て、遂に捕虜となつたものが千二百人もあつたのである。それでこの捕虜は冬期中大空の下に繋かれ、而して多數は寒氣の爲に死したが、其残れる者を奴隸として米國に送り、斯くして數年の間監督政治に服従せざる者を、男女にかゝはらず迫害を加へて死刑に處したのである。

(三) ウヰリヤム第三世によれる革命

千六百八十八年にジェームス二世は英國を脱れ、その女婿たるウヰリヤム第三世の即位するに由り、蘇國人も漸く長老教會を維持するの自由を得た故に、蘇國人は直に監督政治を廢し、従前の如く長老政治をしくに至つたが、今日までも蘇國人の大多數は長老教會に屬するものである。

第七十三章 第十六、七世紀に於ける他宗派

第十六世紀の改革により起つた所の大教派の外に、第十六、七世紀に幾多の宗派が起り、或は異端といふ可きものもあり、或は熱心なる信徒もあつたが、その重なるものをこれより簡單にのぶる考である。

(イ) ソシナス(Socinus) (千五百三十九年—千六百四年)

新教と羅馬教との異なる點は幾個もあるけれども、舊新兩教ともに基督教の大主意と、ニカヤ大會議に於て制定した信仰條目を受け容れるのであるが、併し普通の教會と異なる信仰を説くものも起つて、その中で最も有名なる者は實にソシナスである。彼はイタリヤ人で、彼の教は矢張りイタリヤに於て行はれたが、これは文學の復興(第五十六章の(ニ)の項)と同一の精神であつて、羅馬教の壓制に服従せず、人智の自由を尊重したのである。然れども別に宗教的熱心なく、且つ神に對して

敬愛の念もなかつたので、如此に心を以て彼はイタリヤを脱れ、瑞西に赴き、其處にて彼の叔父に當る人の論説を研究し、これを基礎として次第に新宗派を組織したので、其後ポーランドにこの道を傳へ、そこで死去したが、この道は暫時ポーランドに随分盛大に行はれたのである。それでその教の大主意は何であるかといへば、即ち默示なくば救道は人に了解されぬ故に、神は聖書と又殊にキリストを通して救道を現はし給へば、道は人智を以て發見する事は出来ぬが、併し決して道理に背反するものでなく、實に道理に適當する様聖書を説明す可きであるといふので、それで罪に就いてはペラギアス(第三十四章の(イ)の項)と同様に教へ、人はアダムの原罪には關係なく、各自た善惡を自由に行ふの力があり、自己の惡事を以て罪人となるので、又救といふはキリストの死による事なく、たゞ神がキリストを通して現はし給ふた道を受け容れ、而してキリストの模範に倣つて、之を實行するによるので、又キリストといふは、彼は不思議に誕生し、罪も汚もなくて神の道を完全に現はすもので、其上死して後第三日に復活し、又昇天して、神より世界を支配するの政權を授かりしものである故に、彼を主又神の子として崇拜す可きであるが、併し彼は神でなく、たゞ不思議に誕生し、特別の權威を授けられたに過ぎぬものである。何故といふに三位一體といふは實に道理に背反する教である故に、決して信す可きものでないといふのである。抑もソシナスの説は第四世紀のアリアスの説(第三十章の(イ)の項)と比較すれば、兩人とも三位一體説を放棄したが、アリアスの説によれば、キリストは天使の長の如きもので、人類よりは遙に優れたものであるとするので、又ソシナスの説によれば、キリストはたゞ特別の人であつたのである。それで現今普通のユニテリアン派の説と比較すれば、キリストの不思議の誕生、キリストの奇跡、キリストの復活等を受け容れ、其上キリストを以て萬物を支配するの權を授けられた主として尊敬するのである。即ちソシナスの説によれば、不思議の誕生、奇跡、復活の如きは勿論超自然であるが、併し敢て道理に背反するものでない故に、之を信するに困難はないといふのである。それにソシナスは道理に適合する様聖書を説明す可しと固く教へたが、神の奧義を悟るには人智の如何にも不足なる事を考へ、超自然の默示の必要なる事を頻りに説いたのである。

(ロ) 浸禮派
改革の最初よりルーテルの如き改革者とは違ひ、極端に改革を稱へたものもあつたので、彼の小兒洗禮を承認せずして、小兒の時代に洗禮を受けたものは、猶ほ再度洗禮を受く可しと教ゆる事により、アナバプテスト(Anabaptist)即ち再洗禮派と稱ふる一派があつたのである。併しこの宗派の根本は洗禮に關する説でなく、たゞ第一世紀の教會に全然摸倣するといふ事にあつたので、即ち國立教會を承認せず、第一世紀の如くに信徒は自由に集合して教會を設立し、直接聖靈の誘導を蒙る可きで、決して國家の政治が教會の上になで干渉す可きでないといふので説いたのである。それで獨逸に於ける

るアナバプテストは第二世紀のモムタニ教(第十九章の(三)の項)と同じく、恰も宗教狂であつて、預言者といふ者に誘惑され、終に種々なる混雜を惹起したのであるが、ルーテルは之に反對して、その運動の如何にも過誤なる事を強く説破したのである。然るに瑞西に於けるアナバプテストは如此混雜を惹起する事なく、たゞ靈的宗教を重んじ、且つ信徒は自由に教會を設立するの權ある事を教ゆるを以て迫害を受け、遂に多くは撲滅するに至つたのである。然れども如此精神を有する者は敢て滅亡する事なく、第十七世紀の中頃には英國に於て一宗派として現はれたが、その起原に就いての歴史は詳細に解らぬ。兎に角千六百四十四年にその信仰箇條を制定したといふ事である。

(ハ) フレンド派

この派はフォックス(Fox)千六百二十四年—千六百九十一年)といへる人の運動の結果で、その兩親は特別敬神の志ある人で、彼も又幼年の頃より神を熱心に敬愛し、力めて神意を詳に知らんと思ひ、幾人どなく教會の牧師に質問したけれども、満足の解答を得ざるが故に、不得已一人諸方を廻りつゝ、神の事に就いて考へ、終に神と交通するといふ事の喜悦を味ひ、それで牧師の如き人の助力がなくとも、たゞ直接キリストの愛と恵とを蒙る可き道のある事を實驗し、而して自己の經驗を基礎とした教を以て、諸方にその道を傳へたので、千六百四十八年よりその道に感動するものも幾

人か起つたが、又之を嘲弄するものも多數あつたのである。彼の徒の「主の語によりて慄く可し」といへる勸言に基き、某者がこの一派を「クエーカー」(Quaker) 即ち「戰慄者」と稱へ初めたので、一般の人はこの名稱を以て嘲弄を加へたが、併し彼の徒は互に愛す可き事を尊重して、自ら「フレンド」即ち「朋友」といふ名稱を使用したのである。夫より數年間迫害に遭遇して、フォックスの如きは八回までも獄舎に投せられたのである。然るにウヰリヤム第三世が登位してより、彼の徒は自由を得たが、併し敢て其數は増加する事なく、たゞ英米兩國に於て十萬人許であつたといふ事である。惜この派の大主意とする所は、聖靈の誘導を尊重するにあつたので、それこそ其の主意は前のアナバプテストとは餘り異ならぬが、之を實行する方法に於て相違があつたのである。則ち其の一は靈的宗教を尊重するを以て、教會の儀式、即ち洗禮、聖晚餐に至るまでを排斥し、又教會の牧師或は説教者の助力よりも、男女の別なく聖靈にみたされたる信徒の勸言を重んずるが故に、若し聖靈に感動するものがない時には、黙禱を以て禮拜を行ふたのである。又其二は太五ノ三十四の「誓ふ勿れ」同じく三十九の「惡に敵すること勿れ」といふが如き語を文字通り極端に説明して、凡ての戦争に全然反對し、兵士となる事を堅固に拒み、誓の如きは如何なる場合にても一切使用すべからずとしたのである。

(三) 自然神教

これは第十七世紀に起りて、第十八世紀の中頃まで英國に於て幾分行はれたが、之に就いては大議論があつたのである。この教の設立家ともいふ可きはヘルバルト (Herbert) (千五百八十一年—千六百四十八年) で、その教によれば、宗教の要點とする所は第一、神の存在、第二、神を愛す可き事、第三、正義を實行すべき事、第四、罪を悔改む可き事、第五、來世の賞罰等の如きで、是等は皆人類自然に信す可きものである故に、是等を現はす爲に別に黙示の如きは不必要であり、而して是等の要點の外に必要とす可きものもない故に、是等に加へた所の教理は別に必要でなく、實にたい祭司の作つたものに過ぎぬとしたのである。それでヘルバルトの時代には、別に是等の説に就いて議論するものも餘りなかつたが、第十七世紀の下半、或は第十八世紀の上半に於て、如此説を唱道する者七八名も起り、従つて之に對して答辯を試みるものも幾人あつて、大議論となつたのである。今一二の人の説を擧ぐれば、トーランド (Toland) (千六百六十九年—千七百二十二年) は「基督教に與義なし」といふ論、即ち純粹なる基督教には與義といふ可きものはないといふ説を以て、超自然的基督教を駁したので、即ち基督教の實際なるものは人智を以て自然に了解する可きものであるといつたのである。次にチンダル (Tindal) (千六百五十七年—千七百三十三年) は、基督教は開闢より起つたものであるとの説を以て、自然神教の完全なる事を論じ、即ち道理に循つて正義を實行するの外實際の宗教はないと教へたのである。されば是等の徒輩は黙示の必要を拒絶し、

又奇跡とキリストの復活の如きを全然排斥し、而して三位一體の如き與義をも放棄したので、即ち超自然的宗教を廢してたゞ倫理をのみ教へたのである。彼等は如何に神の存在を教へても、その神は敢て人類に關係なく、又天父といふ可きものにあらずして、たゞ造物者といふに過ぎなかつたのである。それで如此議論に對し辯解を試みたものも多數あつて、即ち自然神教の不足なる所が數十年間の經驗と、又第十八世紀の中頃の信仰大復興 (第七十六章) とを以て大に判然したのである。その自然神教の反對論者中の最も有名なる者は、バットラー (Butler) とする監督 (千六百九十二年—千七百五十二年) で、彼の有名なる著書は、神の存在を信するならば、基督教の如き黙示を信するは決して困難にあらずといふの論であつた。

第七十四章 第十七世紀に於ける米國

第十七世紀に英國より米國に移住したものは幾人もあつて、その殖民地が現今の米國の基礎を据ゑたのである。眞先に移住したのは千六百七年であつたが、教會史に特別關係あるものは米國の東北、即ち新英國 (ニュー・イングランド) に於ける殖民地の建設と、獨立派教會の設立であるのである。

(イ) 獨立派の起原

前述した如く (第六十五章の (一) の項)、第十六世紀より英國の新教中に保守的の徒輩もあり、又根本

的の改革を主張するピューリタン派もあつて、双方の間に教會を改革する事に就いて議論があつたが、併しどもに教會政治に就いては同説を採つたので、即ち國立教會所謂英國教會を賛成し、且つ英國人たる者は小兒洗禮を受くる事により、悉く教會に加入し、而して教會より除名する、事がないならば、直にその教會に属するものたる事を承認したのである。然れば兩派ともに教會の説明に就いては同説を受け容れたが、たゞ教會の禮拜等に就いて争論を戦はしたのである。然れども獨立派の徒とピューリタン派の徒とは、同一の神學と同一の宗教的熱心を有しながら、猶ほ教會に就いて異なる所の意見を抱いたので、則ちアナバプテストと同じく、國立教會の如き所謂英國教會といふものを全然排斥し、各地方の信徒は相互にキリストに服従するといふの約束により、教會を設立す可き事を教へたのである。故に如此説に循ふ場合には、英國教會といへる一個の團體の代りに、各地方の教會が幾個も起り、その諸教會が相互に交際し、而して各自獨立の體面を保ち、敢て監督或は大會の如き權威の下にあらざり、誠に自由であるといふのである。それでこの徒の論説の要點は二個あるので、第一、小兒洗禮を受けたものも、成人してから新に生れ、實際の信徒となり、而してキリストに服従するといふの約束をなさざる中は、教會員とす可きものでなく、即ち教會員たる者は一般の國民でなく、たゞ新に生れてキリストに服従するの約束を爲したといふにあるのである。第二、教會といふ可きものは地方の教會で、キリストの外に諸教會を支配するの權威を有するものは

ないといふので、即ち羅馬教の法王や、監督教會の監督、又は長老教會の大會の如きを悉く放棄したのである。是等の論説は實に瑞西のアナバプテストと同説であつて、それで和蘭から移住した所のアナバプテストの感化により、如此説が英國にも行はれたかも知れぬが、その事の確實なる歴史はないのである。然るに英國の獨立派の徒はアナバプテストとは異なりて小兒洗禮を執行したのである。以上の如き説が第十六世紀の末頃に少しづつ、英國に行はれたが、その説を傳ふるものはブラウン(Brown)(千五百八十年)とバロー(Barrowe)(千五百九十二年死去)であつたのである。この兩人を比較するならば、ブラウンは各教會の政治を眞正の共和政治であるとして、一般の教會員の權力を教へたが、併しバローは各教會の牧師の權力を重んじたので、其他は區別がなかつたのである。借以上の如き説を主張するものは甚だ僅少であつて、其中多數は位置の卑き貧賤のもので、而して彼等は如此説を受け容れ、又如此教會を設立する事により、嚴重なる迫害を蒙り、又バローの如き先驅者は四五人も死刑に處せられたのである。

(ロ) 獨立派の移住

バローの牧する教會はロンドンにあつたが、迫害の爲に和蘭に移住し、而して不幸にも喧嘩争論の起つた爲に殆んど全滅に歸したのである。米國の組合教會の母教會は、英國の北方のスクールビー(Schoolby)と云へる村落の教會であり、又その村落はロンドンより北方に通ずる街道の驛であつて、こ

の驛長ルースター (Brewster) といへる人の住宅に僅少の人々が集會し、こゝに設立した教會が所謂米國組合教會の母教會であつたのである。この教會創立の年は千六百六年(明治三十九年に三百年の紀念會を開催したのである)で、又この教會の牧師はロビンソン (Robinson) といふ人で、ルースターは教會の長老であつたのである。即ち最初の獨立派の教會は、各教會の獨立を鞏固に尊重するを以て、長老派と全然異なつたが、各教會の牧師とともに長老をも選舉し、教會の取締を牧師と長老とに一任するを以て、現今の長老派の教會と能く似てをたつたのである。儲この教會も迫害の爲に二年の後和蘭にのがれ、ライデンと入る邑(第六十四章の(ホ)の項にあるライデン)に移住したが、長く他國にある事を好まず、さりとて本國にも歸る事出来ず、遂に米國に移り、其所にて新英國を建設せんと希望を起し、種々なる困難と災害を受け、爲に其半數程は米國の東北に移り、千六百二十年十二月二十一日プリマス (Plymouth) と入る所に上陸し、其所に殖民地をトしたるのである。其移住民の數は百二十人許で、食物は疎悪であり、加ふるに種々なる困難があつて、凡そ一年間にその半數は疾病の爲に死し、殘つた所の男子の大人はたゞ僅に二十人に過ぎなかつたのである。然れども彼等は敢て失望落膽する事なく、猶ほ本國に歸らんとする心も起さず、忍耐に忍耐を重ねて、次第に殖民地も盛大に赴くに至つたのである。この教會は米國のコングレッションの母教會で、間接には實に日本組合教會のもとであつたので、誠にその歴史は興味あるものである。それで

史 會 教

その感化は非常に洪大となつたが、併し殖民人は餘り増加する事もなく、たゞ十年間に人口は僅々三百人に過ぎなかつたのである。若し最初たゞ一人にてこの殖民地を建設せんとしたならば、多分滅亡に歸したに相違ないのである。然るに幸にもピューリタン派の徒が數千人この殖民地の近傍に移住し、且つ同一の教を受くる事により、實に米國獨立派の教會は盛大に赴いたのである。

(ハ)ピューリタン派の移住

前述した如く(第七十一章の(イ)(ロ)の項)、ジエームス第一世と、チャールス第一世の壓制の下に、ピューリタン派の徒は迫害に遭遇したが、數年間は能く忍耐に忍耐を重ねたけれども、チャールス第一世は議會をも開會せずして、直に専制主義を實行した故に、彼等は最早英國に於て全然自由を失ひたる事を愛ひ、遂に米國に移住するの志を起し、千六百二十九年より凡そ十年の間に移住したものが凡そ一萬人であつたが、是等の徒はプリマスの地方に新殖民地を開設し、其中心の場所をボストン (Boston) と命名したのである。このピューリタン派の移民の數は獨立派の移民よりも多數であつて、又その中には社會の高位を占むるものもあり、富豪もあり、又大學卒業の人も數十人もあつたので、實に有力なるものであつたが、併し最初は獨立派と異なる所の教會政治を慕ひ、且つ又英國教會に向つて別に反對するの心もなく、寧ろその教會を離れず、却てその教會を母教會として尊敬し、たゞその教會を改革せんとするの希望であつたが、其神學と宗教的熱心とは敢て獨立派

史 會 教

と異なる事なく、其上本國を離れ遙々遠き地に移住した所の心は、遂に其隣地に住居する獨立派の徒と交際を開き、且つこれと一致する事の決して困難なきに至つたのである。されば米國のロングリゲーション派といふは、所謂ピューリタン派と獨立派との一致の結果であつて、而してその大主義とする所は實に獨立派の主義とする所であつた故に、如何に獨立派の殖民地は微々たるものであつても、ピューリタン派の殖民地に獨立派の主義を傳ふる事により大事業をなしたのである。

(三) 新英國の南方の殖民地

前の殖民地は二ヶ所どもにニウ、イングランドの東海岸にあつたが、夫より少時にして又ニウ、イングランドの南方に二ヶ所の殖民地が同主義を以て建設され、即ち千六百三十六年にポストンの地方から數百人のものが西南の地方に移り、コンチクコット (Connecticut) の殖民地を開き、又千六百三十八年に英國より移住したピューリタン派の徒がその南海岸にニウ、ヘヴン (Newhaven) の殖民地を開いた故に、少時の間は獨立派の殖民地が四ヶ所もあつて、彼等は各自自由獨立を保ち、相互に保護助勢をなさんと同盟を結んだのであつた。然るに其後ポストンとプリマスとは一となり、又コンチクコットとニウ、ヘヴンとが一となつたので、而してその大主義は別に異ならぬけれども、次第に發達するに従ひ、東方のポストンと南方のコンチクコットとは幾分づゝ區別が出來たのである。

(ホ) 新英國の教會

前にもいつた如く、この教會はピューリタン派と獨立派との一致結合の結果であつたが、その大主義は獨立派の主義で、その要點の第一は小兒洗禮を以て教會に加入する事なく、たゞ成人してより新に生れたるの經驗を以て、實際の信者たる事を教會に表白し、且つキリストに服従する所の約束を公表する事により、初めて教會に加入する事、又第二、各教會は獨立たる事といふのであつた。然るに第十七世紀の米國組合教會は獨立派の主義と異なり、即ち獨立派の主義によれば、國家政治は決して教會に干渉するの權はないが、新英國の移民は九分九厘まで組合教會に屬するものであつて、而して同一の人が殖民地の政治も又教會の政治も執務した故に、國家政治と教會政治との區別が幾分混同してをつたので、従つて殖民地の政治が教會にまで干渉する事が幾回もあつたのである。例之其一、殖民地の議會の許可なき時には、新教會を設立する事の出來ざるが如き、其二、殖民地の議會の命令によりて、教會の會議を開會するといふが如きで、それにコンチクコットに於て、第十八世紀の末まで殖民地の官吏が税金を徵集するともどもに、教會牧師の俸給をも集める事があり、又他宗派に附屬せざるものは、凡て一般の税金を納むる如く、組合教會の牧師の俸給にあつる税金をも納む可きであつたのである。それで別に他宗派を全然禁ずる事はなかつたが、併し第十八世紀の末までは完全なる宗教自由はなかつたので、凡そ二百年間の經驗により、漸く獨立派の

主義を完全に行ひ、又宗教自由をも全然興ふるに至つたのである。

第十七世紀の教會歴史に於て、最も注意すべき事はたゞ一ある。即ち千六百六十二年に『半途契約』といふ事を許したので、この『半途契約』といふは何であるかといへば、即ち聖靈によりて新に生れなければ教會に加入す可からずといふ説に循ひ、當時小兒洗禮を受けて後、神を尊敬し、正義を實行するの志があつても、未だ聖靈によりて新に生れたといふ經驗のなき者が次第にあつて、是等の者に對し難問題が起つたので、それで如此人や又如此人の小兒を全然教會の交際より斷つといふ事になつたならば、實に遺憾の事であるといふ所から、遂に『半途契約』といふ方法を定め、即ち教會の取締に服従するといふ約束を以て、如此人が自己の小兒に小兒洗禮を授くるの許可を得たのである。所謂如此人は教會の正會員でなく、又聖晚餐にあづかる事も出来ないけれども、たゞ教會の取締の下にあり、且つ教會の交際にあづかり、又その小兒は洗禮を受くる事を得たのである。斯くして『半途契約』といふ方法は設けられ、又多數の教會は之を採用し且つ實行したが、併しこれに就いては大議論が起り、又これに反對して正會員にあらざればその小兒に洗禮を施すべからずと論ずるものもあつたのである。

(ハ) 浸禮教會

前陳した如く、新英國の信徒は神を敬愛し、宗教を深く熱心に實行するものであつたが、彼等も又

宗教自由の主義を充分に悟らず、混雜を起すと思ふ所の主義は一切之を許さず、而して亂雜の説を教ゆるといふの理由を以て、フレンジ派の徒を追放し、或は處罰し、又浸禮派をも許さなかつたのである。故に浸禮派の徒は新英國の東南に別箇に微々たる殖民地を建設し、其處にて初めて宗教自由の主義を實行するを得たのである。

第七十五章 第十八世紀に於ける歐羅巴

(甲) 佛國

前にも述べた如く(第六十九章の乙)の項、ルイ第十四世が専制主義を實行して、曾に佛國人の自由を奪つた許でなく、ヘンリー第四世の制定した契約をも破棄して、新教徒の自由を蹂躪し、彼等を厳しく迫害したのである。然れば如此迫害を以て羅馬教徒は勝利を得たと誇つた爲に、殘存してゐる僅少の新教徒はたゞ潜伏して公然たる運動を爲す事が出来ず、又其上耶穌會社は法王と國王との助勢をたのみとして、異説を唱ふるジャンセン派の徒をも嚴重に迫害したのである。然れどもその束縛の結果としてルイ第十四世の死後(千七百十五年)佛國には不信仰や、教會の壓制や、又國王の束縛に反對する心が次第に起り、遂にこの世紀末となつて(千七百八十九年)大革命を惹起し、或は國王を死刑に行ひ、或は暫時教會をも廢止するまでに至つたのである。その不信仰を唱えた者

の中、最も著名なる者はヴォルテール (Voltaire) (千六百九十四年—千七百七十八年) であつたが、彼は文學的能力を充分に有し、且つ佛語を使用するに甚だたくみであつた故に、第十五世紀の エラスマス (第五十六章の(ホ)の項)の如く、文學界中恰も帝王の位置をしめてをつたのである。併し不幸にして彼は純粹の基督教的精神を知らず、たゞ佛國に行はるゝ所の羅馬教や、耶穌會社の歴史や、迷信のみを目撃して、之に反抗するの志を抱き、爲に基督教全體を駁論したのである。然るに彼も當時の束縛を免れずして、自己の村落に會堂を建築し、或は諸方より聖徒の遺物を集め、而して羅馬教會に附屬するといふの告白を以て、幾回か聖體禮に列席したのである。それで彼は自然神教に對する幾分の信仰を有したとしても、活ける信仰は毫もなく、又基督教の歴史をも詳細に知らず、たゞ長歲月の著述を以て、教會に反抗する運動を試みたのである。當時羅馬教の神學者は、國王の助力を以て反對論を撲滅すると誇りながらも、猶ほ如此文學的反對論に對しては更に答辯するの力なく、爲に佛國人の多數は實に信仰を失ふに至つたのである。

當時百科全書の出版があつて (千七百五十二年—千七百六十四年)、其編纂者は所謂無神論者で、ヴォルテールも又この著述に關係した故に、政府の束縛の下にありて、直接基督教を反駁する事は出来なかつたけれども、間接に出來得る天主教に反抗したのである。

ルソー (Rousseau) (千七百十二年—千七百七十八年) はヴォルテールと同年に死去した人であ

史 會 教

るが、彼も文學的能力を充分に有して、たゞヴォルテールと異なる事は、キリストの人格に對して次第に感動する所があり、ソクラテスは聖人の如く死したがキリストは神の如くに死せり」といつた如く、キリストを以て一般普通の人間よりも遙かに優るゝ事を興味ある様に説いたのである。然れども彼は自ら肉慾を制するの力なく、妻をも娶らず、而して彼が得た所の小兒を孤兒院に寄託するといふが如きで、それに彼は感情的にキリストを尊敬するといつても、全然基督教を信仰するの困難なる事を公言し、以て教會に反抗したのである。彼は『民約論』といへる一種の議論をたて、個人の自由を社會に一任して政治を施す可き事、又國家の支配者は社會の代理者であつて、國民を支配するの權ある事、又壓制を加ふる所の支配者に對しては之に服従す可きの義務なき事を論じて、大革命の道を説いたのである。

斯くして佛國人は國家政治の束縛に忍耐する能はざるの心を抱き、終に大革命を惹起した時、彼等は曾に專制主義や政府の壓制を廢止したといふ許でなく、或は國王或は位置ある者數千人を死刑に行ひ、又基督教を排斥してその代りに道理を以て神となし、之に新宗教を立て、十日毎に新安息日を定め、一人の艶麗なる娼妓を道理の神の化身なりとして尊敬するなど、全然聖道より迷つたのであつた。然るに如此混雜したる不秩序の革命に不満を抱き、これに對して次第に規律を貴ぶ所の心が起り、直にナポレオンを皇帝として受くるに至り、その上羅馬教の政治を入れたので、實に

史 會 教

第十八世紀に於ける佛國は興味ある歴史に相違ないが、其結果は失敗といはざるを得ないのである。

(乙) 獨逸

(イ) モレビアン派

ジョン、ハス(第五十五章の(乙)の項)の事業の結果として、ポヘミヤとその隣國のモレビヤは宗教的熱心を起し、而して羅馬教に服従せざるものもあつたが、如此者は其後ルーテルの改革説を歓迎し、數十年間兩國に於て新教は盛大に行はれたのである。然るに第十七世紀は三十年間の戦争(第六十九章の(イ)の項)の爲に、新教徒は殆んど滅亡したが、たゞ少數の者がモレビヤに残存して、潜かに神を禮拜してをつたのである。猶ほ彼等も困難に遭遇した故に、千七百二十二年クリスチャン、ダビデとスヘン大工の指導の下に、少數の者が本國を出で、サクソニーに脱れ、ジンゼンドルフ(Zinzenorf)とスヘン貴族の領地に住居する事となつたのである。このジンゼンドルフ伯(千七百一年—千七百六十年)といふは、當國の大臣の子であつて、彼は幼年の頃父に死別し、祖母より教育を受けたが、この祖母はスピナー(第六十九章の(ロ)の項)の親友であつた故に、彼より活ける信仰を受けた人である。さればジンゼンドルフは幼年の頃より甚しくキリストを敬愛するの熱心があつて、その生涯の目的とする所はたゞキリストに従ふといふ事であつたのである。然るに彼が大學

を卒業してから、親戚の要求に應じ、官吏となるの考で法律學を修めてをつたが、其當時モレビヤより脱れ來つたものを大に歓迎し、己が領地に住居する事を許可したといふ許でなく、彼は彼等と交際するに従ひ、次第に彼等とともに働く事が彼の爲す可き天職であるとの心を起し、遂に彼は二十七歳の時官吏たるの志を全廢し、モレビヤ人の先輩者として彼等の間に生涯を費したのである。モレビヤとポヘミヤより脱れ來つた三百人の外に、又同一の志を抱くものが諸方より集り來り、ジンゼンドルフの指導の下に新宗派を作つたのである。彼等はもとよりルーテル教會を離るゝの心なく、たゞ敬神の道を實行して、互に助け合はんとの目的で『兄弟』といへる名稱の下に新組合を組織したのであるが、これぞ一の新宗派となるに至つたのである。この宗派の神學は勿論ルーテル教會の神學と異なる所なく、たゞ彼等は教理よりも感情を重んじ、最初はキリストを敬愛するの心甚しくあつて、キリストを以て己が組合の直接の首なりとの考より、常に圖をとりて凡ての決議をなし、之を以てキリストの誘導であるとしたのである。此宗派の會員は凡そ三萬人もあつたが、彼等は凡て自己の領地に住み、自己の村落を建て、常に教會の禮拜のみならず、日々の業務に至るまで、先輩者の指導に服従し、又組合の規則に法つて行ふのであつた。其上彼等はキリストを敬愛するの熱心より、特別に他國傳道の志を起し、未開の地即ちコロンボ人の如き賤者に對し、愛心を盡して働く所の傳道者が多數輩出した故に、本部の人数は三萬人であつたけれども、他國傳道の結果、他

國にある所の信徒は凡そ八萬人もあつたのである。

(ロ) 合理論

第十八世紀の上半に英國に於て自然神教が行はれ、又同世紀中に佛國に於て不信仰が行はれ、又獨逸に於て合理論が行はれたが、併しこの三つとも根本的には同様の運動で、即ち第十六、七世紀の宗教的争論に反對する所の運動であつたのである。然れども國によりて多少その運動に相違があつて、即ち英國の自然神教論者は自然を尊重し、默示の無要を論じ、又佛國のゾオルテールの如きは文學的能力を以て教會を駁撃し、又獨逸の合理論者は或は神學者であつて、基督教の教理や、歴史や、又聖書を自由に討究する事に誇つたので、尤も其中には活ける信仰を有する者もあつたが、その事業の結果は基督教に關する疑惑を起し、活ける敬神の念を妨害するに至つたのである。それで英國の自然神教と同じく、倫理を説いたが、神に對する活ける信仰は殆んど消滅してをつたのである。詳細に是等の歴史をのぶるといふ事は出來ぬが、たゞ聖書の自由討究の先驅者たる一人を擧ぐれば、セムラー(Semler) (千七百二十五年—千七百九十一年) はハレ大學の組織神學の教授であつて、彼れ自身は活ける信仰と實際の敬神の念を有してをり、且つ聖書の自由研究を説く事によりて、基督教徒の自由思想の途を啓發したが、然るにこの事業の直接の結果は、多分活ける敬神の念を妨害する事となつたのである。猶ほ一言を以ていへば、基督教の歴史的研究、又聖書の智識的研究、又思想の自由を過度に尊重したる結果は、神との靈的交通、又は天父に對する敬神の念等を多分忘却するに至らしめたのである。如此運動により第十八世紀下半に於ける獨逸教會は、僅少のモンビアン派を除く外、大抵活動力を失つたのである。

同世紀に獨逸に於て近世哲學の先驅者たるカント(Kant) (千七百二十四年—千八百〇四年) は、哲學の途を啓發したが、彼は神の存在を信じ、又倫理を重んずるの熱心があつたに不拘、彼は基督教を默示として信するの困難なる事を考へ、その感化が幾分基督教に反對するものとなつたのである。併し其事業は哲學の方面であつた故に、その歴史は哲學史に一任す可きである。

(ハ) 瑞典

同世紀に瑞典典のヌヰーデンボルグ(Svedenborg) (千六百八十八年—千七百七十二年) が物理學と礦物學とを詳細に研究し、以後礦山官吏となつたが、彼は五十五歳の頃より自ら默示を蒙りたりとの信仰を抱き、凡そ三十年間即ち死するまでこの道を説き、遂に新エルサレム教會の設立者となつたのである。

第七十六章 第十八世紀に於ける英國の狀態

前にいつた如く(第七十三章の(ニ)の項)、自然神教は第十七世紀に起り、第十八世紀の中頃まで大議

論となつたのだが、ハトラーの如き神學者幾人か、學識と智識とを以て自然神教論に對し答辯を試み、全力を極めて基督教に服従す可き事を説き、遂に學識的に勝利を得たのである。それで學識的運動に於て、英國教會は活潑なる事業を爲したに相違ないが、併し敬神の實行の點に於ては、第十八世紀の下半に於ける英國教會は寧ろ怠慢の譏を免れぬのである。即ち第十七世紀中の激烈なる争論と戦争とを以て、却て靜肅温和を求むるの心が社會にも教會にも又諸方面に起り、且つ宗教的熱心を嫌忌するの心も諸方に起つて、説教を爲す牧師は基督教の教理を教ゆる事をせず、たゞ倫理を説いたのみで、實にその中には神學者もあり、倫理學者もありて、所謂倫理を以て幸福を得べしといふが如き説教を爲すものが幾人もあつたのである。されば宗教的熱心なく、爲に倫理學の空なる著しき證據として、當時不品行が諸方面に現はれたのである。即ち大監督は己が官邸に於て舞踏會を開きたる爲に國王の譴責を蒙り、又一般の牧師も己が職務を怠りて娛樂に耽り、又一般の人民も上下の區別なく不潔の所行に陥つたが、其不品行の甚しきは實に言語に絶したる程で、當時の倫理學者は私生兒の輕蔑す可からざる事を教ゆるに「我等も互に私生兒なるやもはかり難し」といつたといふ事である。されば自己の母の貞節すら信用し難き程道德の腐敗を來したといふは、實に恐るべき甚しきものといふ可きである。然れども當世紀の中頃より大運動が起り、其結果として信仰復興即ち大リヴァイヴアルが全國に行はれ、又其結果として教會は振起し來り、平民に至るまで倫

理道德を實行するの心を起し、社會改良を計る事となつたのである。尤も如此の大運動はたゞ一人の働より起り來つたものでない事は勿論であるが、併しこれに大關係を有する所の大人物は、實にジョン・ウエスレーであつたのである。

(ロ) ウエスレー (Wesley) (千七百三年—千七百九十一年)

ウエスレーは村落の教會の牧師の子であつて、其母はスザナナといひ、格別敬神の念深き婦人であつたが、十九人の子供があつた爲に、其家は甚しく貧窮に陥つたに不拘、彼女は能く是等多數の小孩を教育し、且つ神の道を教へた故に、往昔のクリンストムやオーゴスチンが其母より善良なる教育を受けた如く、ウエスレーも母の教育を受けて大事業を爲す所の精神を養はれたのである。抑も彼はオックスフォード大學に於て脩學し、卒業の後は大學の教授として充分に學力を養ふたのみならず、大學にありても母の精神に摸倣して宗教を實行するの熱心を盛に起し、爲に彼の弟や又四五名の友人とともに聖書を研究し、或は教會に於ける聖晚餐や毎日の集會に列席し、或は病者や監獄の囚人の如きを往訪するを以て、人々より大なる嘲弄を招き、即ち生徒は彼等を嘲りて規則奴隸なりとなし、或は「聖クラブ」、或は「メンヂスト」の名稱を加へたが、それで後日ウエスレーの傳道によりて起つた所の信徒を矢張メンヂスト派といつたのである。斯くも教會の規則を嚴守する熱心を嘲弄する事を見ても、如何に宗教的熱心が當時なくなつてをたかか諒察するるのであ

る。

倍ウエスレーは三十三歳の時、米國の南方の殖民地に牧師として赴いたが、彼は土人に傳道する事出來ず、且つ彼が教會の規則と取締とを嚴重に守るにより、殖民人の心に逆ひ、爲に失敗して二年後本國に歸る事となり、歸國の途中船中に於てモレピアン派の信徒と交際し、如何にも彼等が安心と平和とを得てを事に感服し、顧みて自己の經驗の甚だ足らざる事を悟り、歸國後はロンドンに於てこの派の徒と愈々交際を開いたが、千七百三十八年の五月二十四日、この派の集會に出席してルーテルの加拉太書註釋の總論を聴き、始めて完全なる安心を感じたのである。尤も彼は幼年の時代より母に倣つて熱心の信者であり、又宗教を熱心に實行するものであり、而して彼は常に神の僕として神につかへ、自己の所業を以て神の賞讃を求むるの心であつたが、今回は全然信仰によりて義とせらる可しとの教を悟り、神の子供たるの安心と歡喜とを初めて味ふ事を得たのである。然れば彼は自己の經驗を以て、神に依頼するの信仰より来る所の幸福を味ひ、以後は力を極めて道を説いたのである。

(ハ)ウエスレーの事業とメソヂスト派の起原

ウエスレーは自己の經驗を以てキリストに於ける歡喜を味ひ、直にその歡喜の道を諸方に宣傳せんと考へたが、併し教會の牧師は如此熱心を好まず、爲にその教會に於てウエスレーの説教

を拒んだ故に、傳道を爲すに困難したのである。然るに其翌年ホイットフィールドが屋外に於ける平民的傳道を以て、神の恩恵により大結果を得つゝある事を聞き、自己の意思に逆ふ事とは知りながら、彼もたゞ神の道を宣傳せざるを得ずとの熱心より、不得止ホイットフィールドの例にならひ、屋外傳道に取りかかり、死に至るまで繼續して諸方を巡廻し救の道を宣傳したのである。されば多數の人々はこの傳道の結果として罪を悔改め、活ける信仰を起し、正義を實行するを以て信仰の活動を現はしたのである。抑もウエスレーの巡廻傳道は殆んど信をおさ難き程のもので、即ち當時の英國は未だ鐵道は勿論、善良なる道路の設けがなかつた故に、旅行の困難は實に甚しいものであつたが、先づウエスレーは騎馬にて不斷努力を重ね、日々幾回となく説教を試みたといふ事で、而して彼が傳道中の説教は凡そ四萬回餘で、又彼の旅行の里程は凡そ十萬里餘に達したといふ事である。それに彼はたゞ説教をなしたといふ許でなく、或は聖書を研究し、或は書籍を読み、或は多數の著述をなし、其他傳道によりて出來た所の信徒を導き、常に彼等を助けて増々道に進ましめんと力めたので、その著作の數は凡そ五十冊程で、諸方の信徒に贈つた書簡も多くあつたのである。抑もウエスレーは英國教會の牧師であつて、決して彼は英國教會を離るゝの考なく、常に「死に至るまで予は英國教會の會員なり」と斷言する程に、新宗派を起すといふが如き心はなかつたので、たゞ獨逸のスピナー(第六十九章の(ロ)の項)の如く、教會内の信仰を奨励し、且つ教を實行する事を目

的としたのであつた。然れどもその傳道によりて信仰を起したものが、相互に助け合ひつゝ、信仰を養成せんと目的で、たゞ組合を組織したので、所謂教會内の組合を以て教會員の信仰を奨励するといふは、別に教會より分離する事ではなく、寧ろ教會を裨益する方法であると思つたのである。故にこの組合に属する者が相互に助け合はんが爲に幾回となく集會を開き、又其組長の如き先輩者の導きに從ひ、或は取締の實行を擧ぐる爲に、ウエスレーは各地方の組長等によりて詳細に組合員の品行を調査し、毎年度を實行したる成績ある者には切符を賦與し、つどめて取締を嚴重にしたけれども、一體この組合は最初教會ではない故に、洗禮や聖晚餐を執行する事もなく、組合員は凡て英國教會に於て大禮典を行つたのである。然るにウエスレーの豫想外にこの組合は次第に宗派の如くなつたのである。抑もウエスレーはこの組合員中より説教に技能あるものを選抜したが、併し敢て之に按手禮を施さず、たゞ按手禮なき説教者として彼等を傳道に派遣し、而して千七百四十四年より是等の説教者を毎年ウエスレーの所に召集して年會を開き、其上英國に於て如此組合が次第に増加するに從ひ、その組合を取締る爲めウエスレーは千七百八十四年に監督の如き一種の役員を置き、彼等に按手禮を行つたのである。故にウエスレーは死に至るまで、常に英國教會に属する事を斷言したけれども、實際傳道事業の結果である其組合は、ウエスレーの死後直に洗禮と聖晚餐とを執行する事により、終に教會となり又一新宗派となつたのである。それでこの宗派は當に本國のみならず

史 會 教

す、米國に於ても又英國の殖民地に於ても、傳道を爲すの熱心を以て大事業をなしたので、世間にメソヂスト教會と稱するものは幾箇あるか解らぬが實に多數あるのである。

(二) チャールス、ウエスレー (千七百八年—千七百八十八年)

チャールス、ウエスレーはジョン、ウエスレーの弟であつて、大學に於ける組合組織は主としてこの弟の方であつたのである。彼の一生は兄と同一の信仰を以てともに働いたのであるが、彼の大事業ともいふ可きは讃美歌の作者としてあつたのである。彼は數千の讃美歌を作つてメソヂスト派信徒の信仰と熱心とを大に奨励し、又その中には一般の教會に於ても好んで使用する讃美歌もあるのである。即ち日本語の讃美歌中、三、二十九、六十、百十一、百十二、百三十一、百四十五、百四十六、百六十八、百六十九、百七十八、百八十一、二百三、二百十、二百十七、二百四十七、二百六十八、二百七十四、二百九十四は實にウエスレーのもので、是等を見ても讃美歌作者としての彼の技倆は幾分解るのである。殊に二百十七の「わがたましひをあいするエスよ」といふを以ても、この兄弟の事業の原動力とその方針との如何なるものなるかを知る事が出来る。又一般の活ける信徒の心を現すにもこれに過ぎる讃美歌は多分一もなからうと思ふのである。

(ホ) ホイツトフィールド (Whitefield) 千七百十四年—千七百七十年

ホイツトフィールドは當時傳道事業中の最も有名なる説教者であつたが、彼は旅舎の息子で、青年

史 會 教

史 會 教

の時に父に死別し、貧窮の中にウエスレーと同時に大學に入り、又メンヂェストといふ組合に屬してウエスレーの親友であつたのである。尤も彼はウエスレーの如き學力智識はなかつたが、説教を爲すの技倆を有して、實に彼の如き者は多くなかつたのである。即ち彼は屋外的平民傳道の説教を爲す時には、數千人數萬人のものが群集し來つて説教を聴き、大に感動して信仰を起したといふ事であるが、前にもいつた如くウエスレーもこの模範にならひ、屋外説教を爲す様になつたのである。それでホイットフィールドは諸方を巡廻して生涯傳道をなし、七回米國に渡り、そこにも巡廻傳道を試みたが、彼の説教を聴きて感動したものは、常に平民のみでなく、位置の高きものも、又學識あるものもあつたのである。實例を擧げれば、米國の有名なる政治家で、且つ物理學者であつた所のフランクリン(Franklin)は、一體宗教的熱心のなき人で、たゞホイットフィールドの有名なる説教を聴かんが爲に出たが、彼はホイットフィールドの事業を賛成せぬ故に、最初は寄附金を一切なさぬと決心してをつたのである。然るに彼の説教を聴きつゝある間に次第に感動して、先づ持合せの銅貨を寄附せんと考へたが、説教の進むに従ひ、増々感動して次ぎには銀貨をも寄附せんと決心し、遂に全然説教の力にうちまけ、金貨をも即ち財寶の一切を寄附するに至つたといふ事である。今からその説教を讀むならば、左程その力に感動する事はないが、併し其説教者の音聲が格別有力であり、且つ其風采と其人格とが實に人をして感動せしむるにあつた力あり、その道をして感激せし

史 會 教

史 會 教

むるに至つたのである。彼の説教には文學的學識的の力は餘り見えぬが、併しその語は實に説教者の心底より發する所のものであつて、聴衆は不識感動せざるを得なくなるのである。彼は英國の東北の某地方に於て一夜説教を爲したる後、蠟燭をとり將に寢室に赴かんとて廊下に出づるや、數人の人に出會ひたる故に、又その人々に對ひて蠟燭の燃え盡んとするまで、滾々と道を説き終りて寢室に退いたが、其夜終に永眠に就いたといふ事である。

説教の力を以て多數人を感動せしめたもの、中で、實にホイットフィールドの如きはなかつたが、彼はウエスレーとは違ひ、敢て組合を設けて之を指導するの技倆なく、又彼の事業によりて新教會の出來たといふ事はなかつたので、たゞ英國に於ける一貴婦人の助力により、六七十年の教會が出来たのみで、是等は後に組合教會に屬したのである。

ウエスレーとホイットフィールドとは傳道するの熱心に於ては別に異なる所なく、互に愛心を以て共に働いたが、不幸にも神學上に於て互の間に一の相違が起り、即ちウエスレーは人類の責任を重んずるを以て、アルミニウス派の如き神學の意見を探り、又ホイットフィールドはカルヰイ派の如き神學の意見を探つたのである。

(へ) 他の先輩者

第十八世紀の傳道事業に於ける大人物は、もとよりウエスレーとホイットフィールドであるが、同

一の熱心を以て働いたものは猶ほ他に幾人もあつて、それは曾にウエスレーと僭にマンチスト派の爲に働いた説教者許でなく、英國教會にても同一の活ける信仰を宣傳するものが幾人もあつた故に、この運動の結果は、マンチスト派の起原であつた許りでなく、英國教會の中にも多數の教會に活ける信仰を起したのである。今之に關する三四人を挙げれば。其一人はニウトン (Newton) (千七百二十五年—千八百〇七年) で、彼は青年の時代に水夫となり、一般の水夫にもまさりて不品行に陥り、悪口雑言を以て格別に悪評を蒙り、奴隷商賣に關係して殊に惡徒であつたのである。然るに彼には一人の若き戀愛せる少女があつて、これに對する愛憎の爲に、甚しき邪路に陥る事なく、遂にその惡風を悔改め、この少女を娶り、英國教會の牧師とまでなつたのである。而して彼は四十年間牧師として大事業をなし、ウエスレーと同様な道を説いたといふ許でなく、彼も讚美歌を以て大に信徒を奨励したのである。即ち日本語の讚美歌の中、十八、百三十、二百三十一、二百九十四、三百六十の如きはニウトンの作である。次ぎはトブレデー (Toplady) (千七百四十年—千七百七十八年) で、彼は肺患を病ひ、三十八歳を一期として死去したのである。彼は十六年間教會の牧師として、ウエスレーと同様な熱心を以て活ける信仰を説いたが、不幸にして神學上の議論の爲に、ウエスレーと異なる所の教理を説き、而してカルヴァン派の極端なる説を抱き、ウエスレーに激しく反對して、曾にウエスレーの神學を駁した許でなく、實にウエスレーに對して其人物をも汚した

のである。然れども彼は讚美歌二百十五「ちとせのいはよわが身をかこめ」といふを作るを以て、一般の教會を大に裨益し、又三百二十七番も彼の作である。實にチャールズ、ウエスレーの二百七十七番とトブレデーの二百五十五番とは一般の教會が共に使用するもので、之を比較すれば神に對する彼等の信仰は別に異ならぬ故に、トブレデーが烈しくウエスレーに反對したといふは、たゞ神學的爭論の災害たる著しき實例といふ可きである。不幸にしてたゞトブレデー一人のみでなく、其徒の中二三人もカルヴァン説を主張するにより、ウエスレーに反對し、又ウエスレーの徒二三人が嚴しくこれに反駁を加へた等といふは、甚だ面白からざる無益の議論といはねばならぬ。次ぎはカウパー (Cowper) (千七百三十一年—千八百〇一年) で、彼は牧師でなく、又神學者でもなく、たゞ詩人特に多分當時英國の最も有名なる詩人であつたが、彼も活ける信仰を抱き、又有名なる讚美歌を作るを以て、教會を大に益したのである。即ち日本語の讚美歌二十八や、又百八十五「みめぐみあふるイマヌエルの」、又は二百十九「神は風に乗りなみを歩む」、二百四十八「御神のひかりよやみをわけて」の如きは彼の作で、以上の三つの讚美歌よりも世に有名なる讚美歌は多くはないのである。次ぎはペロチット (Peronette) (千七百九十二年死去) で、彼は英國教會の牧師であり、且つウエスレーの親友であつて、實に同一の熱心家であつたが、チャールズ、ウエスレーが彼の注告を受け容れて、彼を評していふには、「彼はマンチスト派の大監督なり」と賞讃したのである。然るに彼の

大事業といふ可きは一の讚美歌を作つた事で、即ち日本語の九十五「あまつつかひよエスのみ名のちからをあふぎて主とあがめよ」といふのであるが、この歌以上に敬神の念を現すものは他に多分一もあるまいと思ふのである。次ぎはワッツ (Watts) (千六百七十四年—千七百四十八年) で、彼は以上の人々よりも先きに出た人で、彼はコングリゲーション派の牧師であつて、ウエスレーには關係はないが、熱心であり且つ有力なる説教家で、又讚美歌を作るを以て大事業をなしたのである。即ち日本語の讚美歌、十七、二十、三十一、四十四、四十五、四十六、四十九、五十八、七十四、七十九、八十四、百二十、百二十五、百三十一、百四十七、百五十四、二百五、二百三十四、二百七十七、三百十二、三百十四、三百四十六、三百六十四は彼の作である。特に四十四「あやにかしこしやわが神のみいつ」といふは、神を尊敬する所の心意を表現するに最も完全なるものであり、且つ八十四「さかえのさみの十字架をみれば」といふは、十字架の恩恵に感謝するの心を表現するに真に貴き歌である。次ぎはセニック (Cennick) (千七百十八年—千七百五十五年) で、彼はウエスレーとともに傳道したが、後モレビアン派に屬した人で、日本語讚美歌の二百五十九は彼の作である。猶ほ次ぎはステムテット (Stennett) (千七百二十七年—千七百九十五年) で、彼は父の後を繼いでロンドン浸禮教會の牧師となり、死するまで三十七年間その職を盡し、大に國王の信用を得たのである。彼は幾箇も讚美歌を作つたが、その中日本語の讚美歌中三百四十七の「いはか

ぎけはしきヨルダン河の」又九十六の「わがすくひぬしをあふぎみれば」といふは諸方に行はるゝものである。回顧すれば、第十八世紀以前より傳はり來つた讚美歌の中に、現今最早使用せざるものは甚だ少なからぬのである。けれども第十八世紀信仰復興の結果として出來た所の讚美歌の中、今日までも諸方に使用されるもの實に多數あるのである。

第七十七章 第十八世紀に於ける米國

第十八世紀に於ける米國は同世紀の英國と同様なる經驗を有してをり、而して組合教會は英國教會の如く腐敗する程冷淡とはならなかつたが、併し彼等も第十八世紀の中頃までは不振の狀態に陥つたので、それでウエスレーが傳道事業にかゝつたと大抵同時に、米國にても大リヴァイアルが起つたのである。然るに英國とは違ひ、米國に於て新宗教のこのリヴァイアル運動によりて起つたといふ事はないが、このリヴァイアルに關係する大人物はデヨナサン、エドワーズであつたのである。

(イ) エドワーズ (Edwards) (千七百三年—千七百五十八年)

エドワーズはウエスレーと同年に生れ、而して彼は智力に於てはウエスレーに優れ、活ける信仰と靈的能力を以ては敢てウエスレーに劣る事はなかつたが、その經驗はウエスレーとは相違してをり

たのである。彼はコンチネンツ州に生れ、而して牧師の子であつて、少年の頃より特別の智力を現はし、即ち十七歳の時エール大學を卒業し、それに十二、三、四歳の頃に最早物理や動物や其他哲學をも研究し、その奥義を窮め、大學卒業後は直に教授となり、二十四歳の時ノルサムプトン(Norhampton)の教會の牧師となり、二十三年間その牧職を務めたのである。ノルサムプトンは尤も田舎の一村落に過ぎぬが、併しこの地方は凡て豊饒の地であつて、特に盛大なる村落で、この教會はこの地方の重なる教會であつたのである。エドワーズは智力を以て神學の奥義を論ずるの技倆が格別あつた許でなく、青年の時代より神を敬愛するの熱心があり、且つ親しく神と交通するの経験が幾回となくあつたので、己が實驗した所の道を説くに靈的能力學識的能力との双方を使用した故に、彼の説教は著しく有力であり、爲に聴衆は大に感動したのである。彼の妻はニツ、ヘツンの教會の牧師の女で、彼女も格別靈的能力を有するものであつた故に、兩人互に助け合ふ事により、大に牧職を盡す事を得たのである。其上、左の(ロ)の項に於て掲載するが如く、彼の誘導によりて大リヴァイヴアルが興り、而して其結果新英國の教會は信仰を復興したのである。然るにエドワーズの説教に感動し、之を以て大リヴァイヴアルの興つたに不拘、不幸にしてノルサムプトンの教會は次第に牧師に對し怨恨の念を抱く事となり、終にエドワーズの牧職を謝絶するに至つたのである。その故は何かといへば、抑も小兒洗禮を受けた者が教會の取締の下にあらん事を願ひ

史 會 教

史 會 教

出る時に、未だ新に生れたといふ經驗がなくとも正會員となし、或は聖晚餐にも列席せしめ、かくして彼等は次第に恩恵を蒙るに至る可しとの説は、この教會を五十六年間も牧した前の老牧師の意見で、今日迄行ひ來つた所の慣例であつたのである。然るにエドワーズはこの説に反對して、新に生れ己が身を全然神に獻ぐるの決心なき者は、決して教會の正會員として聖晚餐に列席す可からずと説き、且つ教會の取締をも嚴重にすべき事を教へた事に起因するので、實に之れが爲め教會は無禮を以てエドワーズを教會より免職したのである。一體當時の風習によれば、牧師たるものは一教會に一生涯働く筈であつたが、然るに教會がエドワーズの未だ四十七歳の時彼の牧職を免じたといふは、實に牧師に對する恩を知らざるの所業で、不人情といふ可きであつたのである。夫より彼はその州の西方、即ち未開の地方に移り、土人の爲に宣教師としてその職を凡そ六年間盡してをる間に、有名なる神學上の著述をなし、又其後終に大學の校長となつたが、不幸にして彼がその職に就くや直に痲瘡を患ひ死去したのである。然るに不思議にも其同年に彼の父も又彼の妻も死去したといふ事である。今日まで米國に於て哲學的又靈的能力を以てはエドワーズに優るものは起らず、其後彼は智力と靈的能力とを兼用する事に於ては、古代のオーガスチンにも劣る事なく、當時如此有力者は甚だ少數であつたのである。彼の最も有名な著述は『意思の自由』を論じたもので、其目的を一言にていへば、人類たる者は束縛の下にあらず、自由に運動し得るものなりと雖も、必然の下にあ

りて、神の預定に逆ふ事は出来ぬものであるから、神の政治は實に完全なるものであるといふ事を説いたので、即ち神の預定の全權を鞏固に表現するを以て、カルズイン派の説を強く唱へ、且つ神の惡人に對し給ふ憤怒を甚しく示し、キリスト信徒たる者の責任の重大なる事を説きて、貴重なる神學を教へたのである。それで彼の神學を非難し、或は彼は多分神の慈愛よりも神の憤怒の方面を教へたのであると攻撃するものもあつたが、神を敬愛するの熱心を以てこの説を受け容れ、之を實行する所の者は、實に高尚なる宗教的精神を有してをたつたのである。それでエドワーズは神の政治を極端に説いたけれども、又人類の責任をも強く教へたのである。

(ロ) 信仰の復興 (千七百三十四年—千七百四十四年)

この信仰復興は米國に於ける最初のリヴァイツアルといふ可きでなく、エドワーズの祖父がノルサンプトンの教會の牧師であつた時にも、信仰の復興が四五回もあつたといふ事であるが、今回のリヴァイツアルは諸方に行はれたもので、而してこれは千七百三十四年の十二月ノルサムプトンに於てエドワーズの説教の結果として興つたもので、數ヶ月間村中に行はれ、凡そ三百人の人々が新生れかはつたのである。エドワーズの説教の主意はウエズレーと同じく、信仰によりて義とせらるゝ事と、其上新に生れざる者、即ち己が身を全然神に獻げざる者は、如何に世の中で義人であると思はれても、神前に於ては普通の罪人であつて、決して救はるゝの望なき事を教へ、且つ直ちに各自

神に歸る可き事を説いたのである。さればこのリヴァイツアルは、たゞ一ヶ所の村落のみならず、諸方に行はれて、終にコンチクコット州全般に及ぼしたのである。それでエドワーズは彼の經驗したる事を『神の奇しき聖書』と題して出版したが、ウエズレーは彼の傳道事業にかゝらんとする場合、この書を讀みて大に感動を起したといふ事である。夫より二三年の後、米國中央の長老教會の中にも、同様なリヴァイツアルが起り、又千七百四十年にホイットフィールドが米國に渡來して、巡廻傳道を爲す事により、諸方に非常なる熱心を興したのである。その後猶ほ同様なる熱心を以て巡廻する所の傳道者も幾人かあつて、實に大リヴァイツアルとなつたのである。

數萬の人々が宗教的熱心を起し、己が身を神に獻げたといふ事は、實に喜ぶ可き事であるが、併し是等の運動に就いて種々なる弊害もともなつたのである。即ちホイットフィールドの如きですらも、幾分普通の牧師を以て新に生れざるものとして非難を加ふるの惡風を起し、その後引續いて巡廻する者の中にも、一般の牧師を甚しく非難攻撃するものもあり、又如此傳道に感動したる者の中に種々なる乱行を爲すものもあつた爲に、多數の牧師は如此非難や、如此乱行に對し、大に反對するの心を抱いたので、随分烈しき議論が起り、遂に舊新の如き區別となり、終にコンチクコット州の東方には普通の教會の不振を稱へ、又普通の牧師の冷淡を嘲り、教會より分離し新教會を設立するものも所々にあつたのである (其一ヶ所は著者の郷里であつた)。然るにたゞ教會の牧師のみで

なく、コネチクチコット州の議會も如此分離した所の新教會を以て、規律に服従せざるものとして迫害を加へたが、今一例を挙げれば、著者の郷里に二人の青年があつて、彼等はエール大學の學生で、休暇の爲郷里に歸つてをる時、両親とともにその新教會に出席したといふの理由を以て、學校より退學を命せられた事がある。斯くして此の新教會は次第に撲滅され、遂に浸禮教會に属したのである。

(ハ) 新英國の神學

エドワーズの時代から第十九世紀の初め頃まで、凡そ六十年の間、新英國に有名なる神學者は續々起り、彼等の運動によりて、次第に新英國の神學なる者が起つたのである。彼等は、大抵コネチクチコット州のもので、又エール大學の卒業生で、その先輩者といふ可きは勿論エドワーズで、又第十八世紀の末頃のエール大學の校長ドワイト (Dwight) といふ人は、エドワーズの孫であつたのである。是等の神學者の事を精細に調査するならば、勿論相互に多少異説を有してをたが、併し皆教會の牧師であり、又同様の宗教的熱心を有するもので、エドワーズの如く神の全權を説くといつても、又説教者として人の責任をも強く教へたので、彼等の運動により次第に新英國の神學が起り、而してコネチクチコット州を始め、第十九世紀中には米國全體の組合教會中に行はるゝに至つたのみならず、長老教會の中にも随分行はれたのである。是等の神學者は決してカルヴァイン神學と

排斥するの心があるのではなく、所謂アルミアス神學に反對するもので、實に神の全權を教へ、又その上に人の責任を説き、而して神の恩恵の洪大なる事をのべたので、實に其教はウエスレーの如きアルミアン派の神學者と左程違ふ事はなかつたのである。又キリストの贖罪を説明するには第十七世紀の和蘭のグロシウス(第十七章の(ハ)の項)と同様なる説を採つたので、即ち贖罪の大目的は神が罪人を赦し給ふと雖も罪惡を嫌忌し、正義を重んじ給ふ所の神の聖意を現はすにあるといふのである。

一般の教會は舊カルヴァイン神學を保持し、又コネチクチコット州に於けるエドワードの徒は新カルヴァイン神學を次第に論じたと同時に、ボストンの地方にては所謂アルミアス神學を主張する教師が幾人もあつて、如此教師がリヴァイヴァルに關する混亂等を憂ひ、如此運動は多分教會の益とならざるものと思ひ、その傳道者の事業に反對するを以て、次第にエドワードの徒と異なる方針を抱き、第十八世紀には未だ分裂を見なかつたが、第十九世紀の初期頃の分裂の起因となつたのである。

第七十八章 外國傳道

(イ) 第十六世紀末までの外國傳道

「獨く世界をめぐりて凡の人に福音を宣傳へよ」との語に従ひ、弟子等は最初より獨く福音を宣傳したので、それで基督教は廣く傳道する所の宗教であつたのである。されば第一、二、三世紀に於て羅馬帝國內に行はれ、其後歐羅巴の野蠻人の間にも行はれたが、不幸にして東方教會の分裂を來し、或は回々教の起つた事により、亞細亞、亞非利加に於て行はるゝ事に制限が出来たが、併し凡そ紀元後一千年までに歐羅巴の諸國は基督教を容れるに至つたのである。その頃は大西洋を航海するの道が開けなかつた爲に、西方に向ふ事が出来ず、數百年間は外國傳道を爲すの機會なく、殆んど基督教は歐羅巴の宗教たるの觀があつたが、實際はさにあらずして世界的宗教であつた故に、第十五世紀の末頃亞米利加を發見し、夫より喜望峯を迂回して印度に航海するの途が開けるとともに、傳道心をも起したといふは當然なる事である。それで耶穌會社のザビエーの如き者（第六十七章の（ロ）の項）が實に傳道の熱心を非常に起し、日本に至るまで傳道をなしたのである。新教徒は第十六世紀中は未だ傳道事業にかゝらなかつたが、その確たる理由は解らぬ。兎に角ルーテルの如きは世の末とキリストの再臨近きにありとの思想を抱き、最早外國傳道を爲すの時機にあらずとの考があつた爲であらうと思ふ。

(ロ) 第十七世紀の外國傳道

第十七世紀の傳道事業は甚だ僅少であつたが、尤も和蘭人の傳道もあり、又米國に於ける傳道もあ

つたのである。抑も和蘭人は大患難を経過して後獨立を得、又同時に海外貿易を爲すを以て富を加へ、而して東印度諸島の中セイロン島とデアヅア島とを占領したのである（千五百九十五年—千六百九年）一體和蘭人は宗教的熱心を有する人種であつた故に、海外貿易を爲すの機會を以て、他國人に向ひ基督教を宣傳する事をつとめ、早くより傳道事業にかゝり、セイロン島にも、又デアヅア島にも數千人パンプスマを受け、又臺灣にまで傳道を開きて、こゝにても數千人の信徒が出来たといふ事である。併し和蘭人の傳道法には最初より缺點があつた故に、如何に熱心に働く所の幾人かの宣教師があり、或は洗禮を受くる者が多數あつたとしても、真正の成功を見る事は出来なかつたのである。その理由は傳道に出づる宣教師が、たゞ五年働きて後本國に歸るといふの考であつたから、従つて外國語を學ぶ事も出来ず、爲に口を以て道を充分に傳ふる力なく、其上に洗禮を受けんと志のある者さへあらば、無暗に洗禮を施す風であつたからである。尤も殖民地の支配人は洗禮を受けた者にのみ民権を與へたので、随つて多數の土人は真正の信仰なくして、たゞ民権を得んと心より洗禮を受け、所謂米信者となつたのである。

第十七世紀の中頃のクロムエル（第七十一章の（ハ）の項）は熱心なる信徒であつて、外國傳道を獎勵するの希望を抱いてをつたが、その事を成就する事が出来なかつたのである。然るに米國へ移住し

た人民の中に米國の土人に對し傳道するの志を起したるものもあつたが、併し傳道するに種々なる困難があり、爲に其希望を達する事は出来なかつたけれども、大なる働きをなしたるものもあつたのである。その中で最も有名なる者はエリオット (Elliott) (千六百四年—千六百九十年) で、彼は英國にて生れ、大學を卒業したが、一體彼はピューリタン派の熱心なる信者であつて、其後米國に移り、五十八年間ポストン地方の教會の牧師をつとめたが、彼はその近傍の土人の語を學び、聖書をその語に翻譯し、而して土人に道を傳ふるを以て、凡そ一千人餘も基督教に加つたのである。聖書を米國にて印刷したのは之が最初であつたのである。勿論今その聖書を読み得る者は一人も多分あるまいと思ふが、第十七世紀には之を以てキリストの道を學ぶ土人が多數あつたのである。次ぎに猶ほ一人の者を挙げれば、メーユー (Mayhew) といふ人で、彼の一家は五代までも引續き、凡そ百六十年間島々の土人に道を教へ大事業をなしたのである。

(ハ) 第十七世紀の外國傳道

丁抹は微々なる一小國で、この國も第十七世紀に海外貿易を開き、印度の南方に領地を得た故に、國王は自己の熱心なる牧師の勸告に従ひ、其領地に於て傳道をなさんとの考を起し、當時未だ本國の中に外國傳道に従事する志ある者がなかつた故に、獨逸のハリより傳道者を募集して派遣したのである。さればその領地に於ける傳道は丁抹の支配を受くるといつても、傳道者は獨逸人であつて、

彼等は多數フランケの門人であつたのである (第六十九章の(ロ)の項)。その中最初の傳道者はジイゲンバルツ (Ziegenbalg) で、彼は千七百五年に印度に赴き、千七百十九年まで働いたが、又最も有名なる者はシュワルツ (Schwarz) といふ人で、彼は千七百五十年より千七百九十八年まで働きて多數の人をキリストに導き、不信徒の信用をも非常に博したのである。然るに丁抹に屬する領地は極めて微々たるもので、印度全體と比較するならば、實に數ふるに足らぬものである。

前にもいつた如く (第七十五章の(二)の項)、同世紀に於てモレビアン派の教會は非常に傳道するの熱心があり、千七百三十二年より二人の宣教師を西印度のコロンボ人に派遣し、猶ほ繼續して多數の宣教師を送り、極寒の地にも、極暑の處にも、未開の土人に對して熱心に働いたので、これが爲に本部の教會員よりも多數の信徒が出来たのである。

(三) 英國に於ける外國傳道會社の起原

第十八世紀の英國に於ける信仰復興の結果は種々あつたが、其一は外國傳道に従事する事の熱心を惹起した事である。ウエスレーが「我が傳道地は全世界なり」といつた如く、メソヂスト派の徒は早くより外國傳道に従事し、凡ての困難に忍耐して未開の地に傳道するの熱心を非常に現はしたが、外國傳道會社の起原は直接ケリー (Carey) の働きの結果であつたのである。彼は最初貧困なる靴工であつて、熱心學識を求むるの志があり、貧困の中より靴職を営みながら、羅典、希臘、希伯

來の國語を學び、遂に浸禮教會の牧師となり、當に教會の牧師たる普通職をとるを以て満足せず、世界の端までキリストの道を宣傳せんとの考を起し、千七百九十二年の五月三十日に、表五十四ノ二の「なんぢが幕屋のうちをばりひろげてなんぢの綱をながくせよ」といふを題として、傳道の必要を説き、「神の爲に大なる事をなせ」、又「神の大なるものを求めよ」といふ二個の主意を教へた故に、浸禮教會は同年の十月二日に之に應じて傳道會社を設立し、翌年ケリー自ら最初の宣教師として印度に赴いたのである。併し當時印度の大部分を支配する東印度貿易會社が、その領地に於て傳道事業をなす事を堅く禁じた故に、不得已に丁抹に屬する微々たる殖民地を立脚地として働いたのである。ケリーは非常に語學の才能があつて、彼は梵語の教師として己が生活の道を立て、而して聖書を二十四種の語に翻譯したのみならず、文典や字典をも幾種となく作つたのである。猶ほその他彼の娛樂として印度の植物學を研究し、印度に於ける農業をも随分獎勵したのである。夫より凡そ三年後（千七百九十五年）に、同一の信仰復興の結果として、ロンドン傳道會社が設立されたが、之は一宗派の附屬でなくして、一般の信徒がともに働くの考で出来たのである。然るにこれは次第に獨立派（組合教會）の事業となつたのである。その最初の傳道地は太平洋の南方の諸島であつて、又その最初の宣教師はウィリアムス（Williams）で、彼は千七百九十六年に出發して野蠻人の爲に殺さるゝまで（四十三年間）、その諸島に於て働き大事業をなしたのである。偕との傳道會

社は其後アフリカ、印度、支那に於て今日までも猶ほその事業を繼續してをるのである。夫より四年後（千七百九十九年）に英國教會に屬する教會傳道會社が設立され、而して凡そ三三十年間は外國に出づる所の志ある英國人は甚だ不足であつた故に、この會社より派遣した所の宣教師の半分は獨逸人であつたが、次第に英國にても傳道心が盛になつたので、この會社は今日までアフリカ、印度、支那、日本にも廣く事業をなしてをるのである。同時頃（千七百九十六年）蘇國にも地方的傳道會社が二個も設立され、千八百二十四年に蘇國教會は教會として初めて外國傳道に従事したのである。尤もこの會社は有志の者が隨意に起したものであつて、今回初めて教會が教會として外國傳道會社を新に設立したのである。最初の宣教師はダツグ（Duff）で、彼は千八百二十九年に二十三歳にして宣教師となり、印度に赴き、而して殊に基督教的教育を以て三十五年間働いたのである。又其教會は番に印度許でなく、アフリカにまで大事業をなしたのである。

(ホ) 米國の傳道會社
米國の傳道會社の起原は直接ミルズ（Mills）の働きで、彼はコンチネンタル州の山地の某村落の牧師の子で、父は六十四年間一の教會の牧師として、殊に有力なる説教家で、又熱心家であり、又母も熱心なる信者で、子供が出来るとこれを傳道者として神に獻ずるの決心をなしたのである。され

ばミルスマも兩親に倣つて宗教的熱心があり、且つ大學に於ても友人を導く所の技倆があり、千八百六年の八月四人の友人とともに屋外祈禱會を開いたが、其時外國傳道をなさんどの熱心を起し、如何に困難があるとも決心さへあるならば、決して不可能の事なしと確信し、五人ともに熱心にこの事に就いて祈つたのである（明治三十九年にこの祈禱會の百年の紀念會を開いたのである）。而して彼はこの熱心の冷却せざるが爲に『兄弟』といふ名稱を以て、外國傳道の志ある五人が組合を組織したのである。彼等は其後大學より神學校に轉學してよりも、猶ほ同一の組合を繼續して數十年に及んだが、多分最後にこの組合に入つたものは新島襄氏であつたのである。彼等は神學校を卒業せんとするに當り、果してその目的とする所を成就し得るや否やを考へ、或は學校の教授や、或は地方の牧師に相談をなしたる結果、愈々千八百十年六月にアメリカン、ポールドといへる傳道會社を設立し、二年の後に最初の宣教師として四人の者を印度に派遣したのである。然れどもミルス自らは本國にありて諸教會に對ひ、傳道心を惹起せしむるに盡力す可しとの説に従ひ、彼は本意ながらも、印度に赴かずして、たい内地に於て諸方の巡迴傳道に従事したが、彼は其後阿弗利加に渡り、そこより歸國の途中船中にて死去したのである。抑もアメリカン、ポールドは最初一宗派の機關でなく、一般の人々とともに働く所の考であつたが、最初の宣教師の一人印度に赴く途中、船中にて浸禮教會に轉會するの考を起した爲に、浸禮教會は別に一個の傳道會社を設立する事と

なり、又其後次第に他の宗派も別個に自己の傳道會社を設立するに至つたので、終にアメリカン、ポールドは組合教會の機關となつたのである。

(一) 各國の傳道

各國に於ける外國傳道の歴史をこゝに詳細掲ぐる事は出来ぬが、其起原と其大體と又先達者の事を極めて簡單にのぶる考である。

第一、支那

支那の人口は四億萬であつて、國民は保守主義を採る所の人種である故に、基督教をこの國民に宣傳するといふ事は實に大難事であり、それに第十九世紀までは傳道を爲すの自由がなかつたのである。第七世紀にキリストリアン派の傳道者（第三十七章の(二)の項）が、西亞細亞より支那の西部まで傳道を爲す事により、何程の信徒が出来たか解らぬが、兎に角暫時皇帝の允許を経て傳道したといふ事は確實なる事で、尤もその歴史は今解らぬのである。然るに其後皇帝の束縛の爲に事業は消滅し、たいその紀念として殘存してをるものは一箇の石碑あるのみである。それで近世の傳道を開いた先達者はモリソン (Morrison) (千七百八十二年—千八百三十四年) で、彼はロンドン傳道會社の宣教師として千八百七年に支那の廣東に赴き、事業にかゝりてより死するまで凡そ二十七年間働いたが、當時は未だ市中に入りて傳道するの自由なく、彼は先づ聖書を支那語に翻譯し、又は英清語學校の如

きを設立して教育を以て力を盡したが、直接傳道を爲す事が出来なかつたので、彼の死する時には宣教師が二人と支那人の傳道者が四人あつたといふ事である。然るに千八百四十二年の戦争の結果として、支那政府は五箇所の港を開いたので、宣教師はそこに傳道を爲すの自由を得、又千八百五十八年に九箇所の港を開き、その後内地にも自由に傳道する事が出来るに至つた故に、千八百六十年には信徒が千二百許も出来たが、其後第十九世紀末に至りて、十萬人まで増加したのである。それで不幸にも政府が開港したのはたゞ戦争即ち阿片賣買に關する戦争の結果であつた故に、支那人は基督教の傳播を以て、之は他國を壓制束縛する方法であると思つたのは無理ならぬ事である。又第十九世紀末の事件は所謂暴動であつて、爲に宣教師百三十四人と信徒幾萬人かは虐殺されたので、實に大災害であつたのである。されば支那傳道なるものは先づ第二十二世紀に於ける將來をまつ可きであると思ふのである。

第二、朝鮮

朝鮮に於ける傳道上の先輩者はアルレン (Allen) で、彼は米國長老教會の醫者たる宣教師である。千八百八十二年より第十九世紀末までに、信徒は一萬人も出来たといふ事である。

第二、印度

印度の人口は二億八千萬人であつて、日本や支那と違ひ、一國の體裁をなさず、又幾人種にも分れ、

且つ國語も多數あつたが、第十八世紀に東印度貿易會社の運動により、殊に千七百五十七年の戦争を以て英國の屬國となり、初めて一國の如き體裁をつくつたのである。それで又宗教の如きも一定する所なく、その大多數はブラマ教徒であつて、回々教徒が六千萬人餘もあり、又其他の宗教も幾つもあつたので、基督教の如き新宗教を宣傳するといふは甚だ大難事であつたのである。それに社會の階級幾つにも分れ、その階級互に交際をなさず、殊に規則を以て飲食を共になす事を嚴禁した故に、「人類は獨一の神の子にして皆兄弟なり」等といふが如き教は、この國の風習に不相當であつたのである。されば若し基督教に加入するものがあるならば、直にその者を自己の階級より放逐し、社會より棄てるので、實に基督教を信するといふは甚だ大困難であつたのである。楮右の(一)の項に於てのべた如く、第十八世紀に丁抹國王に派遣され、印度の極南に於ける微々たる地方に働いた獨逸人は、傳道の大事業をなしたけれ共、不幸にして第十八世紀末に至り衰微に歸したのである。然るに第十九世紀に於ける傳道の先輩者は勿論右のべたケリーであつて、彼は千七百九十三年に印度に渡り、死に至るまで四十一年間、殊に聖書の翻譯をなすを以て大事業をなしたのである。前述した如く當時の東印度貿易會社は、一體基督教の傳道を以て、自己の政權を妨害するものと思ひ、己が領地に於ては一切傳道を爲す事を拒絶したが、千八百十三年に至りウイールバークス(第八十四章の(ロ)の項)なる有名の人者の勸告により、英國議會は傳道事業を妨害する事を禁じたので、宣教師は初

めて自由に傳道する事を得たのである。

抑もこの東印度貿易會社は、傳道事業を以て一の妨害物と視做したけれども、併し印度に住する英國人の爲には牧師を派遣したので、その中の二人は一般の傳道をも大に獎勵するものであつたのである。即ち一人はヒーパー(Hooper) (千七百八十三年—千八百二十六年)で、彼は千八百二十三年に印度の監督(印度に住する英國人の監督)として赴任し、死するまでその職を務めながら、猶ほ出來得る限り印度人の爲にも傳道する事をつとめたのである。彼の作つた讚美歌の中に、諸方に於て使用してをるものは、日本語の三十五の「聖なるせいなるせいなるかな」、二百七十六の「あくまのくにをうちたひらぐる」、四百二十四の「かすみたなびくはるの野に」、又殊に有名なるものは百五十三の「きたのはてなるこぼりのやま」である。彼は是等を以て能く自己の傳道心を表白したのみならず、是等を以て多數の信徒の傳道心をもはげましたのである。今一人はマルチン(Martin) (千七百八十一年—千八百八十二年)で、彼は千八百五年に牧師として印度に渡り、死するまで働いたが、古代のクリソストム(第三十二章の(二)の項)の如く、疾病を患ひながら小亞細亞を旅行中苦痛になやみつゝ終に死去したのである。それで彼が印度に於て働いた時間は僅かに六年に過ぎなかつたけれども、聖書を印度語やヘルンシャ語に翻譯するを以て大に力を盡したのである。されば彼の働きには餘り直接の結果はないとしても、併し彼の傳記を讀みて大に感動を起し、傳道

心を燃したものは英米に於て多數あるのである。

千八百三十年ドップは蘇國の長老教會の最初の傳道者として印度に渡り、學校を設けて英語の教育を爲すにより、彼も又その徒も大事業をなしたが、不幸にして學生の中に基督教を信する者が左程なかつた故に、直接の結果は實に數ふるに足らぬものとしてこれを批評するものもあつた。けれども間接に基督教の道と主義とを傳ふるにより大事業を爲したのである。

其後英蘇米の諸國より、多數の宣教師を印度に派遣したので、第十九世紀末に至り、傳道事業は次第に盛大となり、信徒の數も三十萬人以上に達したのである。然れどもその中の多數は下等社會のものであり、且つ半數以上は南部のものであつて、それで北部に於ては割合に少なく、殊に上等の階級に屬する者、即ちブラマ階級には信徒となる者は極めて少數であつたのである。

第四、緬甸

緬甸の人口は一千萬人であつたが、この國に傳道したる最初の宣教師はデアッドソン(Judson) (千七百八十八年—千八百五十年)で、彼はアメリカン、ポールドの最初の宣教師中の一人で、千八百十三年に彼は緬甸に赴かんとする船中、洗禮の事に就き意見の變更を來した爲に、浸禮派に轉會したので、浸禮教會は新に傳道會社を設立し、緬甸に於て最初の傳道を初むる事となつたのである。緬甸と英國との戰爭の起つた時、勿論彼はこの戰爭に無關係であつたが、英米の區別すら辨へざる緬

甸の國王は、デアドソンを捕虜として十七ヶ月の間獄に繋いだので、非常なる苦痛を嘗めたのである。然るに彼の妻は勇氣を鼓して夫を慰め助けた爲に、彼女を以て眞正の女傑と賞讃するのである。借緬甸人は一體頑固なる佛教徒である故に、彼等の中に傳道するといふは實に大難事であるが、デアドソンは終りまで能く失望落膽する事もなく、忍耐して働いたのである。それでカルレンといへる土人の中には多數の信徒が出来、第十九世紀末の統計によれば十二萬人もあるといふ事である。

第五、土耳其

土耳其人は回教の頑固なる信徒であつて、彼等に直接基督教を傳へるといふ事は不可能といふ可きであるが、然るに土耳其に住する基督教徒もあり、又更にアルミニヤ人が數百萬人もをるのである。抑もこのアルミニヤは最初獨立國で、殊にその國民は第三、四世紀より基督教を信じ、第五世紀の中頃カルセドンの大會議の決議を承認せざるを以て（第三十七章の（一）の項）分離をなし、後土耳其人に服従して獨立を失つたのである。それで彼等は基督教を保守しながらも、猶ほ彼等の間に基督教は大に衰微し且つ腐敗したので、彼等を獎勵し彼等を立脚地として土耳其人に傳道を爲すの希望があつたのである。千八百二十三年よりアメリカン、ポールドはこの事業にかゝり、最初はアルミニヤ人の教會を獎勵するの目的であつたが、然るに次第に不得止分裂を來す様になり、從つて保守主義のアルミニヤ教會と又新教を信するアルミニヤ教會との二つとなつたのである。管に傳道を以ての

みならず、大學も又小學をも設立するにより教育を施し、間接に保守主義の教會を獎勵したのである。然るに土耳其帝國の政治は壓制を施すので、これが爲にアルミニヤ人中の傳道は妨害を受けたのである。さればこの壓制政府は改革され、又土耳其帝國内の凡ての人に眞正の改革を教ゆるの機會を得るは實に第二十世紀であるのである。

第六、亞弗利加

アフリカは未開の大陸であつて、奴隸賣買を以て非常の災害を蒙つたコロンボ人の如きは世界中最も可憫人民であつたので、それで第十九世紀中この人民を憫み彼等に傳道するの目的を以て赴任したるもの多數あつたけれども、その傳道は殊に困難であつて、それは東西の海岸は殊に氣候險惡であり、熱病甚しく流行する地であつた爲に、歐洲人の働く事は實に大困難であつたのである。それに内地に入るにも餘程困難であつたが、第十九世紀下半の地理學の進歩は、主としてアフリカの内地、殊にコンゴ河及びナイル河の上流を發見した事である。これによりて次第に内地に入るの道を開かれ、即ち西海岸からコンゴ河によりて内地に入る事は、千八百七十六、七年スタンレーの勢力を以て發見されたので、一體この河は大河であるが、併し下流に幾つかの瀑布がある爲に、海より直ちに船を上す事出来ず、鐵道を架設して瀑布の上に至るの途を開き、又汽船を以て上流に進む事の出来る様になり、又東海岸よりナイル河の上流にある大湖まで鐵道を架設するを以て、

その廣大なる土地に入る事が出来る様になり、其上南方よりは長距離の鐵道を以て内地に入る事が出来る事となつたのである。従つて阿弗利加傳道に従事するものも多數起り、且つこれが爲に生命をも棄るものが多數あつたのである。たゞ一人の先輩者として擧げる事は出来ぬが、最も有名なるものはリビンググストン (Livingston) (千八百十三年—千八百七十三年) で、彼は蘇國人であつて、ロンドン傳道會社の宣教師となり、千八百四十一年に阿弗利加に赴き、その南部に於て數年間傳道に従事したが、内地に傳道するの道を開かんものと思ひ、大困難を冒して次第に内地に入り込み、直接傳道を廢して地理學的研究の爲め凡そ二十年間を費し、終に疾病にかゝつたので、彼は馳騁つゝ、祈禱の中に永眠に ついたのである。それで彼を敬愛する忠僕等は、大困難を経て彼の屍を海岸まで護送し、而してロンドンのウエストミンスターに於て之を鄭重に葬つたのである。彼が阿弗利加土人を愛する所の熱心に感動して、阿弗利加傳道をなさんと志を起したのも多數あり、間接に非常に阿弗利加傳道を勵ますに至つたので、阿弗利加の信徒は第十九世紀末には八十八萬人もあつたのである。

倍阿弗利加の東方にマダガスカー (Madagascar) 島と云ふ大きな島があるが、その人口は三百五十萬人もあつて、それで千八百十八年にロンドン傳道會社はこの島に傳道を開始し、凡そ二十年の間盛大に行はれたが、その後基督教に反抗する女王が位に登り、爲に宣教師は島外に放逐され、又二十一年の間信徒は甚しき迫害に遭遇し、或は死刑に處せられたものも多數あつたのである。然るに不思議にも信徒はこの迫害に屈する事なかつた爲に、この女王の死去後再び傳道は盛大に赴き、信徒も随分増加するに至つたのである。然れども千八百九十五年に佛國がこの島の獨立を奪つたので、爲に傳道も大に妨害を受けたが、併し佛國の新教の教會もこの事業に従事するにより次第に盛大に赴くであらうと思ふのである。それで第十九世紀の末に於ては信徒の總數は二十八萬人であつたのである。

第七、太平洋諸島

太平洋の北方にハワイ島があつて、其島の水夫なる一人の青年が米國のニウヘヴンに赴き、エール大學を觀て自己の無學なる事を甚しく愛ひたので、幾名かの學生が彼れを助けたといふ事であるが、即ち右の(ホ)の項にあるミルスが彼に接し、その事狀をアメリカン、ポールドに報告したので、直に米國に於て如此青年の爲に學校を開始するに至り、又暫時の後(千八百二十年)その島にも宣教師を派遣したのである。然るに不思議にもその船中にて、ハワイの土人が自己の宗教の束縛を憂ひ、且つ偶像を棄て、宣教師を歓迎したといふ事である。それで尤も同島の傳道に就ては種々な困難もあつたが、併し次第に盛大に赴き、凡そ五十年間の働きを以て島民は悉く基督教を信する事となつたのである。然れども夫より後の經驗を以て見れば、島民は悉く基督教を信したるも

の、未だ獨立して基督教を實行するの力なく、それに不幸にして泰西の風習を直に受け容れた爲に、人口は次第に減少し行きて、今は僅かに三萬人に過ぎないので、たゞその代りとして日本人支那人の多數が移住した故に、新に傳道を爲すの必要が起つてをるのである。

太平洋の南方には多數の島があるが、この諸島に傳道した先遣者はロンドン傳道會社より派遣されたウイリヤムス(即ち千八百十六年より彼が殺されるまで)で、彼は凡そ二十三年間に大事業をなしたのである。其他傳道上の豪傑といふ可きは幾人もあり、又殉教者といふ可きものもあつて、其事の物語は非常に興味ある者であり、又その事業の結果は大なる者であつたが、併し今こゝに詳細を掲ぐる事は出来ぬ。それで猶ほ一言を以ていへば、基督教を信奉し、又その活ける信仰を表現するものも出來て、第十九世紀末の該島土人の信徒は凡そ三十萬人弱であつたのである。

第七十九章 第十九世紀に於ける羅馬教會

(イ) マリアの無罪出生

往昔よりマリアを尊敬するの心が教會内に次第に行はれ來り、從つてマリアは出生の當時より最早無罪のものなりとの説が次第に流布し、其上中世に於てマリアは一人獨立のもので、アダムの原罪にも無關係であるとの説が起つたので、中世のベルナルドの如き熱心家(第四十七章の(ハ)の項)は、これに不賛成を唱へ、眞理に不適當なる説なりと駁論したのみならず、有名なる神學者トマス、アクイナスの如き(第五十章の(ニ)の項)も、反對説をのべ、それにドミニック派の神學者も同じく不承知であつたのである。然れども第十三世紀のドンス、スコトス(第五十章の(ニ)の項)は、之に賛成を表して教へた故に、この徒即ちフランス派の神學者はこの説を大に主張し、其上耶穌會社の者も強固に唱へたので、益々教會内に行はるゝに至つたが、勿論この説は一種の信仰箇條といふ可き程のものでないけれども、第十九世紀の中頃まではたゞ多數の人々が眞正と認め

たのである。然るに千八百五十四年の十二月、羅馬法王ピウス第九世が、之を一つの信仰箇條として發表したのである。それで第一、羅馬教會がマリアを過度に尊敬した事に注意を拂ふべきで、即ち法王の語に「神は満足れる恩恵を與ふるの恩寵をマリアにさづけ給ふた故に、我等は聖マリアに依頼し、マリアに托りて救はるゝ幸福を受く可き望なり」といひ、又「このマリアを天地の女王と定め、凡の天使に超りて貴き位にあげ、主キリストの右に座せしめ、而してマリアは諸教會を保護する者なるが故に、我等は何ものをも懼る可き事あらず」といつたのである。第二、この法令を發表した事は、たゞ法王一人の權を以て、教會の信仰すべき箇條を制定した所のこれが最初である事に注意すべきである。抑もマリアの無罪出生が、聖書に記載されてないといふ事は勿論である故に、之を教ゆる所の方法はたゞ天の默示を蒙りて教ゆるといふ事にあつたので、所謂如此法令を發表

するといふは、たゞ一人天の默示を蒙り、而して神の代理として道を教ゆるの全權ある事を斷言するものと同一である。

借別問題ではあるが、羅馬教徒がマリアに對する迷信の實例をいへば、佛國の西南に於て千八百五十八年に聖マリアが十四歳の少女に現はれたといふ事で、今日までも多數の人々が其處に參詣し、而して病氣を痊されるといふ話があるのである。

(ロ) 法王無謬説

前にもいつた如く、羅馬法王は最初羅馬教會の監督だけであつたが、第四、五世紀から次第に西方の諸教會をも支配する權力が出来て、遂に法王となつたのであるが、羅馬教徒は皆法王を以てヘテロの後繼者となし、且つ教會の首として尊敬するのである。然れどもその權力に就ては二説あるので、即ち一説によれば、法王は立憲君主で、彼は如何に教會の取締をもちかゝる者であつても、大會議の決議を経て後、初めて信仰箇條を制定するの權があるといふので、第十五世紀の會議(第五十三章)の如きは如此説を實行して惡法王の位をも奪ふた程に、大會議が法王にまさりて權威のある事を現はしたのであり、又第十七世紀の佛國の有名なる神學者(第六十九章の(乙)の項)は、矢張同一の意見を以て、法王を全教會の首として尊敬するけれども、各國の教會には幾分獨立の所があるといふのである。然るに他の説に據れば法王は獨裁君主で、彼は一人にて諸國の教會を全

然支配するの權ある事と、又一人にて信仰箇條を制定するの權ある事を説いたので、耶蘇會社の如きはこの説を主張して、法王の全權を強固に教へたのである。それで千八百六十九年の十二月、法王の召集に應じ、大會議をローマに開き、この點に就て論議したのである。即ちこの會議は法王の宮殿ヴァチカン(Vatican)に於て開いた故に、世に之をヴァチカン會議といふので、その職員は七百六十人であつて、其中の大多數は或は法王を尊敬するものであり、或は法王の勢力に服して法王の全權を承認するものであつたが、これに不同意の者は凡そ二百人程もあつたのである。然れども終結の場合に至り、不賛成の者はたゞ二人を除く外退場したので、所謂五百三十三人の者は七月十八日に於て直ちに法王無謬説を決議したのである。即ち羅馬法王は法王として信仰上の事、或は倫理上の事に關して教ゆる事は、天の祐助を受け無謬に教ゆるものである故に、其教は直ちに受く可きであるといふのである(この大會議の處置は無要であつたのである)。それでこの教に對し、不賛成を唱ふる所の有名なる者は幾人もあつたが、羅馬教會一般の信徒は羅馬法王を教會の首として尊敬する者である故に、この決議を直ちに受け容るゝに困難なく、又先きに不賛成を唱へたものも多數數ヶ月の後遂に服従したのである。

(ハ) 羅馬法王の政權の終局

千八百七十年七月十八日のヴァチカンの大會議を以て、羅馬法王は初めて完全に教會内の全權を掌握

したのであるが、然るにその翌日起つた獨佛戰爭の間接の結果として法王は政權を失つたのである。即ち最初ローマの監督は勿論政權の如きは毫もなく、第四世紀にコンスタンチン帝がローマの政府をローマの監督に一任したといふ話は全然虚偽であつて、羅馬帝國が滅亡してから、法王には靈的權力があり、それに大財産を有してをたつたから、次第に政權をも握る様になつたので、一體法王は長歲月の間、皇帝政治の下にあつたのであるが、漸くにしてローマ地方の政治を全然受取つたのである。然るにイタリアは分裂後、他國の壓制の下にあり、眞實困難に遭遇した爲に、次第に一致結合し、獨立を保たんとする希望を起し、千八百五十九年よりローマ地方を除く外、凡て一致結合して獨立國となつたのである。されば羅馬を以てイタリアの都府と爲さんとの希望であつたが、何にせよ佛國の軍隊が羅馬法王を保護してをたつた故に、イタリア人は到底羅馬を奪取する事が出来なかつたのである。然るに恰も獨佛の戰爭が起り、佛國政府は不得已羅馬からその軍隊を呼びかへすに至つたので、イタリア人は漸く千八百七十年九月に、羅馬を奪取し、法王の政權をも剝奪したのである。それで羅馬法王は「政權なくば到底靈的職權を自由に實行する能はず」と聲言して、その政權を失ふ事を今日までも決して是認せないのであるが、併し多分この政權は到底再度得るの望はないのである。されば同年法王は政權を失つたが、靈的權力は愈々完全になつたのである。

(三) 舊カトリック派

今もいつた如く、ヴァチカン大會議の決議に不賛成の監督も、多分は數ヶ月の後決議に服従し、新しき教を受けたのであるが、併し如何にしても服従せざる者が猶ほ少數あつて、その中の先導者はドリングアー(Döllinger)であつて、彼は舊教の中で教會史を最も精細に研究し、或は學識を以て大評判のあり、且つ大學に於ける教會史の教授で、又羅馬教に對する大熱心家であつたが、彼は教會史に適合せざる所の法王無謬説を受く可きにあらずとの決心を以て、その説を受けなかつた故に、教會より破門され、而して數十人の教授とともに舊カトリックといへる一宗派を組織したのである。それでこの舊カトリックの舊といつた理由は、純粹なるカトリック教會の主義を取るといふ意義である。抑も新教會は新監督を選び、これにデヤンセン派(第六十九章の(乙)の項)の残れる監督より按手禮を受けしめたが、又此新宗派は毫も新教に加はるの考はなく、彼等は一般の信徒にも聖餐の葡萄酒を飲ましめ、又教會の禮拜に於て自國語を使用し、且つ監督の結婚をも許したので、幾分か新教に近くあり、而してその教理は全然羅馬教の教理であつたのである。この運動の爲に羅馬教會内に或は新改革が行はるゝならんと希望した者もあつたが、併し餘り行はれずして、却て前にも云た如く、羅馬教會の一般の信徒は羅馬法王を以て教會の首とする事を喜んだのである。それで舊カトリック教會の信徒は獨逸瑞西に於て凡そ十萬人餘もあつたといふ事であるが、併し其後滅却するの風も見えず、さりとて又増加する事もないのである。

第八十章 第十九世紀に於ける獨逸

第十九世紀の初期に獨逸は多分ナポレオンの勢力に負け、真正の意義の獨立を失つたが、其後獨立を得んどの愛國心を起し、英國と同盟を結びたる結果、ナポレオンに打勝ち、遂に獨立を得たのである。併し獨逸各聯邦の領主は、專制主義を以て政治を施し、領地の民より自由を剝奪し、而して又各聯邦は互に一致を爲す事なく、爲に外國に對しては甚だ薄弱であつたが、千八百六十六年と千八百七十年の戦争の結果、塊地利を除くの外、各聯邦は獨逸帝國の名の下に一致結合をなす事となり、國民も自由の權利を得、猶ほ貿易と武力とを以て大に進歩發達し、遂に大勢力を増加するに至つたので、第十九世紀は獨逸に取つて大なる時代といふ可きである。それと同時に獨逸には神學的的研究を以て運動を起す所の學者が多數あつて、爲に神學界の霸權をも握るに至つたのである。その神學的運動の事を詳細に掲載する事は出来ぬ故に、先づ先輩者の事業を簡單にのぶるであらう。干茲注意すべき事は、近世獨逸の神學論には種々あつて、保守主義もあれば、進歩主義もあり、又極端説を唱ふるものもあつて、獨逸に於ける神學者の學識とその道を研究する所の熱心とは感服するけれども、何人も敢てその凡ての論説を悉く受け容るゝといふ事は出来ないものである。

(イ) 教會の合併

獨逸の新教徒は多數ルーテルを以て先輩者とし、大にその神學説を受け容れ、ルーテル派の神學を主張するのであるが、早くより瑞西に起つた改革説をも受け容れ、所謂改革派に屬するものもあつたのである。倍改革の起原を祝する爲めに、三百年の紀念會を開催した時(千八百十七年)、ホルシヤの國王が新教徒の全體をして一致結合せしめんとすの考より、改革説を鞏固にするの志望を以て、一致結合を勸告したので、終にホルシヤを初めとして獨逸の多數の新教徒は干茲一致合同を見るに至り、これが所謂福音教會であるのである。併しこの合併に對して不同意を表し、猶ほ純粹のルーテル派を保守するものもあつたのである。それでこの合併したる教會は國家政治に親しく關係があつて、政府の任命した事務官を以て教會を支配したのであつたが、漸くこの頃に至り、教會より選舉した議員を以て組織した部會の如きが、幾分教會の取締を爲す様になつたのである。併し教會の牧師の多數は矢張政府より任命さるゝものである。

(ロ) シュライエルマヘル (Schleiermacher) (千七百六十八年—千八百三十四年)

第七十五章に於てのべた如く、モルビアン派を除くの外、第十七世紀の下半に合理論が獨逸に盛しく行はれ、爲に獨逸の教會は非常に冷淡になつたが、この時活ける信仰を惹起する爲に大事業をなし、而して第十九世紀の神學的運動を起した先輩者は、實にこのシュライエルマヘルの如き人であつたのである。彼の父は牧師であつて、その母は熱心なる信者であつたが、彼は小兒の時代にモ

レビアン派の學校に於て教育を受け、そこでキリストを敬愛するの心を抱き、而して彼は數年間宗教に就て種々なる疑問を起し、後漸く確信を抱くに至つたのである。彼はハリの大學の教授となつたが、ナポレオンがその大學を廢止した爲に、その後ベルリンの三一教會の牧師となり、又同時に千八百十年に設立したベルリン大學の最初の神學教授となり、死するまでそこに働いたのである。彼はルーテル派と改革派の一致合同を大に賛成し、而してたゞ一宗派を重んずる事なく、實に基督教の大主義を守るべき事を教へたのである。彼は身體短少であり、且つ背部少しく僣憊たる人であつたが、併し容貌に威嚴をそなへ、且つその態度と精神とは如何にも活潑であつて、學生を指導するに大勢力があり、それに説教を以て智力のある者や、社會の位置ある人々に對し、大に感化を及ぼしたのである。彼は往昔より傳つた教を自由に批評し、而して普通の教會が採る所と異なる點を幾箇も有してをつたが、併し神に對する活ける信仰を以て人々を屬せしめた故に、彼が如何に種々なる謬説を説くとしても、猶ほ神に對する敬神の念を抱きて多數の人々を助ける事により、第三世紀のオリゲンと同様なる人物であつたのである。その論に由れば、宗教の大主義といふものは神に依頼する事で、又基督教の要義はキリストに託て神に依頼するといふにあると説いた故に、彼はキリストを大に尊敬し、敢て三位一體の如き教理を受ず、たゞキリストを完全なる理想的の人物とし、キリストによりて神の恩恵を蒙る可き事を説き、又贖罪事業に就ても普通の説を受け容れなかつたのである。

ある。

(ハ) シュライエルマヘルの弟子と其繼續者

シュライエルマヘルの指導を受け、活ける信仰を抱いて、有名なる神學者となつた人は幾多あるのであるが、併し誰もシュライエルマヘルの論説を全然受け容れるといふものはなく、多くはその師よりも一般普通の教會の信仰所謂保守主義に近くあつたのである。それで今日までも同様の方針を以て働く所の神學者幾人かあるが、その徒は中庸主義を採るものであつて、極端の保守主義とも違ひ、又極端の進歩主義とも異なり、即ち昔時より傳はつた所の教の大意を保持しながら猶ほ進歩したる説をも採り、而して信仰と學識、宗教的眞理と科學的眞理とを調和せんとつとむるのである。それでのその中の四五名の者を簡單に掲ぐれば左の通りである。

ニアンデル (Nander) (千七百八十九年—千八百五十年)

ニアンデルはもとユダヤ人であつて、シュライエルマヘルの導きにより基督教に入り、ニアンデル(新人といへる意)といへる新名をとつたのである。彼は十八歳より教會史を研究せんと決心し、後二十四歳の時にヘルリン大學にて教會史の教授となり、死に至るまで其處で働いたのである。それで彼は『近世教會史の父』との綽名を受くる程に大事業を爲した許でなく、「精神を以てて神學者たる事を得べし」といへる確言を以て、精神的宗教の必要なる事を常に教へ、且つ神の靈が世の中に

働き給ふ歴史として教會史を教へたのである。彼は妻を要らず、たゞ愛する所の妹とともに住居して、常に眼前の物をうち忘るゝ程神の國の歴史の事を考へてをつたのである。彼の身體は如何にも畸形であつたが、學識と活ける信仰と愛情とを以て學生を能く指導したのである。彼の臨終の事をいへば、彼は某日身體如何にも疲勞したる如く感じた故に、休息せんと思ひて終に永眠についたといふ事で、彼の葬式の時には、牧師はイエスの愛する弟子として大にその人格を賞揚したのである。ニーチ (Nitsch) (千七百八十七年—千八百六十八年)

ニーチはシュライエルマールの導きにより大に感動を起し、後ベルリン大學の教授となり、組織神學を教ゆるに、シュライエルマールの弟子中最も有名なる者であつたが、彼は三位一體説を充分に説いたのである。

トルック (Tholuck) (千七百九十九年—千八百七十七年)

トルックもシュライエルマール、ニアンドルの指導により、二十七歳の時にハリ大學の神學教授となり、死するまで五十一年間その職にあつたが、最初合理論の盛大に行はれた大學は、大に變じて福音的信仰を起すに至つたのである。彼は格別學生を愛する人で、學生と親密に交り、又その教場に於ける働きを以て多數の神學生を指導し、その信仰を奨励し、大事業をなしたのである。

ミュラー (Müller) (千八百一年—千八百七十八年)

ミュラーは三十八歳の時にハリ學校に於て組織神學の教授となり、死に至るまで四十年間其職を盡し、感化を以てはトルックに餘り劣る事はなかつたのである。彼の有名なる著作は罪の論で、普通と異なる點はたゞ一個あつたが、即ちオリゲンと同様なる説を再度起し、人類の前身ある事と、この世に生れ出る前にも罪を犯した事のあるを教へたのである。この點に就いて承認する者は少數であつたけれども、ミュラーの感化力は實に大なるものである。

ドルナル (Dornier) (千八百九年—千八百八十四年)

ドルナルも二十三年間ベルリン大學の教授であつたが、彼の最も有名なる著作はキリストに關する教訓の歴史である。

(三) 保守主義の徒

ルーテル教會の保守主義を固く保持するものも幾人かあつて、その中で先輩者たる者を二名擧げば、

ヒングストンボルグ (Hengstenberg) (千八百二年—千八百六十九年)

ヒングストンボルグもベルリン大學の教授で、四十一年間その職にあつたが、その上彼は福音雜誌を發行するを以て保守主義を甚しく主張したのである。彼の最も有名なる著書は舊約基督論で、即ちキリストを指す預言として舊約聖書を論じたのである。又彼は自由民權論に反對し、

而して多分專制主義を主張し、教會の首として皇帝に服従すべき事を教へたのである。
ルタート (Luther) (千八百二十三年出生)

ルタートはレップセック大學の教授であつて、多數の著述と又教會新報の如きものを發刊したのである。

(ホ) 極端なる批評家

極端なる批評を以て、多分基督教の大主義をも廢止せんとする程働いたものもあつて、その二人を擧れば左の通である。

ストラウス (Strauss) (千八百八年—千八百七十四年)

ストラウスは教會の牧師となり、又其後大學の講師となつたが、早くより種々なる疑念を抱きて、千八百三十五年より基督傳を著す事により、大議論を惹起し、終に退職するに至つたのである。その論によれば、キリストは實際存在した人で、而して宗教的大人物であつたが、基督傳中の超自然の事は皆歴史的の事實でなく、それにその所業は作意的の偽事でもなく、たゞ古代の神代史の如きもので、即ち來らんとするメツシヤは必ず奇跡を行ふ可きものであるとの思想をユダヤ人は抱いてをたつた故に、イエスの死後直接の弟子でなく、所謂イエスの生涯を充分に知らざる信徒が、イエスを來る可きメツシヤであるとして、敢て虚偽の心でなく、たゞ尊敬心より不識不知次第に奇跡的の

事を記載した故に、數十年を経て如 此話が非常に流行し、終に後世の人が之を以て眞實の歴史として受け容れ、而して福音書を作るに至つたのである。ニアンデルの如き歴史家や、又神學者の幾人がはこの論を以て敢て信するに足らぬものとして能く示したのである。それでストラウスは愈々不信仰に流れ、臨終となりては福音書を以て作話と見做し、且つイエスを尊敬するの餘り假設された虚偽であるとして基督教を全然輕蔑するに至つたのである。

パウル (Paul) (千七百九十二年—千八百六十年)

パウルはストラウスよりも前に生れ、又前に死したのであるが、彼は有名なる著作を以て少しく後ものとなつたのである、彼はチュービンゲンの大學に於て教會史の教授となり、而して教會史の研究上に彼の智力を現はし、且つ新教の大主義を辯明するに好事業をなしたが、不幸にして彼は基督教の起原に就て誤解したる説を唱へたのである。その説の大意は、一方にペテロと猶太主義の教會と、又他方にパウロと異邦主義の教會との區別を極大に語つたので、實にパウルの説に従へば、抑も猶太教の法律を嚴重に守る可きをいひ、又割禮なくば救はれずと論ずる所の者(徒十五ノ五)は、實にユダヤ信徒中の少數のバリサイ的信徒のみでなく、一般のユダヤ信徒であつて、ペテロや最初の使徒等は皆この教を固持して、パウロや世界的傳道に反對するものであつたといふので、即ちヘーゲルといへる哲學者より受けた所の發達論に従ひ、基督教の發達を説き、先にユダヤ的基督教

が起り、後にこれに反對して世界的基督教が起り、而して互に相違ふ事を以て、所謂カトリック教會が起つたといふので、それで新約聖書はこの説に適合せぬといつて、彼は其大部分を放棄したのである。即ち羅馬書、哥林多前後書、加拉太書、パウロの純粹なる書簡として受け容れ、而して最初の使徒等に反對するものとして是等を説明し（例之哥後十、十一章を以て大に反對したもの、即ち自ら譽むる者詭譎の者といふはこれみな最初の使徒であると説が如きである）、又黙示録を使徒ヨハネの著作として受け容れ、而して之をパウロに反對したる如くに説明したのである（例之黙二ノ十四の「彼等に偶像に獻し物を食はせるものとして責むる者」といふはパウロの徒なりと説明するが如きである）。其他の新約聖書を凡て排斥し、殊に使徒行傳の如きは、ユダヤ的信徒と異邦的信徒とを合併せしめんが爲めに偽作したものとして教へたのである。それで如此説は一時その大學に於て行はれたので、パウロの後を繼いで説いたものも數人起り、之を以て基督教の起原や、第一、二世紀の歴史を詳細に研究するの熱心が起つたのである。それで實にパウロの論の如何に誤解したるものなるかは今は最早明瞭してをるのである。

(ハ) リツナル (Ritschl) (千八百二十二年—千八百八十九年)

近年即ち第十九世紀の末に至り、一般に感化を及ぼした所の神學者はリツナルであるであらう。彼によりて確信を得たものもあるが、又彼を以て活ける信仰に適合せぬとして反對を表するものもあつたのである。兎に角その結果は未だ充分に解らぬが、彼は哲學をも神祕説をも、又自然神學をも放棄し、キリストに於て現はるゝ所の道を尊重しながら、キリストの前生の如きを論ずるを以て空論なりと斷言し、それでキリストが人に教を施し給ふは神の如き勢力である故に、萬民の主としてあがむ可きものであるとしたのである。さればリツナルの論によれば、人は神其者を悟る事能はず、たゞ我等に對し價値あるもの、又我等を益するものは悟る事が出来る故に、有益なるもの又實地的のものを研究し、之を實行するを以て満足す可きであるといひ、又彼はキリストと一體となるといふが如き神祕的教理を棄て、キリストにより神の恩恵を蒙る所の教會に加入する事により、恩恵を受くる事が出来るると説いたのである。

(ト) 舊約聖書の高等批評

第十九世紀下半の一大議論は、聖書殊に舊約聖書の高等批評に關する論である。モーセの五經は多くはモーセの著作でなく、寧ろ數百年間に渉り、次第に出来たものであるといふ説が、第十八世紀の佛國の醫者から初めて唱へ出されたので、其後この論を説くものも數人あつたが、第十九世紀の下半に、獨逸の數人の學者により盛に唱へらるゝに至つたのである。この中の先驅者といふ可き二名は、グラン (Grun) (千八百六十九年死去) とウエルハツセン (Wellhausen) (千八百四十四年出生) であつたので、その論の結果として舊約聖書の起原及び猶太教の發達に就て、隨分異説を抱く

ものが諸方に多數起り、是を以て神の道を受くるの困難を免れ、信仰の助力を得たと喜ぶ人もあり、又この新説は歴史的宗教を大に妨害するものであるとする人もあつて、その結果は未だ議論中で充分解らぬが、第二十世紀に至り、如此高等批評に關する問題こそ、大問題たる可きは實に明白なる事である。

第八十一章 第十九世紀に於ける英國

(イ) 宗教的自由の發達

第十七世紀末(千六百八十八年)の改革を以て(第七十章の(ホ)の項)、英國の政治は立憲政治となつたのであるが、併し民權自由を得てをるものは、たゞ社會中等以上の階級に屬するもののみで、所謂貴族的のものであつたが、第十九世紀(千八百三十二年と千八百六十六年と千八百八十五年)の法律を以て、普通の平民も次第に權利を得、その政治は皇帝を戴く眞正の共和政治となつたのである。従つて眞正の宗教自由も行はるゝに至り、即ち第十七世紀末の改革を以て、國立教會はもとより他宗派に至るまで、教會を設立し、禮拜を執行するの自由を得たのであるが、併し第十九世紀までは、たゞ國立教會に屬する者のみ政權を有してをつた故に、他宗派の信徒が若し國會議員となる事や又官吏とならんと欲するならば、先づ國立教會にて聖晚餐を守る爲に列席せなければならぬ

つたのである。羅馬教の信徒に對しては、全然官吏や議員たる事を拒絶したのであるが、然るに千八百二十八年に於て、他宗派の信徒も全然政權を與へられ、又その翌年に羅馬教徒も政權を受けて、終に其後他宗派の信徒は大學に於ても國立教會の信徒と同一の權利を與へられたのである。

(ロ) オックスフォードに於ける運動(千八百三十三年)

第十八世紀の末までは信仰復興の結果として(第七十六章の(ハ)の項)、所謂福音派が國立教會内に盛に行はれ、其後この運動を以て大勢力を得たのであるが、この徒は活ける信仰と聖き教理とを論じ、或は國立教會の設立は國家の利益となるものであり、且つ監督政治は有益なるものであると彼等は思つてをつても、敢て少しも他宗派を輕蔑する事なく、眞正の教會として交際をなし、而して教會の禮典よりも寧ろ聖道を教ゆる説教者を尊重し、又政治的自由と宗教的自由との進歩を喜んだのである。千八百三十三年よりオックスフォード大學に於て之に反對する運動が起り、大勢力となつたのであるが、その主意とする所は、第一は監督政治を尊重する事で、即ち監督を通して使徒等より傳つた牧師の權威を承認し、且つ尊重して、監督なき宗派の牧師、即ち監督の按手禮を以て使徒等より傳つた權威を受けざる牧師は、實際の牧師でなく、而して教會の禮典を執行するの權利なきものとして、彼等は多分民數記第十六章の「ヨハネ」と同じく、祭司の職務を汚すものである故に、神より刑罰を受く可きもので、又如此偽牧師の關係する所の教會信徒は、神の恩

惠の契約にあづかる事の出来ざる事を説き、實に國立教會と他宗派との區別を甚しく論じたのである。第二は教會の禮典を尊重する事で、彼等は信仰と祈禱の如き方法を以て、神の恩恵を蒙る可き事を教ゆる説に反對し、聖公會の祭司が執行する所の禮典を以て、神の恩恵を蒙る可き事を説き、又洗禮によりて新に生れ得べき事を教へ、猶ほ聖晚餐を説明するに、眞體現在説を以てキリストの身體が實際にパンと葡萄酒とともにある事を強く論じ、尤も直接に羅馬教の化體説は採らぬけれども、敢て羅馬教の教理と餘り異ならぬのである。第三は教會の儀式を尊重する事で、彼等は羅馬教の如き儀式を執行する事を喜び、又司式者は牧師にあらずして祭司たる事を斷言し、而して聖晚餐を執行する所の祭司は、是非東に向つて執行す可きで（即ち會衆を背として）、それに羅馬教と同様なる法服を着し、又日中にも蠟燭を燃し、香を燒き、而して早朝食前に聖晚餐を執行し、或は信者の爲に祈禱をなし、或は信徒は祭司に對して懺悔す可き事を教ゆるにより、出來可き丈羅馬教に接近し、終に羅馬教會と英國教會とを合同するの志望であつたが、然るに彼等は新教の他教會を他宗派として輕蔑し、又ルーテルの改革に不賛成を稱ふるものであつたのである。第四は古代の教會を尊重する事で、第一世紀の教會は多分不完全のものであつて、使徒時代の教會を以て之を完全なる模範となす事は出來ないが、寧ろ三百年間の發達を聖靈の働として受け容れ、第三、四世紀の教會を以て凡そ完全なる模範とす可き事を説き、第二、三世紀の師父の著述を詳細に研究する爲

史 會 教

に、これを英語に翻譯して出版したので、それでシブリアン時代（第二十三章）の教會を完全なる模範としたのである（これに就て一の難問が起るのである。即ち第三、四世紀までの發達が聖靈の働きであるとするならば、何故に第六世紀までの發達も又は中世までの發達も、同様に聖靈の働として受け容れ、羅馬法王に服従せぬかといふのである）。以上の運動とその主意に對して、種々議論も起つたが、併し多數の牧師は皆なその熱心を見て賛成を表したのである。

この運動の先輩者といふ可きは、殊に三名程あるので、一人は

ニウマン (Newman) (千八百一年—千八百九十年)

ニウマンは母から宗教的熱心を學び、而して彼はオックスフォード大學の教授となり、説教と小冊子とを以て右の主意を論じ、數年間は英國教會に屬しながら、たゞその主意を實行するの考があつたが、終に十二年の後羅馬教會に加入し、カルデナルとなつたのである。實に説教を以てはニウマンに及ぶものは殆んどないが、彼が羅馬教會に加つたといふ事は、實に我等の眼より見れば大なる誤謬といふ可きで、是れは全然宗教的熱心の結果であつたのである。日本語の讚美歌第二百一十一番の「みめぐみあるひかりよ」といふは、彼が未だ羅馬教に轉せざりし先の作で、能くその敬神の念を示してゐるのである。而してこれは彼が三十一歳の時に、蜜柑船にたゞ一人乗りて渡航す

史 會 教

途中、逆風に遇ひ進退に困難せる場合、たゞ神の事のみを思ひて作つたものといふ事である。

ブセイ (Pusey) (千八百一年—千八百八十二年)

ブセイはオックスフォードに於て、五十四年間希伯來語の教授をなし、ニウマンと同様なる説を稱へた故に、少時はこの説を主張するものをブセイ派といつたが、彼は羅馬教會には移らなかつたのである。

キブル (Keble) (千八百十四年—千八百六十二年)

キブルは牧職にありながら、十年の間オックスフォード大學に於て詩文の講師として働く中に、千八百三十三年七月十四日に説教を以てこの運動を起し、後數年間ニウマンやブセイと共に働いたといふ許でなく、特に讚美歌を著す事により、一般信徒をも益するの働きをなしたのである。即ち日本語の第二番の朝の歌と第十番の夕の歌とは彼の作である。

フエーバー (Faber) (千八百十四年—千八百六十二年)

フエーバーは敢て先輩者といふ可きではないが、同一運動の結果としてニウマンの指導の下に、英國教會より羅馬教會に移つたのである。彼は多數の讚美歌を作つて大事業をなしたが、日本語の第五十五番の「かみのめぐみのはかりなや」、第三百四十番の「みつかひのたへうたは」、第四百四十番の「はかなきうき世の」等はこの人の作で、一般の信徒も喜んで使用するものである。それで敬

神の念ある信徒は如何にその教理に於て羅馬教新教の區別があつても、神に對する信仰は根本に於て相違のない事を證明するものである。

(ハ) 廣教派

右の運動と全然異なる所の主義を主張するものは、前後に數人も起つて、而してこれを所謂廣教派といふのである。彼等は右のブセイ派や或は儀式派の如く、廣大なる勢力を得る事はなかつたが、その中で有名なるものは數人あつたのである。この主義に由れば敢て教理をかたく説明する事なく、又教會の儀式を餘り尊重する事もなく、基督教の根本的大主義を有つものが、互に相愛し、且つ協同して基督教を應用する事を大切にす様、出來得る大國內の凡ての信徒の一致を求めたのである。即ち彼等は神學を詳細に説明する事なく、又教會の儀式に依頼する事もなく、基督の道を實行するを以て、社會をして基督教主義に適應する様改革する事を大切にしたのである。されば國家と教會との差別を出來得る丈消滅せしめ、祭司の壓制をふせぐ爲に、國會の制定したる法律を以て教會をも支配する事を喜んだのである。然るに彼等は聖き教理を輕蔑し、異端を唱ふる事を許すとの非難を以て、福音派の反對を招き、又教會の禮典と祭司の權能とを輕んずるを以て、ブセイの徒より非難攻撃を蒙つたので、この説を主張する牧師は甚だ少數であつたが、たゞこの説は一般の信徒の中に随分行はれたのである。その先輩者たるものを二三あぐれば、

アルノルド (Arnold) (千七百九十五年—千八百四十二年)

アルノルドはオックスフォード大學を卒業して後、羅馬帝國の歴史を著述する爲に數年間働き、而して三十三歳の時にロッグビー學校の校長となり、死するまでその職の爲に働いたが、彼は校長として青年を教育する事により、大事業をなすとともに、右にのべた所の説を主張する事により、教會の爲に盡したのである。それで國家と教會との區別を輕蔑する者だといふ非難が起つたけれども、實に彼には社會の間に基督教主義を實行せしむるとの熱心があつた故に、反對論者もその精神には大に感服したのである。

モリス (Maurice) (千八百五年—千八百七十二年)

モリスの父はユニテリアン派の牧師であつたけれども、モリス自身は次第にキリストの神性を信仰するの心を抱き、二十九歳の時に英國教會の牧師となつたのである。彼の意見によれば、イエスは所謂宗教の開祖の如きものでなく、萬民の國王とす可きであるといひ、又信仰といふはキリストを國王となし、正義の活動力を信じ、キリストに服従すべきものであるといひ、又教會といふはたい宗教の禮典を守るといふのでなく、神に服従する所の團體であるといつたのである。彼は所謂基督教の社會主義を教ゆる先導者であつて、労働者の爲に熱心盡すを以て大事業をなしたのである。抑もモリスの説を詳細に悟る事は随分困難であるので、爲に之を全然賛成する人は多數ないのだが、併し

し彼は社會に基督教を應用するの熱心を以て大事業をなしたのである。

スタンレー (Stanley) (千八百十五年—千八百八十一年)

スタンレーは四十八歳の時にロンドンのウエストミンスターアベアの副監牧師となつた人で、彼は大神學者といへぬが、併し博愛即ち凡の信者を己が教會員と見做して交り、所謂廣教派の主義を麗しく實行して大感化を及ぼしたのである。

(三) 他の宗派

福音同盟 之は宗派ではなく、たゞ凡の宗派の交際を奨励するの目的を以て、千八百四十六年の八月にロンドンに於て組織された者である。それでこの同盟は左の如き信仰個條を以て基督教の大體を表現し、而してその個條を主張する者は各自の教會政治に能く服従する事をつとめ、其上萬國の諸宗派に對して、實際の道を奨励し、且つ迫害を受ける所の信徒を保護する事を目的としたのである。それで時々萬國大會の如きを催し、而して毎年一月に初週祈禱會を開き、偕々に祈るが如き事をなしたのであるが、今その信仰個條を掲ぐれば左の通である。

- 第一、聖書の權能を信する事
- 第二、各自聖書を研究して之を自由に説明するの權ある事
- 第三、三位一體を信する事

- 第四、人類は墮落の結果罪人となりたるを信する事
- 第五、キリストの贖罪事業とその政治を信する事
- 第六、信仰によりて義とせらるゝ事を信する事
- 第七、聖靈が信徒を深め給ふ事を信する事
- 第八、來世の賞罰を信する事
- 第九、洗禮と晩餐禮とを執行する事である。

プリモス (Plymouth) 兄弟派 千八百六十年にプリモスに於て起つた所のこれは宗派であつて、直接ダービー (Darby) とする傳道者の働きの結果で、時にはダービー派とも云のである。彼は最初英國教會の教師であつたが、後自由に働く所の傳道者となつたのである。この派は別に神學に就ては普通の教會と異なる點はないが、併し普通の教會は腐敗してをて、神に放棄されたものであるといひ、人々に向ひて普通教會より離る可き事を教へ、又普通の教會政治も之は人の造つたものである故に、全然棄つ可きであると説き、而して我等は宗派にあらす、眞正の基督教徒なりと斷言するのである。其故に彼等は未信徒に教ゆる事なく、たゞ他教會より人を奪はんとするものであるとの非難を受くるに至り、又この派の内には幾回となく分裂が起つた事があるのである。彼等は

史 會 教

キリストの再臨近きにありと望むのである。

イルヴィング (Irving) 派 (千七百九十二年—千八百三十四年) イルヴィングは蘇國人で、彼は三十歳の時にロンドンに於ける蘇國人の教會の教師となり、而して彼の説教を以てその教會は増々盛大に赴いたのである。千八百三十一年に蘇國の所々に於て古代の方言 (哥前十四章) の如きものが行はるゝといふ風聞があり、又イルヴィングの教會にても同様な事が起つたので、之に就て議論もあつたが、イルヴィングは之を以て必ず聖靈の働きであるとして喜んだのである。その後彼は二年にして死去したが、併しこの運動の爲に新教會は設立され、而して一般の人々はこの教會をイルヴィング派といふのであつたが、彼等自らは使徒教會といつたのである。この教會の目的は使徒時代の教會に模倣する事であつた故に、その教會には使徒、預言者、傳道者、教師、長老、執事もあつて、その根本主義は使徒時代と同じく今も猶ほ靈の賜を興へらるゝが故に、預言者によれる聖靈の導きや教訓を尊重し、又方言を使用する所の能力をも喜んだのである。その方言といふは普通の語とは違ひ、何人にも解せざる語を以て神を讚美するのである。それでこの派は前のプリモス兄弟派と同じく、キリストの再臨近にある事を信するのであるが、それを正反對に又教會政治と教會の禮拜を重んずるのである。

史 會 教

救世軍 之は第十九世紀英國に於ける宗教的運動である。ブーム (Booth) (千八百二十九年出生)

は平民的傳道の熱心を以て、千八百七十八年に救世軍の名を以て設立したのであるが、之は教會ではなく、たゞ傳道を爲す所の團體であつて、實に宗派の如きものであるのである。殊に下等社會の爲に働く所の熱心を以て、ロンドンを初め萬國にまで大事業をなしたものである。

(ホ) 科學と宗教

第十九世紀の下半に於ける宗教上の一大問題は、實に宗教と科學との關係で、之は直接進化論の行はれたる結果である。

ダルヰン (Darwin) (千八百九年—千八百八十二年) が千八百五十九年に出版した所の書を以て、進化論は初めて天下に公表され、而して次第に科學世界にも、又一般の人々の中にも行はるゝに至つた故に、創世紀第一、二章の説明は、これが爲に幾分變更を來したといふ許でなく、即ち萬物の發達の點により、神の世界に對し給ふ働き方に就き、幾分の異説が行はれた故に、宗教の發達に關しても、幾分異説を抱くものが起つたのである。その結果は未だ充分には解らぬが、或は進化論を以て唯物論を稱へ、或は無神論を主張する者も起つたのである。それで兎に角進化論によりて神が世界を創造し給ふ聖業、即ち神の働き方に就て其説は幾分變更するとも、有神論を信するの妨害とは決してならぬ事は大多數の承知する所である。少しく異なる問題ではあるが、第十九世紀の下半に於て不可思議論が起り、ロンドンのセントポー

ルの大會堂の副監督マンセル (Mansel) が、千八百五十八年に宗教的研究の範圍を論ずるの書を著し、信仰の必要なる事を表明せんが爲に、人智を以ては到底無限そのものを悟る事の出來ざる事を論じたが、有名な科學者は千八百六十九年に不可思議の名を以て喜びつゝ、その説を受け容れ、而して積極的に無神論を教へはせぬとも、神を悟る事の出來ざる事を論ずるを以て、消極的に有神論に反對したのである。

(ハ) 教育

第十九世紀の末頃までに英國に於て公立小學校なるものはなく、たゞある所の小學校は教會附屬のものであつて、メンヂスト派に屬するものもあつたが、多數は勿論英國教會に屬するもので、いふまでもなく普通教育を爲すのであつたが、猶ほ英國教會の道をも教ゆるのであつた。舊英國の人口の増加するに従ひ、學校の欠乏を知り、千八百七十年に初て公立小學校を設立したが、之は敢て教會附屬のものを廢止するといふ譯でなく、又敢て之を妨害するといふ譯でもなく、たゞ附屬小學校のあらざる所に、公立小學校を設立したのである故に、第十九世紀末に至りては、地方の小學校の多數は教會附屬のものであつて、所謂教會の寄附金によりて立てたものであつたが、都會の小學校の多數は公立であつたので、所謂無宗派的基督教を教ゆるものであつた故に、教會附屬の小學校をも國家の財政を以て維持す可しと論ずるものもあり、又國家の財政を以て維持する所の公立學校に於

て、一宗派の説を教ゆ可からずと論ずるものもあり、又無宗派基督教は決して純粹なる基督教にあらざと論ずる者もあり、又國家の財政を以て宗教を教ゆ可きにあらざと論ずるものもありて、是等は第二十世紀までも大問題として大争論の種を播いたのである。さればその結果は第二十世紀に屬するもので、本書出版の際には勿論未だ判然せざる所のものである。

第八十二章 第十九世紀に於ける蘇國

(イ) 一致教會

第十七世紀末の改革によりて(第七十二章の(ニ)の項)、蘇國人は長老教會を保護するの自由を漸にして得、而して今日までも蘇國人の大多數は長老教會に屬するものである。第十八世紀中に教會内部に争論が幾回も起り、その結果として分裂を來し、小分派が二三も起つたのである。その詳細の事はここに掲ぐる事は出来ぬが、第十九世紀の中頃(千八百四十七年)、この小分派が合同して一致長老教會の名を受くるに至つたが、この教會は共和政治と神學とに就ては一般の長老教會と異なる事なく、國立教會の如きに反對して、教會たるものは政府に依頼すべきものでなく、たゞ寄附金を以て經濟をたて、而して政府より全然獨立すべき事を説き、猶ほ一般の長老教會と同じく、カルツインの神學を主張して、ウエストミンスター會議に於て決定されたる信仰箇條(第七十

一章の(ロ)の項)を受け容れながら、敢て預定説を極端に教ゆる事を好まず、神の全權と預定とを信じつ、神の恩恵の洪大なる事と、人類の責任の重大なる事と、廣く傳道すべき事とを貴重して信じたのである。そののみならず、進歩的精神を以て、人の作つた讚美歌(即ち詩篇譯以外の讚美歌)や、オルガンの如き樂器を使用する事により、蘇國に於ける他の長老教會よりも先じたのである。その他長老政治をとりながら、猶ほ共和政治の精神を有してをたつたのである。

(ロ) カルマース (Chalmers) (千七百八十年—千八百四十七年)

第十九世紀上半に於ける蘇國教會の大人物は、確かにカルマースであつたので、彼は十一歳の時に大學に入り、敢て語學を學ぶの熱心はなかつたが、數學と哲學に就て非常に智力を現はし、十三歳の時にエドワーズの意志自由の意義深き論(第七十七章の(イ)の項)を非常に愛讀したのである。而して彼は神學を卒業してから大學校の所在地の隣村の教會教師となり、その職にありながら、猶ほ大學に於て數學の教授となつたのである。それで教會の教師たる者がともに大學の教授たるはよるしからずとの非難があつたので、彼は之に對し、宗教の教は甚だ解し易きもので、之に就て説教する事は最も容易のわざである故に、先づ土曜日を以て之が準備をなし、日曜日を以て道を教ゆるならば、月曜日より金曜日までの時日を以て、他の事業をも爲すは、別に困難なる事にあらざといつたのである。即ち彼は青年の頃より父母に習ひ、基督教の大意を學んだが、併し自らキリストを敬

愛するといふ熱心や、又宗教的熱心はなく、たゞ基督教を貴重なる倫理として道を教ゆるに過ぎなかつたのである。然るに彼が重病にかゝり、數ヶ月の間凡ての事務を休止した時に、初めて自己の不信仰を反省し、漸くにして眞實キリストを敬愛するの熱心を起し、道を教ゆるの力を得たのである。而して三十五歳の時に、グラスゴウの教會牧師となり、八年間その職を盡し、殊に基督教的慈善を實行するにより大事業をなしたのである。即ち彼の論によれば、各教會たるものは自己の領内の貧民を補助し、而して勞働を爲すの力あるものには職業を與へ、若しその力なきものには肉體上必要な物品を與ふるのみならず、彼等を慰撫獎勵し、且つ精神をも助く可きであると思つたのである。その後彼は自己の卒業した大學に於て、倫理學の教授となり、又夫より五年後にエデンボルグの大學に於て組織神學の教授となり、死するまで（十九年間）その職を盡し、牧師とならんと欲する者を教育して大事業をなし、又大感化を及ぼしたのである。尤も彼には神學を組織する程の能力はなかつたが、併し基督教の大主義を活ける信仰を以て教へ、又學生の信仰を激勵し、彼等の活氣を惹起するにあづかつて力あつたのである。又彼の説教は蘇國人に適當して有力であつたのみならず、教會の數の欠乏を知り、彼は新教會を設立せんが爲に數十萬金の寄附金を募集し、二百有餘の教會を設立し、或は會堂を建築するの道を開いたのである。されば第十六世紀のノックスの指導の下に、蘇國全體の人々が宗教的熱心を惹起し、新教の信仰をかたくした如く、第十九世紀の中頃、

全國はカルマースの宗教的熱心に感動して、信仰の復興を得たのである。

(ハ) 教會の分裂 (千八百四十三年)

第十八世紀の上半、即ちウエスレーの運動までは、英國は甚だ宗教に對して冷淡であつた如く、第十八世紀中蘇國に於てはウエスレーの如き人の起る事もなく、實に教會の多數は冷淡であつたのである。然れども第十九世紀に至り、カルマースの如き人の指導により、教會の多數は活ける信仰を起すにいたつたのであるが、然るに不幸にも一の難問題が起り、即ち教會と國家政治との關係であつたのである。抑も長老教會の主義とする所は、各教會の會員たるものは、その牧師を選定するの權あるものとするのであるが、第十八世紀の初期、英國の議會は、蘇國教會の獨立權を破り、英國教會の風習に循ひ、蘇國に於ても、牧師選定權を一定の者に專任せしめたので、所謂各教會の牧師を選定する所有權者が、各教會の牧師を任命するのであつた。然るに第十八世紀の所謂冷淡なる教會は、その無道理なる法律に服したのである。尤も教會員は自己の教會の牧師選舉權を奪はるゝといふ事は好む所でないけれども、敢て之れを拒絶する勇氣がなかつたのである。然るに第十九世紀に至り宗教的熱心が活潑に起る様になり、從つて選定權所有者の任命により、教會の牧師を受ける事の甚だ無道理にして無法なる事を悟り、これを拒絶するの考が次第に起り、終にカルマースの指導のもとに、教會の大會は、若し教會員の大多數にして選定權所有者の任命した牧師に對し、不

同意を公表する場合には、中會はこの牧師に按手禮を授く可からずとの規則を決議したのである。尤もこの決議は敢て選定權所有者より、その權利を奪ふといふ譯ではないが、その教會の多數會員の意思に逆ひて、その選定權を執行する事を妨害したのである。それで彼等は如此規則を設け、國家法律に一方には服従してその選定權所有者の權を承認しながら、猶ほ他方に教會の靈的獨立を保護せんとしたのである。然るに裁判を事はこの規則を以て國家法律に不當のものとして之が廢止を命じ、且つ如何に教會員全體が選定權所有者の任命した牧師を鞏固に拒絶するとも、是非中會は按手禮を授く可きであると命令を下したのである。カルマースとその徒は、教會の希望に反對して牧師を任命するは、甚だ無法無道理たるのみならず、如此法律は教會の靈的獨立を妨害するものなりとして、如此政府の壓制を受ける所の教會に屬するは、自己が靈的職務を盡す能はざるものとなし、數年間の議論の上にて、國立教會より分離するの外なしと決心し、千八百四十三年の五月大會を開き、四百七十人の牧師は袂を連ねてカルマースの指導の下に大會を去り、自由教會といへる名稱を以て新教會を設立したのである。一體國立教會なるものは國家に依頼するものであつた故に、今その教會より分離する場合、自然その牧師は俸給の道を失ひ、又その牧師に屬したる信徒は、會堂を失ふに至つたのである。然れども彼等は非常なる宗教的熱心を以て新會堂を建て、又牧師に給す可きの寄附金をも作つた故に、自由教會は次第に盛大となり、又他國傳道までも活潑

を開始し、第十九世紀末にはこの教會中に進歩的有名なる神學者幾人も起つたのである。尤もこれに就ては随分議論のあつたのであるが、併し大多數は往昔より傳つた大主義を保存しながら、猶ほ進歩的自由研究をも承認したのである。されば第十九世紀末に至り、國立派の教會數は千四百であつて、自由派の教會數が千百、又一致派の教會數が五百七十、その他の教會數が千百であつたのである。夫れより三十年後に國會は法律を改正し、國立教會の牧師任命の權を各教會の會員に一任した故に、従つて牧師選定法に就ても區別はなくなつたのである。

(三) 自由教會と一致教會との合同 (千九百年)

自由教會と一致教會とは、神學教理と教會政治とに就て區別はないが、いづれも國家の政治に對しては獨立である故に、別々となつてを事は甚だ無道理の如くに見ゆるのである。然れども最初國家と教會との關係に就き、その論は異なつてををつたので、即ち一致教會の説によれば、國家政治に對しては、教會の獨立は我等の全然理想とすべき事であるといふのであるが、又自由教會の説によれば、我等の理想とすべきものは、たゞ靈的自由を有する所の國立教會そのものであるといふのである。それでその理想とする所に相違があつたのだが、併し實際の上には區別はなかつたのである。抑も自由教會は數年間の獨立の經驗を以て、次第に教會の獨立をも理想とすべき心が起つたので、最早別々になつてをるの理由もなくなり、終に數年の協議の結果、第十九世紀末に至り、千九

百年の十月、一致自由教會といへる名稱を以て一致合同をなしたのである。然るにたい山間にある自由教會の少數のみが猶ほ保守的精神を以て、この合同に不同意を稱へてをつたので、第二十二世紀までも之は問題となつてをつたが、併し大多數はこの合同を歓迎したのである。第二十二世紀に於ては國立教會も又一致自由教會と一致合同する事により、蘇國の凡ての長老教會が、皆一團となるであらうとの考は人々の理想であるが、併し未定の事である。

第八十三章 第十九世紀に於ける米國

(イ) 神學的議論

(A) ユニテリアン派の起原

前にもいつた如く(第七十七章)、第十八世紀の下半、米國の組合教會中に相異なる所の二つの運動があつて、其一は即ちエドワーズとその弟子及び繼續者の指導の下に、往昔より傳つた所のカルヴァイン派の主義を保持しながら、猶ほ神恩の洪大なるを、人類の責任の重大なるを教へ、且つ傳道的熱心を起してリヴァイヴアルを喜ぶものであつた。其二は、即ちリヴァイヴアルに關する混雜を大に憂ひ、如此熱心を敢て喜びとせず、所謂アルミニウス等の説を主張するものであつたのである(この所謂アルミニウス派の徒といふは、同世紀の英國に於けるウエスレーの如きもの、取つ

たアルミニウス主義とは大に異なる者である)。それで第十八世紀の末までは、獨立戰爭に對する問題があつて、神學上に就て敢て分離を起す様の事はなかつたが、第十九世紀の初に當り、一方は頻りに傳道的熱心と活動的舉動を奨勵し、又他方は次第にキリストに就てアリアスの如き説を主張するを以て、その差別は愈々甚しくなり、終に分裂を來すに至つたのである。所謂アルミニウス派の徒は次第にユニテリアン派といへる名稱を受けたが、最初はキリストを主として尊敬したけれども、終に三位一體の如き教理を充分に受け容れず、而してキリストに就てはアリアスの如き説を取り、キリストの道を詳細に説明する事はなかつたのである。又其上にアダムの原罪を以て人類は生れ出で、而して墮落したものであるといふが如き説をも棄て、一般人類は神の子たるものなる事を重じたので、即ち人類の中に行はるゝ罪の甚しき事に就ては、一般普通の教會と異つてをつたのである。儲この分裂の起つたのはたゞ一時に起つたものでなく、紀元後何年であつたか解らぬが、兎に角數年間の出來事であつたのである。ハヴァード大學の神學教授を選定する場合に、その理事者の半數は保守主義の人で、又他の半數はユニテリアン派であつて、少時は選定すること出來なかつたが、然るに保守主義を取る所の一人の理事が死去した爲に、終にユニテリアン主義をとる所のものが多數となり、千八百五年にその主義の教授を選定するに至つたのである。之に反して夫より三年後、即ち千八百八年アンドヴァーといふ所に於て、保守主義を保持せんが爲め、一の新神

學校を設立したのである。抑も米國に於て神學校といふ可きものはこのアンドヴァー神學校が最初であつて、以前は普通の大學に於て神學を教授したのであるが、併し神學科は別に獨立科としてなかつたので、たゞ普通大學の一部分として基督教の教理を教ゆるのみであつたのである。それで教師ならんと欲するものは、たゞ有名なる教師の家に二三年を待つて神學を學び、教師の職を習ふにどまつたのであるが、如此教育の甚だ不満足なる事を知り、アンドヴァー神學校の模範に倣ひ、凡ての宗派はその神學校を設立するに至り、終に二十年間に十七箇の學校が出来たのである。前にもいつた如くポストンの近くに、所謂アルミニアスの如き冷淡なる論者が數十年間（第十八世紀の下半）もをつたので、その教會の多數は次第にユニテリアン派に屬し、その總數九十六もあつたのである。これに就て一の注意すべき事は、當時の法律によれば教會の教師を選定するには舊に教會の正會員許でなく、所謂準會員即ち賛成家の如きもの、尤も是等は如何に正會員の如く聖晚餐に列席するの權がなくとも、たゞ教會の經濟を補助するが爲に、教會教師を選定する權があつた故に、正會員の多數が保守主義を保つてをつも、若し教會外の賛成家の多數がユニテリアン主義を主張するにより、教會なる團體の組織がユニテリアンとなつたので、不得止教會員の多數が新教會を設立したといふ例は幾箇もあつたのである。それでユニテリアン派に屬した教會が八十一もあつて、ユニテリアンに加つた教會員が僅かに千三百にも足らぬといふが如きと、それにユニテリ

アン派に加はらずして、新教會を設立したその會員が三千九百人もあつて、その會員中九々四分の一だけがユニテリアン派に加つたに過ぎぬといふが如き現象であつたのである。教會外の賛成家はたゞ投票權を濫用して八十一程の教會をユニテリアン派に屬せしめたのである。然るにポストンの附近に於てユニテリアン主義は大に行はれたが、併しその他の所では餘り行はれなかつたので、コンチクコット州でユニテリアン派に移つたものは一つもなく、却て米國組合教會の大多數がユニテリアン主義に反對するにより益々キリストを尊敬し、道を諸方に宣傳するの熱心を起したのである。

(B) 長老教會の分裂 (千八百三十九年—千八百七十年)

組合教會特にコンチクコット州の組合教會は、長老教會と親密に交際した許でなく、實にコンチクコット州の教會は第十九世紀の中頃まで、長老政治と餘り異ならぬ政治をとつた故に、この兩派は愈々互に交際する事は容易であつたのである。其故にコンチクコット州に盛に行はれた所の所謂新英國神學は長老教會の中に幾分行はれたといふ事は決して奇なる事ではなく、其上新英國より西方に移つた所の組合教會員は、多く長老教會に轉會したので、従つて長老教會中に最初から新英國神學を學んだものもあつたのである。この新英國神學といふは、前にもいつた如く、決してカルヴァイン神學、又はウエストミンスター會議の信仰箇條を放棄するものではないが、神恩の洪大

なる事と、人類の責任の重大なる事とを重んずるを以て、舊カルヴィン主義と少しく異なつた故に、舊カルヴィンの主義をかたく保守する者、殊に蘇國より來つたものは、その新カルヴィン説の行はるゝ事を喜ばず、次第に舊新の如き區別が出來て、終に千八百三十七年の大會に於て、舊派が多數をたのみ、新派の五百三十三の教會を長老派より放擲したので、夫より三十三年間長老派は二つに分裂してをたが、併し再び合併するに至つたのである。尤も組合教會の中にも、舊新の如き議論があつたけれども、分裂するには至らなかつたのである。

(C) プシチル (Bushnell)

第十九世紀の中頃迄、凡そ數十年間に於て發達した所の新英國の神學は、組合教會の大多數の中に盛大に行はれ、第十九世紀の初期エール大學に於てテーラ (Therap) (千八百二十二年より千八百五十八年まで組織神學の教授であつた) が、又アンドヴァー神學に於てパーク (Park) (千八百四十七年より千八百八十一年まで組織神學の教授であつた) が、力を盡してこの神學を教へ、第十九世紀の下半に至り、次第に異なる所の神學の方針が行はるゝに至つたのである。この新運動の先驅者といふ可きはプシチルであらうと思ふ。それでこの説を悉く受け容れぬといつても、彼の指導の下に感化を受け、新方針を取るものも幾分あつたのである。彼は三十一歳の時に教會の牧師となり、身軀の衰弱するまで、即ち二十六年間、同一の教會に於て働き、而して千八百四十七年に基督教を育といふ名

を以て新説を稱へたのである。エドワーズの時代からプシチルの時代まで、凡そ百年の間組合教會は、改心即ち新に生るゝといふ事を尊重し、信徒の子供にして小兒洗禮を受けたものも、未信徒の子供と同じく、成年の後新に生れ、罪を悔改めたる經驗により、神の子となる可き事を教へたが、プシチルはこれとは異なり、基督信徒の子供は幼年より基督教的教育を受け、神を天の父として敬愛するの心を抱き、如何に改心といふ經驗がなくとも、一生涯神の子たる事を悟り、神に對する孝行を盡す可き事を説いたのである。それのみでなく、贖罪の事業に就ても、普通と異なる説明をなし、即ち贖罪事業は神のいつくしみを表現し、又神を敬愛するの心を奨勵するものとして説いたのである。猶ほ彼はキリストの神たる事を深く信するけれども、三位一體の説明に就ては普通と異つてをたが、之れに就て大議論が起つたのである。

(D)

第十九世紀末に至り、獨逸に起つた神學説を研究し、これに感動を起し、且つ英國に起つた進化論により、米國にも一般に行はれたのであるが、これが爲に神學に就て幾分新運動が起り、往昔より傳つた保守主義を保持するものが多數あつても、次第に新説に移るものも随分あるのであるが、併しこの運動は未だ途中にあるが故に、その結果は未定であるのである。

(ロ) 第十九世紀に於けるリヴァイヴァル

第十八世紀の中頃、大リヴァイヴアルが盛大に行はれたが（第七十七章の（ロ）の項）、第十八世紀の下半年に於ける教會は、甚だ冷淡となつたのである。その理由は一般の人々が獨立戦争の爲に國家の政治に就き、所謂政治的問題の爲に、宗教の事等は幾分打ち忘れたのと、又獨立を得んが爲に佛國と同盟したので、佛國に行はるゝ不信仰（第七十五章の（甲）の項）の影響が米國にまで及ぼし來つたからである。實例を挙げれば、凡ての大學生の中、信徒たる大學生は甚だ少數であつた事にも解るのである。然るに第十八世紀末に至り、次第に信仰再燃し來り、エール大學に於ては、ドワイト校長の説教により活ける信仰は大勝利を得、而して第十九世紀の中頃までに諸方にリヴァイヴアルは幾回となく起り、全國の教會は活潑なる熱心の運動を初めたのである。それで最終の大リヴァイヴアルは千八百五十七年の秋で、その時ニューヨークに於て、實業家が最も繁忙なる晝の正午を期し、祈禱會を開いたが、會衆は非常に多數で、その冬期中に日々の祈禱會は二十ヶ所もあつたといふ許でなく、その他劇場に於ては大説教會を開き、爲に數千人のものが信仰を起し、全國中に如此運動が行はれて、終にリヴァイヴアルの結果百萬人の信徒が起つたといふ事である。全國同時に行はれたといふ大リヴァイヴアルは、この後なかつたが、併し地方的リヴァイヴアル、殊にムーデー（千八百三十七年—千八百九十九年）の如き人の指導の下に起つたものは、幾多あつたのである。それで第十九世紀末に至り、如此リヴァイヴアルは次第に少なくなつたが、併し夏期學校や信仰修養會の如きものが年々盛大に行はるゝに至り、之によりて教會の信仰は獎勵されてをるのである。

(ハ) 内國傳道

第十九世紀の初期、米國はたゞ東海岸に沿ふて狭く長く擴張されたのみで、その人口は五百三十萬人に過ぎなかつたが、同世紀の末期に至りては、終に大西洋沿岸より太平洋の沿岸に至るまでの廣大なる土地に擴張され、その人口は實に七千六百萬人に達したのである。其故に内國傳道事業も格別に重大なる事業となつたので、即ち人々は東より次第に西に移り、未開の土地に次第に住居を定め、社會の基礎を据へるに従ひ、種々なる混雜と無法なる事件とが行はれたので、如此時代に教會を設立し、又宗教を實行するといふ事は、實に困難であつたのである。そのみでなく、歐羅巴から移住するものも多數あつて、種々なる國語を使用し、種々なる風習を持ち來りたる移住民をして、實際の米國人に感化するといふ事は、誠に大事業であり、且つ大困難であつたのである。移住民は尤も最初からあつたのであるが、併し第十九世紀の中頃、アイランドに非常なる饑饉が起つた結果、羅馬教を確信する所のアイランド人數百萬人が移住し來り、又夫より少時後、獨逸より自由と土地とを求めんが爲め、獨逸人數百萬人が移住し來りて、其中にはルーテル教會に屬する人も多數あつたが、無信仰のものも随分あつたのである。又同世紀の末に至り、イタリヤ人やポーランド人やハンガリー人や、それに露國の壓制より脱がるゝ所の猶太人の如きも多數移住し來つたので

ある。これが爲に同世紀中、中央と西方に向つて傳道を爲すの必要が迫つたのみでなく、其世紀の末期に至りては、東方に於ても、移住民に對し傳道の必要があつたのである。幸にも第十九世紀は第十八世紀とは異なり、信仰活潑に起りたる時代であつた故に、凡ての宗派が傳道を爲す事により運動を起したのである。それで第十八世紀の末頃、コンチクチコット州の組合教會の總會は、内國傳道會社の設立を決議して之に従事したが、又他の教會も之れに倣つて同一の事業に取りかゝつたのである。尤も未開の土地に傳道するといふ事は、眞に困難で、或は鐵道もなく、又善良なる道路もなく、爲に旅行の困難があつたのみならず、それに國家政治の未だ充分に整頓せざる土地に、傳道する事は随分危険であつたのである。如此土地に卒先して、凡ての困難と危険とを冒し、傳道を爲しつゝ、大事業を企てたものは、格別メソヂスト派の傳道者であつて、彼等はウエスレーの模範に倣ひ、何とも恐れず騎馬にて諸方を巡回して、或は傳道を爲し、或は教會の基礎を据へたのである。浸禮教會も早くより諸方に盛大に行はれ、現今までも多數の教會を所有するのは、この二派であつて、又長老教會も前の二派に左程劣る事なく、諸方に行はれたのである。

この外國傳道に就て、コンチクチコット州の組合教會の總會と、又米國の長老教會の大會とが、互に契約を結び、千八百一年より千八百五十二年まで、組合派と長老派とが協同傳道となしたのである。その目的は互に競ふ事なく、又互に議論する事なくして、共に力を協せ、この重大なる事業を出來可き丈盛大に擴張するの考であつたのである。されば是等の傳道によりて出來た所の教會は、實際組合派でも、又長老派でもなく、兩派に關係する所なき中立のものであつたのである。

(例之著者の父はオハイオ州の組合教會の牧師であつたが、米國の長老教會の大會の議員となつたが如きである)然れども當時の組合教會は、組合派と長老派の區別の如きは餘り必要のなきものと思ひ、組合教會の新英國に行はれてをる事を以て満足し、而して西方を以て長老教會に一任するの考であつた故に、五十年間の協同傳道の結果として、組合教會の信徒の設立した二千餘の教會を長老派に譲つたのである。然るに第十九世紀の中頃に至り、次第に組合派と長老派との區別を考へる事となり、終に組合主義を尊重するの念が起り、千八百五十二年に組合教會は今迄の協同運動を廢止し、獨立して傳道する事に決定したのである。

(三) 米國に於ける宗派

最初移住して殖民地を開いたものの中には、組合派もあれば、浸禮派もあり、又長老派もあれば、監督派もあり、又改革派もあれば、フレンド派もあり、それにウエスレーの運動によりて起つたメソヂスト派もあり、而して最初國立教會の如きものも諸方にあつたが(即ち新英國の組合教會の如きもの)、第十八世紀の末頃に、國家と教會との關係がなくなり、全然宗教自由が行はるゝに至つたのである。その後歐羅巴より移住する者には、天主教もあり、ルーテル派もあり、その他幾つもの小

分派があつて、諸方より移住し來つた結果として、米國には宗派と稱す可きものは、何程あつたか解らぬ程に多數あつたのである。例之長老派の分派の如きは、蘇國に起つた所の分派に屬するものが移住し來つた爲に、米國にもこの區別が出来たのである。然れども又米國に於て起つた分派も幾つもあつて、前の(イ)の項に於ていつた中にも二つあつたのである。その他のものは詳述する事は出來ぬが、たゞ奴隸制度に關して南北の區別が次第に起り、之れが爲にメンヂスト派、長老派の如きは南北に分裂し、又未開の地方にて大リヴァイヴアルが起つた時に、其傳道方法に就て長老派に新分派が起つたのである。其上米國に於て起つた新分派は幾つもあるが、其中で最も盛大なるものは「弟子」(デサイブルス)といふ派で、この派はキアムベル (Cummber) といへる傳道者の運動の結果として、千八百十一年の頃設立された教會である。この派は洗禮に就て浸禮派と同一の風習を守り、又教會政治は浸禮派や組合派と別に異なる事はなかつたのである。それで人の作つた所の信仰簡條を使用する代りに、たゞ聖書をのみ信仰の標準となし、而して一宗教となさずして一般の信徒をしてキリストを主とし、聖書を受け容るゝ事により、合同一致せしむるを以て目的となし、敢て組合派長老派の如き區別を設ける事なく、たゞ「弟子」或は「基督教徒」たるの名稱を取つたのであるが、併し實は一宗派といふ可きもので、これは第十九世紀末に至り盛大を極めたのである。第十九世紀中の米國教會史を繰返すならば、多數の宗派や分派の出來た事は、實に著しき事で、又

この多數の宗派が相互に競争する事により、或は内國傳道が盛に行はれたかも知れぬが、又これが爲に弊害のあつた事も無論の事である。即ちこの競争によりて無法に力を費した事もあり、或は少數の土地に於て分離したる結果、教會が微弱を來した事も幾回かあるのである。然るに第十九世紀の末に至り、次第に合同一致の傾向を起す事となつたが、併し未だ凡ての宗派が皆合同一致するといふ事はない。それで先づ第一、相互に接近してをる所の宗教が次第に合同し、第二、凡ての宗派が基督教を應用する所の運動に於て協同する所の希望は第二十世紀に屬する事で、將來の事を考へて見れば、或は財産を要求するの熱心が高まり、或は安息日を潔く守る所の熱心衰へ、其上基督教の主義を詳細に悟らず、而して基督教を實行するの熱心なき移住民が多數米國に移る事により、大難問が起るに相違ないのである。然れども應用的基督教を實行する爲に、協同の精神が起り、之れが爲に大希望があるのである。

メンヂスト派

其分派は十七で、信徒の数は五百八十萬人、

浸禮派

其分派は十三で、信徒の数は四百七十萬人、

ルーテル派

其分派は五で、信徒の数は百六十萬人、

長老派

其分派は二十で、信徒の数は百六十萬人、

弟子派 (デサイプルス)

其信徒の数は百十萬人、

監督派

其信徒の数は七十萬人、

組合派

其信徒の数は六十萬人、

兄弟同胞派

其分派は二で、信徒の数は四十七萬人、

改革派

其分派は三で、信徒の数は三十六萬人、

ユニテリアン派

其信徒の数は七萬人

である。

第八十四章 第十九世紀に於ける基督教的事業

この基督教的事業は敢て一國に限らず、歐米各國殊に英米に關する事である。

(イ) 安息日學校

早くより改革者は小兒の宗教的教育に就て怠る事なく注意してをつたが、彼のルーテルの如きは、小兒問答書の如きものを作り、特に長老教會や組合教會の如きは、信徒の小兒に問答書を教ゆる事を大切にしたのである。然るに安息日學校の如きは、第十八世紀末に起り、第十九世紀に盛大になつたのである。近世安息日學校の設立者は、英國のレークス (Raikes) で、彼は新聞紙の發行者であつたが、貧民の小兒が日曜日に善き行をなさざるのみならず、たゞ空しき所の遊戯にふけつてゐる事を見、これが爲に千七百八十年に日曜學校を設立し、午前十時より午後四五時頃まで、讀書と聖書を教へ、而してこの事業の爲に雇教師をおいたのである。即ち最初の日曜學校は、たゞ雇教師をおいて、貧民學校のごときものを設立し、聖書と讀書をのみ教へたので、この模範に倣ひ續々諸方に如此學校起り、終に雇教師の代りに、篤志と愛心とを以て働く所の教師が起るに至つ

たのである。其後殊に米國に於ては、教會に附屬する所の學校となり、且つ常に貧民の小兒許でなく、凡ての小兒に聖書を教授する事となつたのである。千八百七十二年よりは七年間の萬國共通日課を制定して、これを以て安息日學校は大に盛になつたと喜ぶ人もあつたが、併し第十九世紀の末に至り、如此課程を以て満足せず、普通の學校同様に年齢に従つて階級を立て、宗教を爲す方が適當であると思ふ人もあつたのである。されば第二十世紀に於て安息日學校も進歩の機會が来るであらふと思ふのである。

(ロ) 奴隸制度

太古より諸國に捕虜を奴隸とするの風習があつて、奴隸を得んが爲には戰爭を起した事も度々あつたのである。前にもいつた如く(第二章の(二)の項)、基督教の起つた時代は、羅馬帝國內に奴隸制度盛大に行はれ、それに教會(第二十五章の(二)の項)は直接奴隸制度を廢止する事なく、たゞ奴隸を懇切に取扱ふ可き事と、來世即ち神の前に於ては自主と奴隸の區別なき事を教へ、而して人類の價値ある事を教ゆるより、間接に奴隸主義に反對したのである。歐羅巴も中世に至り、奴隸制度が漸く次第に廢止されたといふ事は、直接基督教の結果でないとしても、間接に基督教主義の働きといつてもよいのである。然るに不幸にしてアメリカ發見の後、その新殖民地に於て、勞働者の欠乏の爲に、阿弗利加よりコロンボ人を掠奪し來り、之を奴隸とするの惡風早くより起り、その奴隸廢

止に至るまでの奴隸となつたコロンボ人は、幾百萬人であつたか解らぬ程の大多數で、是等の者は爲に非常なる苦痛に遭遇したのである。然るに第十八世紀末に至り、信仰復興の一の結果として奴隸賣買に反對するの運動が起り、數年間の議論の上に、千七百九十二年の法律を以て、千八百八年一月より奴隸賣買を全然禁止したのである。如此運動に就て最も有名なる先導者は、ウイルバーク・オース(Wilberforce)(千七百五十九年—千八百三十三年)で、彼は熱心なる信者であつて、ウエスレーと同様なる熱心を以て、中等以上の社會に對し、應用的基督教を説くにより大事業をなしたが、その中の一つは、奴隸賣買に反對する運動であつたのである。併し奴隸賣買を廢止したといつても、英國の殖民地(殊に西印度諸島)に於ては、猶ほ奴隸制度が行はれ、千八百三十三年に二十億萬圓の賠償金を以てその奴隸を贖ひ、英國に附屬する土地の奴隸制度を全然廢止したのである。米國に於ても、早くより奴隸制度が行はれたが、第十九世紀の初期までに、一般の教會は凡ての奴隸に直に自由を與ふる事の甚だ困難なる事を承知しながら、猶ほ奴隸制度に不同意を表し、出來得る限り早く之を廢止せんと企てたのである。例之千八百十八年に、米國全體の長老教會の大會は、滿場異議なく一致して、奴隸制度は基督教主義に不適當なる事を決議した事があり、又當時の有名なる政治家ワシントンの如きは、南北の區別なく、奴隸制度が米國の自由主義に不適當なるものとして大に之を憂ひ、次第に廢止するの考であつたが如きである。然るに第十九世紀の初期に

北方に於て奴隸制度を次第に廢止するに至つたが、併し不幸にして南方に於ては棉花を耕作する爲に、奴隸の勞働を必要として奴隸制度を贊成し、且つこれが聖書に適應するとの説が起り、千八百三十三年の頃より、南方に於ては諸方の教會内にも、この説が行はれたのである。これに就ては、政治的争論も、又教會の分裂も起つたので、北方に於ても奴隸制度を廢止する事の甚だ困難なる事を感ずる人もあつたのである。兎に角北方の大多數の教會は、奴隸制度の決して基督教に適應せざるといふ意見を以て、その擴張を禁止し、出來可き丈その制度の全廢を企てたのである。然るに終に南北戦争が起り、四年間の非常なる戦争を経てから、その制度を漸く全廢するに至つたといふ事は、蓋しその大根本は宗教的熱心に基いてたのである。

(ハ) 禁酒會

第十八世紀に於て、漸く酒に酔ふ事の災害たる事を愛ひ、飲酒すべからずと説くものもあつたが、併し第十八世紀までは、酒に酔ふ事を罪としても、適度に飲用する事を以て悪事と思はず、一般に行はるゝの風習であつた爲に、教會の按手禮式を執行した時にも、集會の牧師が葡萄酒を飲むの風習が諸方に行はれたのである。然れども千八百十一年頃から、葡萄酒であつても、又勿論濃き酒の如きを飲酒せざるをよしとすといふ説が行はれ、千八百二十六年に、米國禁酒會を設立し、如此主義を唱ふるを以て、この二三十年間の運動の結果、教會内にも酒の如きものを飲むべからずといふ

ふ説が方々に起つたのである。そののみならず、同世紀の中頃、酒類販賣を禁止するの法律を立て、又同時の頃に、酒に酔ふ所の惡癖のあるもの六名が禁酒會を組織し、終に諸方に行はるゝに至り、その上他の禁酒會も幾箇も出來たのである。猶ほ第十九世紀に至り、他方には矯風會を以て諸方の婦人が禁酒大運動を起したのであるが、然るに歐羅巴より移住する所のものが多數あつて、彼等は皆酒類を使用するの風習であつた爲に、禁酒の法律を實施する事は甚だ困難であつたのである。それに禁酒にあらざして所謂節酒をよしと論ずる人も多數あつたが、併し是等の種々なる議論があつたとしても、最良の方法はいまだ解らぬので、この禁酒問題も第二十世紀の一問題であるのである。

(ニ) 基督教青年會

第十九世紀の中頃(千八百四十四年)、ロンドンに於てウヰリヤムス (Williams) といへる實業家により、最初の基督教青年會は設けられ、第十九世紀の末に至り、その運動は愈々盛大となり、基督教の運動の一の大なるものとなつたのである。それで都會に於て大なる青年會館を建築し、體、智、靈の三育を施すを以て大に盡した許でなく、其後に設けられた大學に於ける學生青年會を以て、萬國の學生中に活動をなし、而して萬國の交際を奨励し、凡ての宗派の協同をもうながすものとなつたのである。されば第二十世紀の初期に於て、如此活潑なる基督教的事業は他にないと思

よのである。

(ホ) 共勵會

千八百八十一年に、クラーク (Clark) といへる牧師が、自己の教會内の青年中に、共勵會なるものを設けたのがこれが最初であつて、其後凡ての宗派 即ち萬國にまでその結果が及び、其數は増々多數となり、而して教會内の青年や小兒は、愈々キリストと協同して働くといふ熱心を起すに至つたのである。

(ヘ) 社會主義

新教徒は「信仰によりて義とせらる可し」と説き、各自の責任の重大なるを以て、所謂個人主義を教へ、活ける信仰の結果として國家の爲に盡す可き事を説いたので、又この活ける信仰を以て、國家の上に種々なる改革が行はれ、其上キリストを敬愛する信仰の結果として、最初より貧民や苦しめる者を憐み、之を助く可き事を教へたのである。されば彼等は或は慈善を行ひ、或は種々なる療病院や、孤兒院を立てたが、第十九世紀の末に至り、社會組織の不完全を憂ひ、この社會を改革して、出來得る丈貧窮の原因を放擲せんとする望を起し、これが爲めに働く者が英米に起つたのである。未だこの事も中途にある故に、その結果如何は解らぬが、之れも勿論第二十世紀の大問題である。

第八十五章 千九百年間に於ける基督教の概畧

第一世紀 (第三—十四章)

キリストの昇天後ペテロの如き使徒等が聖靈の能力を蒙る事により、イエスを以てメツシヤとして宣傳し、ユダヤ人の間に基督教會を設立し、其後又アンテオケに於て最初の異邦教會を設立し、而して爾來パウロを以て先導者となし、異邦人中に廣く傳道を開始する事により、所謂世界的基督教となつたのである。この世紀中の大人物ともいふ可きは、實にペテロ、パウロ、ヨハネであつたのである。

第二、三世紀 (第十五—二十七章)

第二、三世紀中には、諸方に幾回となく劇烈なる迫害が起り、其上未信徒中に基督教の辯駁論の著述を爲すものもあつて、之れに對してデヨスチンの如きが幾回か辯證論の著作をなし、基督教の爲に大に論じたのである。それで嘗に教會外部の反對を受けた許でなく、基督教を以て空しき理學なりとして、これを亂さんとするノスチック教の如きが、第二世紀中諸方に行はれ、之に對してイレニアスの如きが歴史的基督教を説き、それに又教會内に所謂預言者と稱ふるものの教訓を尊重し、之を以て直接聖靈の導きを蒙りたりと考ふる所のモムタニ教の如きが起つたので、これに對して議

論が起つたが、併し一般大多数の人々は、如此預言を排斥したのである。然るに北阿弗利加の基督教の最初の先輩者たるテルトリアンの如きは、モムタニ教に加入して普通の教會に反對する態度をとつたのである。第三世紀に至りオリゲンの如き大神學者が出で、基督教の最初の組織神學を立てたのであり、又同世紀に三位一體に就て幾分か議論が起り、イニスは特別なる權能を受けた人間なりと教ゆる者が少數あり、それに又父と子と聖靈の區別を輕んずる所のナベリアスの如きがあつたが、併し大多数の者は以上の兩説をも棄てたので、當時は未だ信仰箇條の如き一定のものはないのである。第二、三世紀の教會政治は、次第に發達を來したが、最初たゞ一ヶ所の教會を攸する監督等のあつたその代りとして、一地方の諸教會を監督する所の監督が起るに至つたのである。この世紀の人物と稱す可き者の中に、辯證論者の代表者としてデヨスチンあり、又殉教者の熱心なる代表者としてはイグチシアスあり、又キアソリック教會の保守主義の代表者としてはイレニアスあり、又北阿弗利加の教會の代表者としてはテルトリアンあり、又神學者の代表者としてはオリゲンあり、監督政治の代表者としてはシプリアンがあつたのである。

第四世紀 (第二十八—三十二章)

この世紀は迫害の最終として是も劇烈なる迫害が起り、其後三百十一年に至りて、漸くこの迫害より脱したのであるが、其翌年最初の基督教的皇帝コンスタンチンが位に登るを以て、教會は爲に外

形的の光榮を受け、從つて異教は全然消滅したのであつたが、併したゞ皇帝の模範にならひ、多數の者が俄然基督教に加はるにより、教會内部には幾分の損害を蒙るに至つたのである。さればその後直ちにアリアスの説に就て議論が起り、爲に第一の大會議を開會したが、併し五十年間の劇烈なる争論を経て、其上に又第二の大會議を以て初めて聖公會は勝利を得たのである。又同世紀に隱遁主義が行はれ、爲にエジプトを初め西方に至るまで、多數の寺院を設立したので、これに入りて完全なる聖潔を求めんとする者が多數あつたのである。この世紀の人物といふ可きは、最初の基督教的皇帝 コンスタンチン、聖公會の大先輩者アサチシアス、大監督の代表者アムブロス、全帝國を支配せし最後の皇帝テオドシアス、大説教家の代表者クリンストムの如きである。

第五世紀 (第三十二—三十八章)

羅馬帝國の東方に於て、キリストの神性と人性に關し、劇烈なる争論が起つたが、第三、及び第四の大會議を以て、この事を決議したけれども、この決議を受けざる者が分離を起し、爲に教會は大きな損害を蒙り、且つ大に衰微したのである。又西方に於ても、罪に就てペラギアスとオーガスチンとの大争論が起り、又同時に西方帝國は次第に野蠻人に敗れをとり、終に滅亡を來したが、然るに羅馬の監督は愈々増々大勢力をしめ、遂に法王といふ位置に登つたのである。この世紀の人物といふ可きは、基督教的學者の代表者デニローム、大學者の代表者オーゴスチン、それに最初の法王レオ第

一世である。

第六世紀 (番外)

東方羅馬帝國に於て、ジヨステニアン帝が暫時の間、光榮を以て帝國を支配したが、又西方羅馬帝國に於ては大混雜が起つたので、別に教會史上には大事件といふ可きものはなかつたのである。

それでこの世紀の大人物といふ可きは、寺院の設立者としては、ベチデクト、又皇帝としては、ジヨステニアン、又法王としては、グレゴリー第一世であつたのである。

第七世紀 (第三十九、四十章)

東方羅馬に於て、回々教の起る事により、亞細亞とアフリカの基督教は大損害を蒙つたが、同時に又西方帝國に於ては英國の改信によりて基督教は大進歩を來したのである。この世紀の人物といふ可きは、回々教の設立者モハメット、英國に於ける傳道者オーゴスチンとアイダンである。

第八世紀 (第四十一、四十二章)

東方羅馬に於て、畫像禮拜の運動が起り、又西方羅馬に於て、獨逸に於ける傳道が盛大となり、同國人の多數が基督教に加入し、又シャールマンがフランク人の王國を鞏固にした爲に、この世紀の末に至りて、皇帝の冠を戴くに至つたのである。この世紀の人物といふ可きは、傳道者の代表者として、ボニフエース、政治家の代表者として、シャールマンである。

第九世紀 (第四十一、四十二章)

東方羅馬に於て、畫像禮拜の議論が起り、終に畫像を廢止するの說勝利をしめたが、又西方羅馬に於て、シャールマンの死後、その帝國は次第に衰頽に傾き終に滅亡したのであるが、然るに北國に於ける帝國が盛に興るに至つたのである。この世紀の人物といふ可きは、シャールマン帝と、傳道者の代表者アンスガーである。

第十世紀 (第四十三章)

この世紀は眞に暗黒時代であつたけれども、オットー第一世が聖羅馬帝國の名稱を以て、帝國を再興し、それに歐羅巴の東方に於ける傳道も盛大となり、この世紀の末に至りては、歐羅巴諸國は多數基督教に加つたのである。この世紀の人物といふ可きは、オットー帝の外にないのである。

第十一世紀 (第四十四—四十七章)

この世紀には東西兩教會の分離が起り、而して羅馬法王の權力が次第に強固となり、又中世神學が次第に起つて、それにこの世紀の末には第一十字軍が組織されたのである。この世紀の人物といふ可きは、大法王グレゴリー第七世と、中世の最初の神學者アンセルムとである。

第十二世紀 (第四十六—四十八章)

この世紀には十字軍が盛に起り、中世の神學が盛大となつたのである。この世紀の人物といふ可きは

は、中世宗教家の代表者としてヘルナルド、十字軍にかりたる帝王の代表者としてフレドリック第一世である。

第十三世紀 (第四十八—五十二章)

法王の権力が最も盛大を極め、十字軍はその終局を告げ、而して中世の神學と中世の宗教的熱心が最も盛に行はれ、又大會堂の建築が大に進歩し、それにフランス派とドミニック派とが組織されたのである。この世紀の大人物といふ可きは、大法王インノセント第三世、大神學者トマス、アキナス、それにフランス派とドミニック派である。

第十四世紀 (第五十三—五十五章)

中世の神學が衰へ、それに法王の権力も微へて、終に法王は佛國のアルウイニアンに移住し、後彼の競争の位置に立つた所の法王が起り、又獨逸に於ては神秘教が起り、又英國に於てはウイクリフが改革説を唱へたのである。この世紀の人物といふ可きは、神學者の代表者としてドンスコタスと、改革者としてウイクリフとであつたのである。

第十五世紀 (第五十三—五十七章)

大會議を以て漸く法王の競争を停止したが、併し教會の首と肢體とを改革せんとする運動は、失敗に歸したのみならず、ホスの如き宗教家を死刑に行つた故に、増々羅馬法王は不品行に陥り、その

政治は愈々腐敗したのである。然るに同世紀に於て印刷機械の發明があり、又古代文學を再び發見したるが爲に、文學の復興が大に行はれ、又同時に近世の地理學と天文學とがこの世紀の末に至りて非常に進歩したのである。この世紀の人物といふ可きは、宗教的熱心家としてホス、又文學復興の代表者としてイラスマスである。

第十六世紀 (第五十八—六十八章)

この世紀の一大事件といふ可きは宗教改革であつたのである。それで改革が起りて種々なる迫害に遭遇し、或は大勝利を得た事もあり、或は滅亡に歸した事もあり、或は羅馬教會の反對運動もあり、而して國々によりてその歴史も經驗も大に異なるが、併し何所に於てもその大問題は同一であつたのである。この世紀の人物といふ可きは、改革の發起者ルーテル、ツウイングリー、新教の大神學者カルヴィン、大豪傑の代表者ノックス、羅馬教の反對運動の代表者ロヨラ、又羅馬教の外國傳道の代表者ザヴィエーである。

第十七世紀 (第六十九—七十四章)

この世紀の大問題は宗教的爭論、或は舊教と新教との爭論、或は新教内の議論であつて、即ち獨逸に於ては三十年間の戦争があり、佛國に於てはルイ第十四世が新教徒に非常に迫害を加へ、和蘭に於てはアルミニアスの説に關する議論があり、英國に於ては聖督派とピューリタン派の争があり、

蘇國に於ては國家政治と長老派との争があつたが、又同世紀に於て米國にては最初の殖民地が開かれ、又英國に組合派と浸禮派とが起つたのである。この世紀の人物といふ可きは、瑞典國王グスタフ・アス、獨逸の敬虔派の先輩者スピーター、佛國の大説教者ボスウエー、和蘭の神學者アルミニウス、英國の大將軍クロムエル、組合派の先輩者ロビンソンとブルースターである。

第十八世紀 (第七十五—七十八章)

この世紀の大事件と大問題とは信仰と合理論の争で、獨逸に於てモレビアン派が宗教的熱心を以て組織されたが、外に合理論が諸方に行はれたのである。又佛國に於ては不信仰が諸方に行はれ、又同世紀の末に至りて、大革命が起つたのである。又英國に於ては自然神學の論に反對して有名な神學者が力をそはめて基督教を論じたが、ウエスレーやホイットフィールドの運動によりて信仰の復興があり、又この世紀の末に至りて外國傳道會社の設立があつたのである。又同世紀の中頃には米國に於ても信仰の復興があつたのである。この世紀の人物といふ可きは、モレビアン派の開始者ジャンゼンドルフ、獨逸の合理論の先輩者セムラー、佛國の不信仰の先輩者ヴォルテール、英國のウエスレー、米國のエドワーズである。

第十九世紀 (第七十九—八十四章)

一般にいふならば、一方には高等批評、不可思議論、進化論等が起つて、宗教に關する種々なる議論があり、又他方には外國傳道又は内國傳道、日曜學校、基督教青年會、禁酒會等を以て、基督教を應用する事が盛大に行はれたのである。羅馬教はヴァチカン會議の決議を以て、羅馬法王の靈的權力を最上に進めたが、併し同時に法王は政權を失ふに至つたのである。獨逸に於て神學研究が盛に行はれ、種々なる説を唱ふる者も幾人か起つたのであり、又英國に於ては所謂オックスフォード運動を以て、監督政治と教會の禮典儀式が大に行はれ、又蘇國に於ては内國傳道と應用的基督教が盛大となり、それに英、米、蘇の三國に於て外國傳道會社が幾箇も設立されたのである。この世紀の人物は夥多あるので、こゝに一々掲ぐる事も出來ず、それに先輩者として選抜する事も頗る困難である。

以上の長歲月に渉る外容の歴史を回顧すれば、その進歩の大事件は實に左の通りである。即ち基督教はユダヤ人の間に起りて凡そ二百五十年の間迫害の下に羅馬帝國に進入し、次第に帝國内の偶像教にうち勝ち、終に帝國の宗教となつたが、直に野蠻人が西歐羅馬を襲撃した爲に、帝國は滅亡に歸し、教會も大災害を蒙つたのである。然るに基督教は次第に長歲月の傳道を以て野蠻人の中に盛大に行はるゝに至り、回々教が西亞細亞と北アフリカに行はれてをる間に、基督教は歐羅巴の宗教となつたのである。第十九世紀の運動により諸方に外國傳道を開始した結果、終に世界主義を次第に行ふに至つたのである。

次に内容の歴史を回顧すれば、最初は別に一定の政治もなき教會が、舊カトリック教會となり、即ち監督政治の下にありて、部會と大會とにより組織されたものとなつたが、又西方の教會は次第に羅馬の監督を首とするにより、終に羅馬教會となつたのである。それに東方の教會は羅馬の監督を首とする事なかつた爲に、次第に希臘教會と羅馬教會との二箇に分かれ、又その後羅馬教會の歴史と、その誤謬の教理に反對したる運動の結果として、羅馬教より分離して新教が出来たのみならず、新教は羅馬教とは異なりて、第一、國によりその組織は異なり、第二、種々なる宗派の起るにより、多數の教會と宗派とが起つたのである。それで如何に改革の大主義をともに保ち、又幾分協同運動を爲す事があつても、教會政治や信仰箇條の細末や教會禮拜に就きては、種々なる差別があつたのである。

猶ほ教會の信仰の進歩の上より見れば、最初よりイエス、キリストを以て教主となし、贖罪事業と來世の幸福を求むる所の信仰とは同一であつたが、第十四世紀の第一の大會議を以て、初めて信仰箇條を制定し、その後數百年間の發達を經、羅馬教の信仰箇條を中世の神學者の運動によりて鞏固にしたのである。然るに改革者は根本的に同一の主義を採つたけれども、種々なる點に於て異なる所の神學を立て、而して羅馬教の大誤謬を棄つるにより一致したが、併し彼等も又基督教を詳細に説明するが爲に、種々なる異説を立て、全然一致する事は出来ないものである。

現今大多數の教會の信仰の大意とする所は左の如くである。

- 第一、萬物の造主なる唯一の神は、愛の深き我等の父たる事、
- 第二、神の子イエス、キリストは我等を救はんが爲にこの世に出生し、天父の聖意を悉く成就し、且つ十字架にかゝりて贖罪事業を成就し、墓より甦り昇天して凡の信徒の主となりし事、
- 第三、神の靈は我等人類の心の中に働き、我等を導き、慰め、助力を與ふる事、
- 第四、キリストを教主として信仰するものは、神の恩恵を味ひ、罪を赦され、正義を行ふの力を與へられ、來世に於て永遠無窮にして完全なる生命を蒙る可き事、

第八十六章 教理歴史の概畧

普通の教會史を以て教理史を精細に記載するといふ事は出来ぬが、併し教理歴史は教會史の一部分である故に、之を省畧するといふ事は不當のことである。されば前陳の歴史に於て、時代の順序に循ひ教理に關する運動を記述したが、これよりは各問題に就て教理史を簡單に掲ぐるであらふ。

(イ) 聖書

最初より現今に至るまで、一般の教會は、聖書を以て神意を表現するものとなし、これを尊重する

のである。

(A) 聖經

第二十七章に於てのべた如く、聖經として確定された事は、たゞ一時の事ではなく、第二世紀から一般の教會は四福音書、使徒行傳、パウロの書簡、約翰福音書、彼得前書を聖經として疑はなかつたが、他の書即ち希伯來書、雅各書、彼得後書、約翰第二、三書、猶太書、黙示録に就ては所々に於て幾分の疑問となつてをうたつたのであるが、併し第四世紀の末までには是等の書も皆聖經として諸方に受け容れられたのである。舊約聖書の事をいへば、之は最初より疑點をいれられずして我等の聖經の中に包含され、舊約聖書として受け容れられたのであるが、この他これと同一に希伯來語の聖經中に包含される書、所謂偽經といふものがあつて、之は希臘語の舊約聖書中には包含されてゐる故に、希伯來語を知らざるたゞ希臘語の譯文のみを讀む所の信徒は、之をも舊約聖書として受け容れたのである。それで東方に於て之が希伯來語の聖經に包含されてない事を發見し、之を受け容れざるものもあつたが、併し西方に於ては改革の起るまで、之を聖經として受け容れてをうたつたのである。然るに改革の時に當て改革者は多數之を聖經にあらすとして排斥したのである。尤も猶ほ之を有益なる書として随分使用するものもあつたので、羅馬教會はツラントの大會議に於て(第六十七章の(イ)の項)、之をも聖經として受け容る可きものと決議したのである。其故に今日までも聖經に就て

舊約聖書に左の如き差別がある。即ちその書はエスラス前後書、トビト書、ユダト書、以士帖書の最後の部分、ソロモンの智慧、エクレシアステカス書、バルク書、三義人の讚美歌、スザナ書、但以理書の最後の部分、マナセ王の祈禱書、マカビー前後書であるが、是等の中には随分興味ある歴史や、有益なる話もあるけれども、又無益なる昔話もあるのである。

B) インスピレーション

往昔よりインスピレーションを重んずるの心を以て、一般の信徒は聖書を其儘聖書の著作であるとする程、又人たる著者の職務を輕んずるの風があつて、従つて聖書には毫も誤謬はないと斷言するものもあつたのである。近世に至り、インスピレーションに就き、極端説を唱ふるものも幾人かあるが、併しその記者たるものが更に誤謬なく聖書を記載する能力、即ちインスピレーションを如何に蒙つたとしても、其文章なるもの即ち外形は矢張人間の所業であると説くものも随分ある。それに記者は聖靈に満され、神の道を著作する所の特別の能力を蒙つたのであるが、併し歴史的事實を記載する場合には、多少の誤謬あるを免れなかつたといふ人もあるのである。其故に現今に至りては聖書を尊重する點に於て、同一であるとしても、其インスピレーションを説明する點に就ては、到底同一意見を有する事は餘程困難である。

(C) 註釋

古代の註釋に一大缺點のあるといふ事は、歴史的註釋法を以て満足せず、所謂靈的意義を無理に附せんとの考から、聖書を一種の譬喩とする傾向がある爲で、彼の有名なるオリゲンの如きは如此極端なる解釋法を試みたのである。尤もその目的は聖書の深意を求めんとするにあつたから、實證すべきではあるが、併し歴史の意義の餘り興味なき所を棄て、それに靈的意義を無暗に加ふるといふ事は、實に註釋といふ可きものでなく、所謂空想といふ可きものである。その甚しき實例を挙げれば、ブロンラハムの僕(の三百十八人)鐵十四ノ十四(といふ數を以て、たゞ歴史的に解釋するを以て満足せず、其文字の形式を以て、キリストの十字架の譬喩としたと云ふ如きは、實に空想の甚しきものといはねばならぬ。然るに第四世紀の末に至り、アンタオケの神學者、特に有名なるクリンストム(第三十二章)は、歴史の意義即ち實際の意義を研究するにより、真正の解釋法の途を開いたのである。それで今日までも多數の註釋者は、これと同一の方法、即ち實際の意義を説明する事を目的とするのであるが、併し多分近世に至るまでも、或は教理を論ずるに、或は敬虔の念を奨励するに、猶ほ無理に聖書を説明する風が時々あつたのである。

(D) 傳説

最初の教會は常に聖書のみでなく、使徒や、又は使徒の弟子の教を聞きたる者等が、猶ほ生存して居る間は、その口述によれる談話を筆に歡迎したといふは當然の事で、敢て奇怪とすべきではな

聖書

が、第二世紀よりノスチック教の虚しさ理學や、又モムタニ教の預言者の教に反對して、聖書を以て信仰個條の大基礎として受くるに至り、即ち有名なる大教會を通して傳はつた所の信仰個條を尊重したが、併し聖書を以て唯一の標準としたのである。例之アサチシアスが「聖書は眞理を表現するに充分なり」といひ、又オーゴスチンも「信仰と正義とに關するものは悉く聖書中に教へらる」といつたのである。然れども時々起る所の異端に反對するが爲め、古代より傳つた信仰個條を尊重するの精神から、次第に聖書と共にカトリック教會の教、即ち教會を通して古代から傳つた信仰個條までを尊重するの傾向となり、次第に聖書と傳説を共に尊重するの心が起つた故に、改革者は羅馬教會の誤つた教を廢止せんものと、傳説を以つて信仰の標準と爲す可きにせざ、たゞ聖書を以つて教會の唯一の標準と爲すべしなりと力強く斷言し、且つ信徒たる者は各自聖書を研究し、又聖書の助力を以て説明すべきものなる事を教へたが、然るに羅馬教會は聖書と傳説とをもに聖書の教訓なりとして受け容れ、信仰の標準とす可き事を斷言し、而して一般の信徒は教會の説明する所に従ひ、聖書を解釋す可き事を決定したのである。其故舊新兩教會がともに聖書を受け容れるといつても、傳説とそれに聖書を説明するの權能に就ては、大なる差異があつたのである。

(ロ) 神に就て

最初より今日まで、一般の信徒が唯一なる神の存在と、神の全能全智なる事とを信する點に於て、

皆同一であつた事は勿論である。

(A) 有神論

神の存在を信する點に就ては、最初より今日まで、毫も差別はなかつたが、併し神の存在の證據を示し、又有神論を説明する點に於て、時と人によりて幾分づゝ差異があるので、古代教會の神學者は多數神の存在に就ては無論として、たゞ神の眞なる、聖なる、唯一なるを論じたのだが、然るに多くは天然を以て神の所業となし、而して造物者の智と能とを説明したのである。第十一世紀のアンセルム(第四十七章)は、先天論即ち實體學的議論を以て、神といへる理想のある事より、神の存在を初めて説いたのであり、又中世の神學者は、多く後天論を以て、神の所業を説明するに、神の存在を論じたのである。それに近世に至りては進化論の起つた爲に、有神論は多少變化を來したが、併しその大體に於ては變りなく、寧ろ宇宙を以て全智全能の創造者の所業なりと論ずるといふは實に重大なる論といふ可きで、又それと同時に、人類の靈魂を以て神の存在を論ずる事もあつたのである。

(B) 凡神論

古代の某神學者、特にテルトリアンの如きは、神の存在を強固に論ずるに、神にも形體のある事を教へたが、アレキサンデリアのクレントやオリゲンの如き神學者は、前と異なる意見を以て、神の

靈物たる事を説いたので、往昔より今日まで、大多數の信徒は神の靈物たる事を深く信ずるとともに、神の人格ある事を信じたのであるが、併し時々凡神論の如き説明を加ふるものも多少あつたのである。第九世紀の某一人の學者は、神は自己の行爲を知らざるものなりといふ程凡神論に類したる説明を加へ、又自由の靈の兄弟(第五十四章の(一)の項)の如きは、凡神論的説を主張した爲に大に信仰の道より迷ふに至つたが、併し第十四世紀の神秘教派(第五十四章)は、時々凡神論的語を使用して却て神の人格を確信したのである。猶ほ近世に至りても、神が萬有の中に働き給ふといふ事を現すに、凡神論的語を使用する人もあるが、大多數の神學者は、宇宙は神の直接の所業なりと教へながら、猶ほ神は宇宙に遙かに優るものなりと説くのである。

(C) 自然神教

造物者たる神の存在を信するけれども、猶ほ奇跡や默示の如きを排斥し、たゞ基督教の要點として受け容る可きものは神の存在及び來世の賞罰の如きものなりとする説は、第十七世紀より第十八世紀の中頃までに英國に起り、幾分行はれたのであるが、併し反對論にうちまけて、終に消滅したのである(第七十三章の(二)の項)。

(D) 不可思議論

不可思議論は第十九世紀の論で、之には二種類あつて、即ち教會内に行はるゝ所の、智力を以ては到

底神の事を知る事は出来ぬが、併し信仰を以て神に接近し、神の恩恵を得べき事を教ゆるものあり、又教會外に於て行はるゝ所の、神の存在は全然打ち消す事は出来ぬとしても、人智を以て神の事を悟るの能力はない故に、神に關する所の教は、實に疑はしきものであるとする人もあつたのである。尤も是等の説は敢て教會内に感化を及ぼす事は餘りなかつたので、即ち神の事を充分に悟る事は出来ぬとしても、往昔より今日まで大抵の信徒は皆神の存在や、神の智慧や、神の能力や、神の慈愛に就て疑ふ事なく、確に知る事の出来るものと信じてゐるのである（第八十一章の（ホ）の項）。

(ハ) キリストの神性

最初より凡ての信徒は勿論、キリストを以て基督教の創建者、又は信徒の大模範者として尊敬したのであるが、そののみでなく、九分通まで大多数の人は、キリストを以て神の子として尊敬したのである。尤も時としてこれに就き疑惑を抱き、議論を起した事もあるのである。

(A) 第二、三世紀に於ける論

凡てこの時代の教會は、キリストの前生を説き、且つ天父と同じくキリストを尊敬したが、併し父と子との關係を精細に論ずる時には、未だ確定したる説明はなかつた故に、某者は父と子との區別、或は子が父よりも劣るといふ事を極端に説いたのである。そののみでなく、キリストは天より特別の能力を授けられた人であると論ずるものも少はあつたが、この説は教會内に餘り行はるゝ事はな

かつたのである。第三世紀のナヘリアスの如きは、父と子と聖靈の區別を輕んじ、同一なる神が、前には父の資格を以て現はれ、其後に子の資格を以て現はれ、又其後に聖靈の資格を以て現はれたと説いたが、之れも盛に行はるゝ事はなかつたのである（第二十二章の（ハ）（ニ）の項）。

(B) アリアスに關する論

第四世紀にアリアスが、ロスは神に造られたものであつて、それで人類に遙かに優るものであるけれども、神よりは劣るもので、即ち位貴き天使の如きものであると教へて、大争論が起り、第一の會議（三百二十五年）は、この説に對し、子なるキリストは天父と同一なる神なりと確定したが、又五十年間の劇烈なる争論を経て、第二の會議（三百八十二年）を以て、全然アリアスの説は滅亡したのである（第三十章）。其後數百年間、アリアスの説を主張するものは、たい野蠻人のみであつて、帝國内の諸教會は悉く子が父と同一の神であるといふ説を受け容れ、又野蠻人も次第に同一の説を信するに至り、第十六世紀まではこの事に就て議論はなかつたのである。

(C) ソシナスの説

第十六世紀にソシナスが、キリストは神の子にあらずして、たい彼は不思議に出生し、特別の權威を授けられ、死して後墓より甦り、昇天して貴き位にあげられたる人なりと説くにより、基督教を道理に適する様説明せんと試みたのである。然れども如此説はボーランドに於て數十年間隨

分盛に行はれたが、併し次第に消滅したのである(第七十三章の(イ)の項)。

(D) ユニテリアンの説

第十八世紀の下半、英米に於ても、アリアスの如き説を信する数人のものがあつたが、その徒の所説は、次第に變更を來し、第十九世紀の初頃には、キリストはたゞ理想的の人間、或は正義の貴重なる模範者となすのであつた。それでこのユニテリアン派には一定の信仰箇條といふ可きものもないので、人によりキリストに關する説は幾分づゝ異つてをるが、即ちイエスを以て完全の模範者と爲す事を拒むものもあり、又イエスを以て神と承認する事は困難であるとしても、大にキリストを尊敬する人もあるのである。前にもいつた如く、ユニテリアン派の中には有名な文學者もあり、又仁者も幾人かあるが、併しその教會の数は甚だ少ないのである(第八十三章の(イ)の項)。

(三) キリストの神人兩性の關係

キリストを神として尊敬する所の大多數の信者は、その神性と人性との關係を説明するに時々議論を生じ、或は不幸にして激烈なる紛争をも起したのである。

(A) イエスの人性を否定する者

第二世紀のノスチク教の説では、物質は罪惡の原因であるといふの故を以て、キリストが實際に肉體を受け給ひし事を否定したのである。併し之は教會外の異端であつたが、多分教會内にもキ

リストを過度に尊敬するの餘り、實際に肉體を受け給ひし事を否定し、たゞ肉體の如き形狀をのみ受け給ふたと説くものも數人あつたのである。然るに如此説に反對する者は、使徒ヨハチの語を以て「キリストの肉體となりて臨り給へることを認むは神は神よりいづ」(約壹四ノ二)と斷言したのである。又オグチシアス(第十五章)は、キリストが實際に世の中に生れ、又實際に死し、又實際に甦り給ふたといふ事を説いたが、少數の人を除くの外、一般の信徒はイエスの人となり給ふた事を皆承認したのである。

(B) アポリナリスの説

第四世紀の中頃アポリナリスといへる監督は、キリストの神性を強固に説かんが爲に、キリストの靈魂は神であり、而してその肉體は人であると教へたが、即ち神の子はたゞ人の肉體のみを受け給ふたと説いたので、如此説明よりすれば、一體キリストは人の如き肉體を以ては苦痛に遭遇し、又死し、又甦り給ふたとしても、實際のキリスト自身、即ちその靈魂は神であつたといふのである。然れば如此キリストは純全たる人間ではなく、又人類の完全なる模範でもなく、又人の如く試惑に遭遇する事もなく、而して人を贖ふ事も出來ざる筈である云反對論を以て、一般の神學者は如此説を排斥し、第二の大會議を以てこれを禁止したのである(第三十七章の(イ)の項)。

(C) チストリアスの説に關する論

當時神の母としてマリヤを過度に尊敬する一般の信徒の傾向に反対して、第四世紀のキリストリアスは、多分キリストの神性と人性との區別を極端に説明したのであらうと思ふが、今はキリストリアスの實際の貌は解らぬので、たゞ反対論者のいふ所にれば、キリストリアスの説では、神の子をマリヤの子、即ちロムスとイエスは全然一人ではなく、たゞ共同した所の二人であるといふのである。それでマリヤより生れたイエスといふ人は、神の子の心を表現するものであるといふので、第三の會議(四百三十一年)を以て、如此説を排斥し、又キリストリアスを教會より破門したのであるが、併しキリストリアスに属する徒は教會より分離し別に一派を立てたので、これが最初の分裂であつたのである(第三十七章の(一)(二)の項)。

(D) 一性論者

キリストリアスの説に反対して、キリストの一體たる事を極端に論ずるにより、新説論が起つたが、其論は今了解し難いのであるけれども、たゞ一言を以て云はば、キリストの一體たる事を論ずるに於て、其人性を大抵否定したので、第四の會議(四百五十二年)を以て、一人のキリストは神性を以ては天父と同一なる事、又人性を以ては人類と同一なる事を決議したのである。然るに不幸にして東方に於ては、此説明を受け容れざる爲、分離した教會も幾個あつたのである。それでこの頃までこの説明を完全する者をして受け容る者も大多數あるのである(第三十七章の(三)(四)の項)。

(E) キリストの意志に関する論

意志が若し二個あるとすれば、二人であるといふの論を以て、キリストは一個の意志、即ち神性の意志のみを有し給ふと説く人があつて、如く此説を以て一性論を唱ふる分派を聖公會に降伏せしめんと企てたのであつたが、併し不幸にして却て新説論が起り、第六の會議(六百八十年)を以て、キリストには神人の兩性がある故に、意志も又二個ありとの事を決議したので、一個の意志ある事を主張するものは、遂に分離するに至つたのである(第四十章の(一)(二)の項)。

(F) 近世の議論

ルートルはキリストの身體は何所に於ても信徒が執行する所の聖晚餐のパンや葡萄酒と同にあるといふ事を論ずると同時に(第六十一章の(一)の項)、キリストの人性は神性と結合する事により、存在するものであると説いたが、併しカルヴァンは之と異なり、キリストの神性は存在であるけれども、人性は有限であつて、天國にあると教へたのである。

第六四の大會議の説明を以て、如何に満足する者が大多數あるといつても、この説明を好まず、即ち一人の者が同時に二個の性を有するといふは、決して信す可き事にあらずとして、却て「神の子は神と匹く在る所の事を棄難きこと、意はず、反て己を虚らし、僕の貌をとりて人の如かれり」(第二十六、七)といへる語に猶ほ、神の子はその全善全能を棄て、人の如きものとなつたといへる説

を採るものも少敷かつたのであるが、如此説は或は次第に教會内に行はるゝに至るであらうと思ふのである。

(ホ) 聖靈に就て

最初より今日まで諸の教會は、聖靈を以て人の心中に働き給ふ所の神の靈的運動として尊重し、之を信するものである。それで聖靈を以て神の活動力とするものもあつたかも知れぬが、併し大抵皆聖靈の人格を信じ、又父と子と聖靈として三一の神を信するのである。諸聖靈の働きの方法、即ち改心或は信仰復興の如き方法に就き、應用的の説明は幾分づゝ異なつてをるが、併し教理的の議論は餘りないのである。然ればキリストを神の子として尊敬する所の信徒は、聖靈の人格を信じ、且つ三位一體の如き説を受け容るゝに困難はないのである。勿論アリウスや或はソシナスの説を唱ふる者か、或はユニテリアン派の徒は、聖靈を以て神の活動力とするのである。

(A) モムタナス

第二世紀のモムタナスは、使徒時代の如く、預言者たるものは古代より繼續して神の道を宣傳する機能を有して教會内に起る可きであると説き、世界の歴史を分ち、基督紀元前を天父の時代とし、又キリスト在世中を神の子の時代とし、而して基督以後の時代を聖靈の時代としたのである。而して所謂預言者なるもの、教訓を受けざる教會を輕蔑し、たゞ自己の教會のみを以て、靈的教會なり

と誇つたのである。テルトリアンの如きは實に以上の如き説を受け容れたが、併し一般の教會は之の新預言者を以て聖靈の所業となさず、却て惡魔の所業なりとして排斥し、如何に聖靈が教會内に働き給ふ事を信するといつても、基督時代より傳つた所の教訓、即ち新約聖書を以て、信仰の標準とすべき事を斷言したのである(第十九章の(二)の項)。

(B) 聖靈に關する説明

第二、三世紀の教會は、教會内に働き給ふ聖靈を信するけれども、父と子と聖靈の關係を詳細に確定せず、たゞ第一の大會議(三百二十五年)に於て、キリストの事を詳かに決定したのみで、聖靈に就ては「聖靈をも信す」といへる單に一言のみを加へたのである。第四世紀に、マケドニアスといへる監督が、聖靈は神の僕であるといふ説を唱へたが、之に對して當時の聖公會に屬する神學者は、聖靈の人格と、又神たる事とを詳細に説明したのである。其故に改正のニカヤ信仰箇條には、左の一ヶ條が加へられてある。即ち「生命を興へ給ふ主なる聖靈を信す、彼は父より出るものにして、父と子とともに尊敬す可きもの、又預言者を通じて教を垂れ給ふものなり」といふのである。その後聖公會の信徒は、悉く父と子と聖靈は皆同位地の神であつて、尊敬すべきものたる事を信する様になつたのである。

(C) 聖靈が子より出づる事